

Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド





Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド

Copyright 2009 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

本書には、富士通株式会社により提供および修正された技術情報が含まれています。

Sun Microsystems, Inc. および富士通株式会社は、それぞれ本書に記述されている製品および技術に関する知的所有権を所有または管理しています。これらの製品、技術、および本書は、著作権法、特許権などの知的所有権に関する法律および国際条約により保護されています。これらの製品、技術、および本書に対して Sun Microsystems, Inc. および富士通株式会社が有する知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> に掲載されているひとつまたは複数の米国特許、および米国ならびにその他の国におけるひとつまたは複数の特許または出願中の特許が含まれています。

本書およびそれに付属する製品および技術は、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。富士通株式会社と Sun Microsystems, Inc. およびそのライセンサーの書面による事前の許可なく、このような製品または技術および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。本書の提供は、明示的であるか黙示的であるかを問わず、本製品またはそれに付随する技術に関するいかなる権利またはライセンスを付与するものでもありません。本書は、富士通株式会社または Sun Microsystems, Inc. の一部、あるいはそのいずれかの関連会社のいかなる種類の義務を含むものでも示すものでもありません。

本書および本書に記述されている製品および技術には、ソフトウェアおよびフォント技術を含む第三者の知的財産が含まれている場合があります。これらの知的財産は、著作権法により保護されているか、または提供者から富士通株式会社および/または Sun Microsystems, Inc. へライセンスが付与されているか、あるいはその両方です。

GPL または LGPL が適用されたソースコードの複製は、GPL または LGPL の規約に従い、該当する場合に、一般ユーザーからの申し込みに応じて入手可能です。富士通株式会社または Sun Microsystems, Inc. にお問い合わせください。

この配布には、第三者が開発した構成要素が含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

Sun, Sun Microsystems, Sun のロゴ, Java, Netra, Solaris, Sun StorEdge, docs.sun.com, OpenBoot, SunVTS, SunSolve, CoolThreads, J2EE および Sun Fire は、米国およびその他の国における Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。

富士通および富士通のロゴマークは、富士通株式会社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

SPARC64 は、Fujitsu Microelectronics, Inc. および富士通株式会社が SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の商標です。

SSH は、米国およびその他の特定の管轄区域における SSH Communications Security の登録商標です。

OPEN LOOK および Sun™ Graphical User Interface は、Sun Microsystems, Inc. が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。Sun Microsystems, Inc. は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインターフェースの概念の研究開発における Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。Sun Microsystems, Inc. は Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK GUI を実装しているかまたは Sun の書面によるライセンス契約を満たす Sun Microsystems, Inc. のライセンス実施権者にも適用されます。

United States Government Rights – Commercial use. U.S. Government users are subject to the standard government user license agreements of Sun Microsystems, Inc. and Fujitsu Limited and the applicable provisions of the FAR and its supplements.

免責条項: 本書または本書に記述されている製品や技術に関して富士通株式会社、Sun Microsystems, Inc. またはそのいずれかの関連会社が行う保証は、製品または技術の提供に適用されるライセンス契約で明示的に規定されている保証に限りです。このような契約で明示的に規定された保証を除き、富士通株式会社、Sun Microsystems, Inc. およびそのいずれかの関連会社は、製品、技術、または本書に関して、明示、黙示を問わず、いかなる種類の保証も行いません。これらの製品、技術、または本書は、現状のまま提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われたいものとします。このような契約で明示的に規定されていないかぎり、富士通株式会社、Sun Microsystems, Inc. またはそのいずれかの関連会社は、いかなる法理論のもとで第三者に対しても、その収益の損失、有用性またはデータに関する損失、あるいは業務の中断について、あるいは間接的損害、特別損害、付随的損害、または結果的損害について、そのような損害の可能性が示唆されていた場合であっても、適用される法律が許容する範囲内で、いかなる責任も負いません。

本書は、「現状のまま」提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われたいものとします。

原典:	Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI Procedures Guide Manual Code: C120-E575-01EN
-----	--

目次

- はじめに xvi
- 1. CLI の概要 1
 - CLI について 2
 - CLI 階層アーキテクチャー 2
 - CLI のターゲットの種類 2
 - CLI コマンド 3
 - CLI コマンドのオプション 4
 - CLI コマンドのターゲット 5
 - コマンドのプロパティ 6
 - ILOM 3.0 のプロパティと ILOM 2.x のプロパティの比較 6
 - CLI コマンドの構文 7
 - 共通の CLI コマンド文字列 8
 - コマンドの実行 13
 - ▼ コマンドを個別に実行する 13
 - ▼ 組み合わせたコマンドを実行する 13
- 2. ILOM コマンド行インタフェースを使用するために準備すべき事柄 15

- 3. ILOM へのログインと ILOM からのログアウト 17
 - 初回ログインの前に 18
 - ILOM へのログイン 18
 - ▼ root ユーザーアカウントを使用して ILOM にログインする 19
 - ▼ ユーザーアカウントをセットアップする 19
 - ▼ ユーザーとして ILOM にログインする 20
 - 失ったパスワードの回復 20
 - ▼ 失ったパスワードを回復する 21
 - ILOM からのログアウト 21
 - ▼ ILOM からログアウトする 21
 - 次の手順 22
- 4. ILOM の通信設定 23
 - ネットワークの設定 24
 - 作業を開始する前に 24
 - ▼ ホスト名およびシステム識別子の割り当て 24
 - ▼ ネットワーク設定の表示と構成 26
 - ▼ ILOM の既存 IP アドレスを編集する 28
 - ▼ DNS 設定の表示と構成 29
 - ▼ シリアルポート設定の表示と構成 30
 - ▼ HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする 31
 - Secure Shell の設定 33
 - ▼ セキュリティー保護された遠隔 SSH 接続を確立する 33
 - ▼ SSH の有効化または無効化 33
 - ▼ 現在の鍵を表示する 34
 - ▼ 新しい SSH 鍵を生成する 35
 - ▼ SSH サーバの再起動 35

5. ユーザーアカウントの管理	37
ユーザーアカウントの設定	39
▼ シングルサインオンの設定	39
▼ ユーザーアカウントの追加	40
▼ ユーザーアカウントのパスワードを変更する	40
▼ ユーザーアカウントに役割を割り当てる	41
▼ ユーザーアカウントの削除	41
▼ 個々のユーザーアカウントを表示する	42
▼ ユーザーアカウントのリストを表示する	42
▼ ユーザーセッションのリストを表示する	43
▼ 個々のユーザーセッションを表示する	44
SSH 鍵の設定	44
▼ SSH 鍵を追加する	45
▼ SSH 鍵を削除する	46
Active Directory の設定	46
▼ Active Directory の <code>strictcertmode</code> を有効にする	47
▼ Active Directory の <code>certstatus</code> を確認する	47
▼ Active Directory 証明書を削除する	48
▼ Active Directory 設定の表示と構成	49
▼ Active Directory の認証と承認のトラブルシューティング	54
LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) の設定	55
▼ LDAP サーバを設定する	55
▼ LDAP 用の ILOM の設定	56
LDAP/SSL の設定	57
▼ LDAP/SSL の <code>strictcertmode</code> を有効にする	57
▼ LDAP/SSL の <code>certstatus</code> を確認する	58
▼ LDAP/SSL 証明書を削除する	58
▼ LDAP/SSL 設定の表示と構成	59
▼ LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング	64

- RADIUS の設定 65
 - ▼ RADIUS を設定する 65
 - RADIUS コマンド 66

- 6. システム部品の管理 69
 - 部品情報の表示およびシステム部品の管理 70
 - ▼ 部品情報の表示 70
 - ▼ 部品を取り外す準備 71
 - ▼ 部品をサービスに復帰させる 72
 - ▼ 部品の有効および無効の切り替え 72

- 7. システム部品の監視 73
 - システムセンサー、インジケータ、および ILOM イベントログの監視 74
 - ▼ センサー測定値を表示する 75
 - ▼ システムインジケータの設定 76
 - ▼ クロックの設定 77
 - ▼ イベントログ出力をフィルタリングする 78
 - ▼ ILOM イベントログの表示とクリア 79
 - ▼ 遠隔 syslog 受信側の IP アドレスを設定する 81
 - ▼ 障害の状態を表示する 82
 - ▼ システムの問題を診断するために SP データを収集する 83

- 8. システム警告の管理 85
 - 警告ルールの設定の管理 86
 - 作業を開始する前に 86
 - ▼ 警告ルールを作成または編集する 87
 - ▼ 警告ルールを無効化する 88
 - ▼ テスト警告を生成する 88
 - 警告ルール設定を管理するための CLI コマンド 89
 - 電子メール通知警告用の SMTP クライアントの設定 91
 - ▼ SMTP クライアントを有効にする 91

- 9. 消費電力の監視 93
 - 消費電力インタフェースの監視 94
 - 作業を開始する前に 94
 - ▼ システムの合計消費電力を監視する 95
 - ▼ 実際の消費電力を監視する 96
 - ▼ 個々の電源装置の消費電力を監視する 96
 - ▼ 使用可能な電力を監視する 97
 - ▼ ハードウェア構成の最大消費電力の監視 97
 - ▼ 許容消費電力を監視する 97
 - ▼ 電力ポリシーを設定する 98
- 10. ILOM 設定のバックアップおよび復元 99
 - ILOM 設定のバックアップ 100
 - ▼ ILOM 設定のバックアップ 100
 - ILOM 設定の復元 101
 - ▼ ILOM 設定を復元する 101
 - バックアップ XML ファイルの編集 103
 - ▼ バックアップ XML ファイルの編集 103
 - ILOM 設定のリセット 106
 - ▼ ILOM 設定をデフォルトにリセットする 106
- 11. ILOM ファームウェアの更新 107
 - ILOM ファームウェアの更新 108
 - 作業を開始する前に 108
 - ▼ ILOM ファームウェアのバージョンを識別する 109
 - ▼ SPARC ベースのシステムに新しいファームウェアをダウンロードする 109
 - ▼ ファームウェアイメージを更新する 110
 - ▼ ファームウェア更新時のネットワーク障害から回復する 112
 - ILOM SP のリセット 112
 - ▼ ILOM SP のリセット 112

12. 遠隔ホストの管理	113
ストレージリダイレクトの初期セットアップタスクの実行	114
作業を開始する前に	114
▼ Storage Redirection サービスを起動する	115
▼ Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールする	117
ストレージデバイスをリダイレクトするために Storage Redirection CLI を起動する	118
作業を開始する前に	119
▼ コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する	120
▼ Storage Redirection サービスが動作していることを確認する	121
▼ Storage Redirection CLI のヘルプ情報を表示する	122
▼ ストレージデバイスのリダイレクトを開始する	123
▼ アクティブなストレージリダイレクトを表示する	124
▼ ストレージデバイスのリダイレクトを停止する	124
▼ ストレージリダイレクトのデフォルトネットワークポートを変更する	2121 125
電源状態コマンドの発行	126
SPARC システムのハードウェア問題の診断	127
作業を開始する前に	127
▼ 診断モードを設定する	128
▼ 診断トリガーを指定する	128
▼ 診断のレベルを指定する	129
▼ 診断出力の詳細度を指定する	130
A. CLI コマンドリファレンス	131
B. Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法	151
索引	155

はじめに

『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド』では、ILOM の必須セットアップ手順を実行する方法と、ILOM の機能にアクセスする際に実行する一般的な設定手順について説明します。

本書は、ネットワークングの概念および基本的なシステム管理プロトコルについての知識があるシステム管理者を対象にしています。

注 – 本書の説明は、ILOM をサポートするサーバに限定されます。「すべてのサーバプラットフォーム」という説明は、ILOM をサポートしている富士通製のすべてのサーバを指します。使用するサーバによっては、ILOM の一部の機能がサポートされていないことがあります。ILOM の補足マニュアルと各サーバのプロダクトノートを事前に確認してください。

安全な使用のために

このマニュアルには当製品を安全に使用していただくための重要な情報が記載されています。当製品を使用する前に、このマニュアルを熟読してください。また、このマニュアルは大切に保管してください。

富士通は、使用者および周囲の方の身体や財産に被害を及ぼすことなく安全に使っていただくために細心の注意を払っています。本製品を使用する際は、マニュアルの説明に従ってください。

関連マニュアル

本書で説明されている情報を完全に理解するには、本書を次の表に示すマニュアルと一緒に使用することをお勧めします。SPARC Enterprise シリーズのすべてのマニュアルの最新版は、次の Web サイトから入手できます。

グローバルサイト

<http://www.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>

日本語サイト

<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>

まず、『ILOM 3.0 概念ガイド』を読み、ILOM の特徴と機能を理解してください。ILOM がサポートしている新しいシステムをセットアップするには、『ILOM 3.0 入門ガイド』を参照してください。ここでは、ネットワークに接続する手順、ILOM への初回ログイン手順、ユーザーアカウントやディレクトリサービスを設定する手順が記載されています。その後、その他の ILOM タスクを実行するために使用する ILOM インタフェースを決定してください。インタフェースが決定したら、選択したインタフェース用の ILOM 3.0 手順ガイドを参照してください。

次の表に、ILOM 3.0 に関する各種マニュアルを示します。

タイトル	説明	コード
Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド	ILOM の特徴および機能に関する情報	C120-E573
Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド	ネットワーク接続、ILOM への初回ログイン、およびユーザーアカウントやディレクトリサービスの設定に関する情報および手順	C120-E576
Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド	ILOM Web インタフェースを使用して ILOM 機能にアクセスするための情報および手順	C120-E574
Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド	ILOM CLI を使用して ILOM 機能にアクセスするための情報および手順	C120-E575
Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド	SNMP または IPMI 管理ホストを使用して ILOM 機能にアクセスするための情報および手順	C120-E579

ILOM 3.0 の各種マニュアルに加えて、関連する ILOM 補足マニュアルに、使用しているサーバプラットフォームに固有の ILOM 機能およびタスクが記載されています。ILOM 3.0 の各種マニュアルと、使用しているサーバプラットフォームに付属の ILOM 補足マニュアルを一緒に使用してください。

ILOM 3.0 のバージョン番号

ILOM 3.0 では、システムで動作している ILOM のバージョンを識別しやすいように、新しいバージョン番号体系が採用されています。この番号体系では、たとえば、a.b.c.d.e のように、5 つのフィールドを持つ文字列が使用されます。

- a – ILOM のメジャーバージョンを表します。
- b – ILOM のマイナーバージョンを表します。
- c – ILOM の更新バージョンを表します。
- d – ILOM のマイクロバージョンを表します。マイクロバージョンは、プラットフォームまたはプラットフォームグループごとに管理されます。詳細については、使用しているプラットフォームのプロダクトノートを参照してください。
- e – ILOM のナノバージョンを表します。ナノバージョンは、マイクロバージョンの増分イテレーションです。

たとえば、ILOM 3.1.2.1.a は、次のような意味になります。

- ILOM 3 は ILOM のメジャーバージョン
- ILOM 3.1 は ILOM 3 のマイナーバージョン
- ILOM 3.1.2 は ILOM 3.1 の 2 つ目の更新バージョン
- ILOM 3.1.2.1 は ILOM 3.1.2 のマイクロバージョン
- ILOM 3.1.2.1.a は ILOM 3.1.2.1 のナノバージョン

製品識別情報

製品識別情報により、システムは、それ自体を登録し、その識別情報に関連付けられたサービス契約に基づいて特定の自動サービスを使用できるようになります。製品識別情報を使用すると、システムを特定することができます。また、システムに関するサービスを依頼する際には、保守担当者に製品識別情報を提供する必要があります。製品識別情報には、次の情報が含まれます。

- `product_name`: 製品の販売名。
- `product_part_number`: 製品が固有のシリアル番号を持つように製造時に割り当てられるネームスペース。同じ製品パーツ番号が複数の製品に割り当てられることはありません。「602-3098-01」などです。
- `product_serial_number`: 製造時に製品の各インスタンスに割り当てられる固有の識別情報。「0615AM0654A」などです。
- `product_manufacturer`: 製品の製造元。「FUJITSU」などです。

表 P-1 では、ILOM で使用される共通の製品識別情報について説明します。

表 P-1 共通の製品識別情報

必要な情報	ターゲット	最小プロパティ
サーバ (ラック搭載型およびブレード) に関する基本製品情報	/SYS	<code>product_name</code> <code>product_part_number</code> <code>product_serial_number</code> <code>product_manufacturer</code>
シャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module、CMM) に関する基本製品情報	/CH	<code>product_name</code> <code>product_part_number</code> <code>product_serial_number</code> <code>product_manufacturer</code>
ブレードに関する基本シャーシ情報	/SYS/MIDPLANE	<code>product_name</code> <code>product_part_number</code> <code>product_serial_number</code> <code>product_manufacturer</code>
シャーシ内でのブレードの位置	/SYS/SLOTID	<code>type</code> <code>class</code> <code>value</code>
ラック内でのシャーシの位置	/CH	<code>rack_location</code>

書体と記号について

書体または記号*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	.login ファイルを編集します。 ls -a を実行します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	% su Password:
AaBbCc123	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	rm <i>filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「 」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「システム部品の管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	% grep `^#define \ XV_VERSION_STRING`

* 使用しているブラウザにより、これらの設定と異なって表示される場合があります。

ご意見をお寄せください

本書に関するご意見、ご要望または内容に不明確な部分がありましたら、マニュアル番号、マニュアル名称、ページおよび具体的な内容を下記 URL の『お問い合わせ』から送付してください。

SPARC Enterprise マニュアルのサイト

<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>

第1章

CLI の概要

項目

説明	リンク
ILOM CLI の特長と機能について学習する	<ul style="list-style-type: none">• 2 ページの「CLI について」• 2 ページの「CLI 階層アーキテクチャー」• 2 ページの「CLI のターゲットの種類」• 6 ページの「ILOM 3.0 のプロパティと ILOM 2.x のプロパティの比較」• 7 ページの「CLI コマンドの構文」• 8 ページの「共通の CLI コマンド文字列」• 13 ページの「コマンドの実行」

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• ILOM の概要	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
• Web インタフェース	• Web インタフェースの概要	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』
• SNMP および IPMI ホスト	• SNMP の概要 • IPMI の概要	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

この章では、ILOM コマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) を使用して手順を実行する前に知っておく必要のある基本的な情報を提供します。

CLI について

ILOM CLI は、Distributed Management Task Force 仕様の『Server Management Command-Line Protocol Specification, version 11.0a.8 Draft』(DMTF CLP) に準拠しています。この仕様全体は、次のサイトで参照できます。

<http://www.dmtf.org/>

DMTF CLP には、サーバの状態、アクセス方法、またはインストールされているオペレーティングシステムにかかわらず、1 つ以上のサーバを対象にした管理インタフェースがあります。

DMTF CLP アーキテクチャーでは、階層的なネームスペースをモデル化しており、システム管理下にあるすべてのオブジェクトを含むツリーがあらかじめ定義されています。このモデルでは、少数のコマンドを使用してターゲットの大きなネームスペースを操作します。ターゲットは、オプションやプロパティーで変更できます。このネームスペースでは、各コマンド動詞のターゲットが定義されています。

CLI 階層アーキテクチャー

CLI のターゲットの種類

次の表に、ILOM CLI で使用できるさまざまな階層方式を示します。使用できる方式は、使用している特定のサーバプラットフォームによって異なります。

表 1-1 ILOM のターゲットの種類

ターゲットの種類	説明
* /SP	このターゲットの種類の下にあるターゲットおよびプロパティーは、ILOM サービスプロセッサ (Service Processor, SP) の設定や、ログおよびコンソールの表示に使用されます。
* /CMM	ブレードプラットフォームでは、このターゲットの種類が /SP の代わりになり、ILOM シャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module, CMM) の設定に使用されます。
* /SYS	このターゲットの種類の下にあるターゲットおよびプロパティーは、インベントリ、環境、およびハードウェアの管理を提供します。ターゲットは、すべてのハードウェアコンポーネントの命名法に直接対応しており、その一部は物理的なハードウェアに印字されています。

表 1-1 ILOM のターゲットの種類 (続き)

ターゲットの種類	説明
* /CH	ブレードプラットフォームでは、このターゲットの種類が /SYS の代わりになり、シャーシレベルのインベントリ、環境、およびハードウェアの管理を提供します。ターゲットの種類は、すべてのハードウェアコンポーネントの命名法に直接対応しており、その一部は物理的なハードウェアに印字されています。
* /HOST	このターゲットの種類の下にあるターゲットおよびプロパティは、ホストオペレーティングシステムの監視および管理に使用されます。

注 – 階層内のこれらのターゲットの種類の一部にアクセスする方法は、使用しているサーバプラットフォームによって異なります。

サービスプロセッサは、/SP ネームスペースと、システム全体のネームスペースである /SYS または /HOST の 2 つのネームスペースにアクセスできます。/SP ネームスペースでは、サービスプロセッサの管理および設定を行うことができます。/SYS または /HOST ネームスペースでは、管理対象システムハードウェアに関するその他の情報にアクセスできます。

CLI コマンド

ILOM CLI は、次の表に示す DMTF CLP コマンドをサポートしています。

注 – CLI コマンドの大文字と小文字は区別されます。

表 1-2 CLI コマンド

コマンド	説明
cd	オブジェクトのネームスペースを操作します。
create	ネームスペースにオブジェクトを作成します。
delete	ネームスペースからオブジェクトを削除します。
exit	CLI のセッションを終了します。
help	コマンドとターゲットに関するヘルプ情報を表示します。
load	指定されたソースから指定されたターゲットにファイルを転送します。
dump	ターゲットから URI で指定した遠隔位置にファイルを転送します。
reset	ターゲットの状態をリセットします。
set	ターゲットのプロパティを指定した値に設定します。
show	ターゲットとプロパティについての情報を表示します。

表 1-2 CLI コマンド (続き)

コマンド	説明
start	ターゲットを起動します。
stop	ターゲットを停止します。
version	実行中のサービスプロセッサのバージョンを表示します。

CLI コマンドのオプション

ILOM CLI は、次のオプションをサポートしていますが、コマンドによってはサポートしていないオプションがあります。help オプションは、どのコマンドでも使用できます。

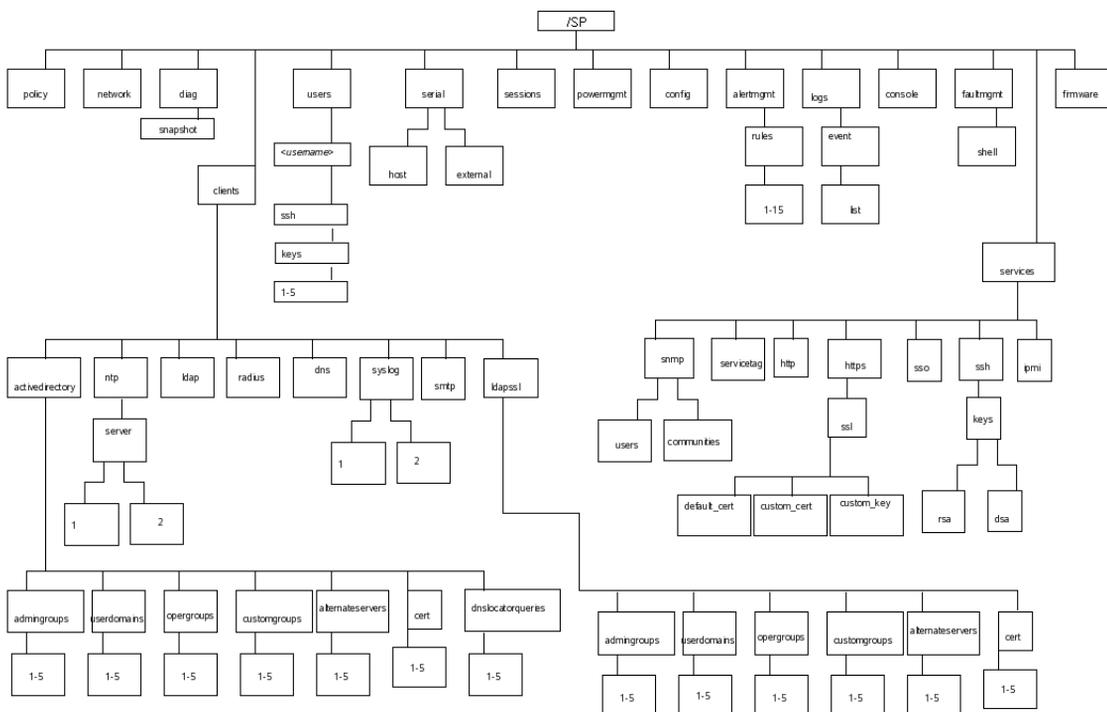
表 1-3 CLI オプション

長文形式オプション	省略形式	説明
-default		コマンドのデフォルト機能のみを実行します。
-destination		データの宛先を指定します。
-display	-d	ユーザーが表示したいデータを表示します。
-force	-f	操作をただちに実行するように指定します。
-help	-h	ヘルプ情報を表示します。
-level	-l	現在のターゲットと、特定レベルのすべてのターゲットのコマンドを実行します。
-output	-o	コマンド出力の内容と形式を指定します。ILOM では、表形式でターゲットおよびプロパティを表示する -o table のみをサポートしています。
-script		コマンドに関連する通常の警告またはプロンプトをスキップします。
-source		ソースイメージの場所を表示します。

CLI コマンドのターゲット

ネームスペース内のすべてのオブジェクトはターゲットです。

図 1-1 ILOM CLI ターゲットツリーの /SP の例



コマンドのプロパティ

プロパティは、設定可能な属性であり、各オブジェクトに固有です。

ILOM 3.0 のプロパティと ILOM 2.x のプロパティの比較

ILOM 2.x から ILOM 3.0 にアップグレードし、2.x スクリプトを更新する場合は、ILOM 3.0 コマンドを実装するために ILOM 3.0 が使用する新しい方法を理解する必要があります。表 1-4 に、ILOM 2.x のプロパティと、それらに代わる新しい ILOM 3.0 の実装を示します。

表 1-4 ILOM 2.x のプロパティと新しい ILOM 3.0 の実装

ILOM 2.x のプロパティ	ILOM 3.0 の実装
/SP/clients/syslog/destination_ip1	/SP/clients/syslog/1/address
/SP/clients/syslog/destination_ip2	/SP/clients/syslog/2/address
/SP/clients/activedirectory/ getcertfile (証明書のロード)	次をターゲットとして load コマンドを使用 /SP/clients/activedirectory/cert
/SP/clients/activedirectory/getcer tfile (証明書の削除)	次とともに set コマンドを使用 /SP/client/activedirectory/cert clear_action=true
/SP/clients/activedirectory/ getcertfile (証明書の復元)	この機能はない
/SP/clients/activedirectory/ certfilestatus	/SP/clients/activedirectory/cert/ certstatus
/SP/clients/activedirectory/ ipaddress	/SP/clients/activedirectory/ address
/SP/clients/activedirectory/alerna tiveservers/getcertfile (証明書のロード)	次をターゲットとして load コマンドを使用 /SP/clients/activedirectory/ alernativeservers/cert
/SP/clients/activedirectory/ alernativeservers/getcertfile (証明書の削除)	次とともに set コマンドを使用 /SP/client/activedirectory/ alernativeservers/cert clear_action=true
/SP/clients/activedirectory/ getcertfile/alernativeservers/ (証明書の復元)	この機能はない
/SP/clients/activedirectory/ alernativeservers/certfilestatus	/SP/clients/activedirectory/ alernativeservers/cert/certstatus
/SP/clients/activedirectory/ alernativeservers/ipaddress	/SP/clients/activedirectory/ alernativeservers/address

表 1-4 ILOM 2.x のプロパティと新しい ILOM 3.0 の実装 (続き)

ILOM 2.x のプロパティ	ILOM 3.0 の実装
/SP/clients/radius/ipaddress	/SP/clients/radius/address
/SP/clients/ldap/ipaddress	/SP/clients/ldap/address
/SP/cli/commands	ターゲット名とともに help コマンドを使用
/SP/diag/state	/HOST/diag/state
/SP/diag/generate_host_nmi	/HOST/generate_host_nmi
/SP/diag/mode	/HOST/diag/mode
/SP/diag/level	/HOST/diag/level
/SP/diag/verbosity	/HOST/diag/verbosity

CLI コマンドの構文

ILOM CLI を使用するときは、情報を次のコマンド構文で入力します。 **command** [options] [target] [properties]

たとえば、次のように入力します。

```
set /SP/services/https port=portnumber servicestate=enabled|disabled
```

注 - この章の構文例では、/SP/ で始まるターゲットを使用しますが、使用しているサーバプラットフォームによっては、/CMM/ で始まるターゲットに置き換わる場合があります。サブターゲットは、ILOM を使用するすべてのサーバプラットフォームで共通です。

共通の CLI コマンド文字列

表 1-5 一般的なコマンド

説明	コマンド
コマンドとターゲットについての情報を表示します	<code>help</code>
特定のコマンドについての情報を表示します	<code>help <string></code>
すべての有効なターゲットを表示します	<code>help targets</code>
現在のターゲットを変更して表示します	<code>cd</code>
ターゲットから URI で指定した遠隔位置にファイルを転送します	<code>dump</code>
CLI からログアウトします	<code>exit</code>
ILOM で実行中の ILOM のファームウェアバージョンを表示します	<code>version</code>
ターゲットをリセットします	<code>reset</code>
クロック情報を表示します	<code>show /SP/clock</code>
アクティブな ILOM セッションを表示します	<code>show /SP/sessions</code>
ILOM と BIOS ファームウェアを更新します	<code>load -source tftp://newSPimage</code>
ILOM のイベントログのリストを表示します	<code>show /SP/logs/event/list</code>

表 1-6 ユーザーコマンド

説明	コマンド
ローカルユーザーを追加します	<code>create /SP/users/user1 password=password role=a u c r o s</code>
ローカルユーザーを削除します	<code>delete /SP/users/user1</code>
ローカルユーザーのプロパティを変更します	<code>set /SP/users/user1 role=operator</code>
すべてのローカルユーザーについての情報を表示します	<code>show -display [targets properties all] -level all /SP/users</code>
LDAP 設定についての情報を表示します	<code>show /SP/clients/ldap</code>
LDAP 設定を変更します	<code>set /SP/clients/ldap binddn=proxyuser bindpw=proxyuserpassword defaultrole=a u c r o s address=ipaddress</code>

表 1-7 ネットワークとシリアルポートの設定コマンド

説明	コマンド
ネットワーク設定情報を表示 します	<code>show /SP/network</code>
ILOM のネットワークプロパ ティを変更します。IP アド レスなどの特定のネットワ ークプロパティを変更する と、アクティブセッションが 切断されます	<code>set /SP/network pendingipaddress=ipaddress pendingipdiscovery=dhcp static pendingipgateway=ipgateway pendingipnetmask=ipnetmask commitpending=true</code>
外部シリアルポートについ ての情報を表示します	<code>show /SP/serial/external</code>
外部シリアルポート設定を 変更します	<code>set /SP/serial/external pendingspeed=integer commitpending=true</code>
ホストへのシリアル接続につ いての情報を表示します	<code>show /SP/serial/host</code>
ホストシリアルポート設定を 変更します	<code>set /SP/serial/host pendingspeed=integer commitpending=true</code>
注: この速度設定は、ホストの オペレーティングシステムの シリアルポート 0、COM1、 または /dev/ttyS0 の速度設 定と一致させてください	

注 - show コマンドと set コマンドでターゲット /SP/serial/host を指定するこ
とは、SPARC サーバではサポートされていません。SPARC サーバでは仮想コンソ
ールが実装され、物理コンソールは実装されません。

表 1-8 警告管理コマンド

説明	コマンド
警告についての情報を表示 します。最大 15 件の警告を 構成できます	<code>show /SP/alertmgmt/rules/1...15</code>
IPMI PET 警告を構成します	<code>set /SP/alertmgmt/rules/1...15 type=ipmipet destination=<i>ipaddress</i> level= down critical major minor</code>
v3 SNMP トラップ警告を構 成します	<code>set /SP/alertmgmt/rules/1...15 type=snmptrap snmp_version=3 community_or_username=<i>username</i> destination=<i>ipaddress</i> level= down critical major minor</code>
メール警告を構成します	<code>set /SP/alertmgmt/rules/1...15 type=email destination=<i>email_address</i> level= down critical major minor</code>

表 1-9 システム管理アクセスコマンド

説明	コマンド
HTTP 設定についての情 報を表示します	<code>show /SP/services/http</code>
HTTPS への自動リダイレ クトを有効にするなどの HTTP 設定を変更します	<code>set /SP/services/http port=<i>portnumber</i> secureredirect= enabled disabled servicestate=enabled disabled</code>
HTTPS アクセスについ ての情報を表示します	<code>show /SP/services/https</code>
HTTPS 設定を変更します	<code>set /SP/services/https port=<i>portnumber</i> servicestate=enabled disabled</code>
SSH DSA 鍵の設定を表示 します	<code>show /SP/services/ssh/keys/dsa</code>
SSH RSA 鍵の設定を表示 します	<code>show /SP/services/ssh/keys/rsa</code>

表 1-10 クロック設定コマンド

説明	コマンド
ILOM のクロックを設定して、主 NTP サーバと同期させます	<code>set /SP/clients/ntp/server/1 address=ntpIPAddress</code>
ILOM のクロックを設定して、副 NTP サーバと同期させます	<code>set /SP/clients/ntp/server/2 address=ntpIPAddress2</code>

表 1-11 SNMP コマンド

説明	コマンド
SNMP 設定についての情報を表示します。デフォルトの SNMP ポート番号は 161 で、v3 が有効です	<code>show /SP/services/snmp engineid=snmpengineid port=snmpportnumber sets=enabled disabled v1=enabled disabled v2c=enabled disabled v3=enabled disabled</code>
SNMP ユーザーを表示します	<code>show /SP/services/snmp/users</code>
SNMP ユーザーを追加します	<code>create /SP/services/snmp/users/snmpusername authenticationpassword=password authenticationprotocol=MD5 SHA permissions=rw ro privacypassword=password privacyprotocol=none DES</code>
SNMP ユーザーを削除します	<code>delete /SP/services/snmp/users/snmpusername</code>
SNMP public (読み取り専用) コミュニティーについての情報を表示します	<code>show /SP/services/snmp/communities/public</code>
SNMP private (読み書き可能) コミュニティーについての情報を表示します	<code>show /SP/services/snmp/communities/private</code>
SNMP public コミュニティーを追加します	<code>create /SP/services/snmp/communities/public/comm1 permission=ro rw</code>
SNMP private コミュニティーを追加します	<code>create /SP/services/snmp/communities/private/comm2 permission=ro rw</code>
SNMP コミュニティーを削除します	<code>delete /SP/services/snmp/communities/comm1</code>

表 1-12 ホストシステムのコマンド

説明	コマンド
ホストシステムまたはシャーシの電源を起動します	<code>start /SYS</code> または <code>start /CH</code>
ホストシステムまたはシャーシの電源を停止します (正常な停止)	<code>stop /SYS</code> または <code>stop /CH</code>
ホストシステムまたはシャーシの電源を停止します (強制的に停止)	<code>stop [-f force] /SYS</code> または <code>stop [-f force] /CH</code>
ホストシステムまたはシャーシをリセットします	<code>reset /SYS</code> または <code>reset /CH</code>
ホストコンソールに接続するセッションを開始します	<code>start /SP/console</code>
ホストコンソールに接続していたセッションを停止 します (正常な停止)	<code>stop /SP/console</code>
ホストコンソールに接続していたセッションを停止 します (強制的に停止)	<code>stop [-f force] /SP/console</code>

表 1-13 コマンドの出力オプションのフィルタリング

説明	フィルタリングされたコマンド
7月17日に開始されたアクティブな ILOM セッションを表示します	<code>show /SP/sessions -level all starttime=="*Jul 17*"</code>
Admin 役割を持つユーザーを表示します	<code>show /SP/users -level all role=="a*"</code>
User Management 役割と Console 役割「のみ」を持つユーザーを表示します	<code>show /SP/users -level all role=="uc"</code>
すべての SNMP トラップ警告を表示します	<code>show /SP/alertmgmt -level all type=="snmptrap"</code>
すべての無効になっているサービスを表示します	<code>show /SP/services -level all servicestate==disabled</code>
IP 1.2.3.4 の NTP アドレスサーバを使用する NTP クライアントを表示します	<code>show /SP/clients/ntp -level all address=="1.2.3.4"</code>
0D01B で始まるシリアル番号を持つすべての FRU を表示します	<code>show /SYS fru_serial_number=="0D01B*" -level all</code>
INFINEON によって製造されたすべてのメモリーモジュールを表示します	<code>show /SYS -level all type=="DIMM" fru_manufacturer=="INFINEON"</code>

表 1-13 コマンドの出力オプションのフィルタリング (続き)

説明	フィルタリングされたコマンド
アラームの状態が「メジャー」のすべての電源装置を表示します	<code>show /SYS -level all type=="Power Supply" alarm_status==major</code>
DIMM またはハードディスクであるすべての部品を表示します	<code>show /SYS type=="(Hard Disk",DIMM) -level all</code>
upper_nonrecov_threshold の値が 2.89 または 60V のすべての電圧センサーを表示します	<code>show /SYS type==Voltage upper_nonrecov_threshold=="2.*", "60.*"</code>

コマンドの実行

ほとんどのコマンドでは、実行するにはターゲットの場所を指定してからコマンドを入力します。これらの操作は、個別に実行することも、同じコマンド行で組み合わせることもできます。

▼ コマンドを個別に実行する

1. cd コマンドを使用して、ネームスペースに移動します。

たとえば、次のように入力します。

```
cd /SP/services/http
```

2. コマンド、ターゲット、および値を入力します。

たとえば、次のように入力します。

```
set port=80
```

または

```
set prop1=x
```

```
set prop2=y
```

▼ 組み合わせたコマンドを実行する

- `<command><target>=value` という構文を使用して、単一のコマンド行でコマンドを入力します。

たとえば、次のように入力します。

```
set /SP/services/http port=80
```

または

```
set /SP/services/http prop1=x prop2=y
```


第2章

ILOM コマンド行インタフェースを使用するために準備すべき事柄

このガイドに示す手順を実行する前に、次の準備すべき事柄を確認してください。

準備すべき事柄

手順	説明	関連する節	関連ガイド
1	ILOM SP (CMM またはサーバ) との初期通信を確立する必要があります。	<ul style="list-style-type: none">ILOM への接続	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』
2	すでに ILOM でユーザーアカウントを作成している必要があります。	<ul style="list-style-type: none">ユーザーアカウントの追加と権限の割り当て (Web インタフェース)ユーザーアカウントの追加と権限の割り当て (CLI)	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

第3章

ILOM へのログインと ILOM からのログアウト

項目

説明	リンク
準備すべき事柄を確認する	• 18 ページの「初回ログインの前に」
ILOM にはじめてログインする	• 19 ページの「root ユーザーアカウントを使用して ILOM にログインする」
ユーザーアカウントをセットアップする	• 19 ページの「ユーザーアカウントをセットアップする」
一般ユーザーとして ILOM にログインする	• 20 ページの「ユーザーとして ILOM にログインする」
ILOM からログアウトする	• 21 ページの「ILOM からログアウトする」
失ったパスワードを回復する	• 21 ページの「失ったパスワードを回復する」

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概要	• 「ILOM の使用開始プロセス」 • 「CLI を使用した ILOM の初期セットアップ手順」	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』
• Web インタフェース	• ILOM へのログインと ILOM からのログアウト	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

この章は、ILOM のログインおよびログアウト手順のクイックリファレンスとして使用してください。詳細は、『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』に示されている初回ログインのプロセスおよび手順を参照してください。

初回ログインの前に

この章の手順を開始する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- データセンター環境で使用するサーバでの ILOM のセットアップ方法を計画します。『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』の「ILOM との通信を確立するための初期設定ワークシート」を参照してください。
- ネットワーク接続を使用せずにシリアルポート経由で ILOM に接続するか、ネットワーク経由で ILOM にログインします。シリアル直接接続を使用してログインするには、ワークステーション、端末、または端末エミュレータと、サーバの SER MGT ポート (モジュラーシャーシシステムを使用している場合はシャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module、CMM) ポート) にシリアルケーブルを接続します。ネットワーク接続を使用してログインする場合は、サーバまたは CMM の NET MGT ポートに Ethernet ケーブルを接続します。詳細は、使用しているプラットフォームのマニュアルを参照してください。
- ネットワーク設定を行います。DHCP 接続または静的ネットワーク接続を使用できます。デフォルトで、ILOM は、DHCP を使用してネットワーク設定を取得しようとします。『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』の「ILOM への接続」を参照してください。

ILOM へのログイン

項目

説明

リンク

ILOM にログインしてユーザーアカウントをセットアップする

- [19 ページの「root ユーザーアカウントを使用して ILOM にログインする」](#)
 - [19 ページの「ユーザーアカウントをセットアップする」](#)
 - [20 ページの「ユーザーとして ILOM にログインする」](#)
-

▼ root ユーザーアカウントを使用して ILOM にログインする

ILOM CLI にはじめてログインする際は、SSH および root ユーザーアカウントを使用します。

- 次のように入力して、root ユーザーアカウントを使用して ILOM CLI にログインします。

```
$ ssh root@system_ipaddress  
Password: changeme
```

ILOM CLI のプロンプト (->) が表示されます。

▼ ユーザーアカウントをセットアップする

ILOM にログインしたら、一般 (root 以外の) ユーザーアカウントを作成する必要があります。この一般ユーザーアカウントを使用して、使用しているシステムおよび環境の ILOM 設定を行います。

ユーザーアカウントをセットアップするには、次の手順を実行します。

- 次の 5 つのユーザークラスのいずれかでユーザーアカウントをセットアップします。
 - ローカルユーザー
 - Active Directory ユーザー
 - LDAP ユーザー
 - LDAP/SSL ユーザー
 - RADIUS ユーザー

最大 10 のローカルユーザーアカウントを作成するか、ディレクトリサービスを設定することができます。ユーザーアカウントのセットアップに関する情報は、[37 ページの「ユーザーアカウントの管理」](#)を参照してください。

▼ ユーザーとして ILOM にログインする

注 – ここに示す手順を使用して、ILOM にログインし、ユーザーアカウントまたはディレクトリサービスが正常に機能していることを確認してください。

ユーザーとして ILOM にログインするには、次の手順を実行します。

1. Secure Shell (SSH) セッションを使用して、ユーザー名とサーバ SP または CMM の IP アドレスを指定し、ILOM にログインします。

たとえば、次のように入力します。

```
$ ssh username@ipaddress
```

または

```
$ ssh -l username ipaddress
```

パスワードの入力を求める ILOM のログインプロンプトが表示されます。

2. ユーザーアカウントのユーザー名とパスワードを入力します。

```
<hostname>: username
```

```
Password: password
```

ILOM CLI のプロンプト (->) が表示されます。

失ったパスワードの回復

事前に設定された default ユーザーアカウントを使用して、失ったパスワードを回復したり、root ユーザーアカウントを再作成したりすることができます。root および default ユーザーアカウントの詳細については、『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』の「root および default ユーザーアカウント」を参照してください。

▼ 失ったパスワードを回復する

作業を開始する前に

- この手順は、サーバのある場所に行き実際に実行する必要があります。

失ったパスワードを回復するには、次の手順を実行します。

1. default ユーザーアカウントを使用して ILOM シリアルコンソールにログインします。

たとえば、次のように入力します。

```
SUNSP-0000000000 login: default
Press and release the physical presence button.
Press return when this is completed...
```

2. サーバのある場所に来ていることを証明します。

サーバのある場所に来ていることの証明方法については、使用しているプラットフォームのマニュアルを参照してください。

3. シリアルコンソールに戻って、Enter を押します。

パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

4. default ユーザーアカウントのパスワードを入力します: **defaultpassword**

注 – この時点でパスワードを再設定することをお勧めします。40 ページの「[ユーザーアカウントのパスワードを変更する](#)」を参照してください。

ILOM からのログアウト

▼ ILOM からログアウトする

ILOM からログアウトするには、次の手順を実行します。

- コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> exit
```

次の手順

ILOM にログインし、ユーザーアカウントをセットアップしたら、ILOM の機能を設定できます。この『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド』の残りの章では、ILOM の機能にアクセスするために実行できるタスクについて説明します。

第4章

ILOM の通信設定

項目

説明	リンク
ネットワークの設定	<ul style="list-style-type: none">• 24 ページの「ホスト名およびシステム識別子の割り当て」• 26 ページの「ネットワーク設定の表示と構成」• 28 ページの「ILOM の既存 IP アドレスを編集する」• 29 ページの「DNS 設定の表示と構成」• 30 ページの「シリアルポート設定の表示と構成」• 31 ページの「HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする」
Secure Shell の設定	<ul style="list-style-type: none">• 33 ページの「セキュリティ保護された遠隔 SSH 接続を確立する」• 33 ページの「SSH の有効化または無効化」• 34 ページの「現在の鍵を表示する」• 35 ページの「新しい SSH 鍵を生成する」• 35 ページの「SSH サーバの再起動」

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• ILOM のネットワーク設定	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
• 概要	• ILOM への接続	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』
• Web インタフェース	• ILOM の通信設定	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』
• IPMI と SNMP ホスト	• ILOM の通信設定	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

ネットワークの設定

項目

説明	リンク
準備すべき事柄を確認する	• 24 ページの「作業を開始する前に」
ホスト名とシステム識別子を割り当てる	• 24 ページの「ホスト名およびシステム識別子の割り当て」
ネットワーク設定の表示と構成	• 26 ページの「ネットワーク設定の表示と構成」
既存の IP アドレスを編集する	• 28 ページの「ILOM の既存 IP アドレスを編集する」
DNS 設定の表示と構成	• 29 ページの「DNS 設定の表示と構成」
シリアルポート設定の表示と構成	• 30 ページの「シリアルポート設定の表示と構成」
HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする	• 31 ページの「HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする」

作業を開始する前に

ILOM の通信を設定する前に、常に同じ IP アドレスが ILOM に割り当てられるようにしてください。これは、初期設定のあとに静的 IP アドレスを ILOM に割り当てるか、または DHCP サーバを設定して常に同一 IP アドレスを ILOM に割り当てることによって行います。これにより、ネットワーク上で ILOM を簡単に検出できるようになります。デフォルトで、ILOM は、DHCP を使用してネットワーク設定を取得しようとしています。

▼ ホスト名およびシステム識別子の割り当て

作業を開始する前に

- ホスト名とシステム識別子を割り当てるには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ホスト名またはシステム識別子を割り当てます。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. SP ホスト名およびシステム識別子のテキストを設定するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。

```
-> set /SP hostname=text_string
```

```
-> set /SP system_identifier=text_string
```

各表記の意味は次のとおりです。

- ホスト名には英数字を使用でき、ハイフンを含めることができます。ホスト名は最大 60 文字まで入力できます。
- システム識別子には、標準的なキーボードの任意のキーを使用したテキスト文字列を使用できます。ただし、引用符は除きます。

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP hostname=Lab2-System1
```

```
-> set /SP system_identifier=DocSystemforTesting
```

この設定の場合、show コマンドの出力は次のようになります。

```
-> show /SP
/SP
  Targets:
    alertmgmt
    .
    .
    .
    users
  Properties:
    check_physical_presence = false
    hostname = Lab2-System1
    system_contact = (none)
    system_description = SUN BLADE X8400 SERVER MODULE, ILOM
                        v3.0.0.0, r31470
    system_identifier = DocSystemforTesting
    system_location = (none)
  Commands:
    cd
    reset
    set
    show
    version
```

▼ ネットワーク設定の表示と構成

作業を開始する前に

- ネットワーク設定を表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。ネットワーク設定を構成するには、Admin (a) 役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ネットワーク設定を表示および構成します。

1. ILOM の CLI にログインします。

2. コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> show /SP/network
```

3. set コマンドを使用し、変更するすべての設定を入力します。

これらのコマンドは、組み合わせたコマンドで実行することができます。13 ページの「[組み合わせたコマンドを実行する](#)」を参照してください。

注 – 一連のプロパティをすべて変更し、保留されているすべての値がコマンドに入力された場合にのみ、true に確定します。

注 – 設定は、commitpending=true を設定するとすぐに有効になります。ネットワーク経由で ILOM に接続している場合、ネットワーク設定を行うと、アクティブなセッションが切断されることがあります。変更を確定する前にすべてのシステムを設定してください。変更を確定したら、ILOM に再接続する必要があります。

例

複数のネットワーク設定を DHCP から静的割り当て設定に変更するには、次のように入力します。

```
-> set /SP/network pendingipdiscovery=static pendingipaddress=  
nnn.nn.nn.nn pendingipgateway=nnn.nn.nn.nn pendingipnetmask=nnn.nn.nn.nn  
commitpending=true
```

ターゲット、プロパティ、および値

ILOM のネットワーク設定では、次のターゲット、プロパティ、および値が有効です。

表 4-1 ネットワーク設定の ILOM ターゲット、プロパティ、および値

ターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/network	ipaddress	読み取り専用 (値はシステムによって更新される)	
	ipdiscovery		
	ipgateway		
	ipnetmask		
	macaddress	ILOM の MAC アドレス	
	commitpending	true none	none
	pendingipaddress	<IP アドレス none>	none
	pendingipdiscovery	dhcp static	dhcp
	pendingipgateway	<IP アドレス none>	none
	pendingipnetmask	<ipdotteddecimal>	255.255.255.0
	dhcp_server_ip	読み取り専用 (値は SP が DHCP アドレスを受け取ったときに更新される)	
	state	enabled disabled	none

▼ ILOM の既存 IP アドレスを編集する

作業を開始する前に

- 既存の IP アドレスを編集するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、サーバ SP または CMM に以前に割り当てられた既存の IP アドレスを編集します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 次のいずれかのコマンドを入力して、SP の作業用ディレクトリを設定します。
 - ラック搭載型のスタンドアロンサーバの場合: `cd /SP/network`
 - シャーシブレードサーバモジュールの場合: `cd /SP/network`
 - シャーシ CMM の場合: `cd /CMM/network`
3. `show` コマンドを入力して、割り当てられている IP アドレスを表示します。
4. 次のコマンドを入力して、既存の設定を変更します。

コマンド	説明と例
<code>set pendingipaddress=<ipaddress></code>	このコマンドに続けて、サーバ SP または CMM に割り当てる静的 IP アドレスを入力します。
<code>set pendingipnetmask=<ipnetmask></code>	このコマンドに続けて、サーバ SP または CMM に割り当てる静的ネットマスクアドレスを入力します。
<code>set pendingipgateway=<ipgateway></code>	このコマンドに続けて、サーバ SP または CMM に割り当てる静的ゲートウェイアドレスを入力します。
<code>set pendingipdiscovery=<ipdiscovery></code>	このコマンドを入力して、サーバ SP または CMM で静的 IP アドレスを設定します。
<code>set commitpending=true</code>	このコマンドを入力すると、指定したネットワーク設定が割り当てられます。

たとえば、次のように入力します。

```
set pendingipaddress=129.144.82.26
set pendingipnetmask=255.255.255.0
set pendingipgateway=129.144.82.254
set pendingipdiscovery=static
set commitpending=true
```

遠隔 SSH 接続を使用して ILOM に接続した場合、以前の IP アドレスを使用して確立された ILOM への接続はタイムアウトします。ILOM に接続するには、新しく割り当てられた設定を使用します。

▼ DNS 設定の表示と構成

作業を開始する前に

- DNS 設定を表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。
DNS 設定を構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、DNS 設定を表示および構成します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで次のコマンドを入力して、外部シリアルポートの設定を表示します。

```
-> cd /SP/clients/dns
```
3. `set` コマンドを使用して、DNS 設定のプロパティと値を変更します。コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/dns [propertyname=value]
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/dns searchpath=abcdefgh.com
```

ターゲット、プロパティ、および値

DNS 設定では、次のターゲット、プロパティ、および値が有効です。

表 4-2 DNS 設定で有効なターゲット、プロパティ、および値

ターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/clients/dns	auto_dns	enabled disabled	disabled
	nameserver	<i>ip_address</i>	
	retries	0 ~ 5 の整数	
	searchpath	1 ~ 10 の整数	
	timeout	最大の 6 つのコンマで区切られた検索接尾辞	

▼ シリアルポート設定の表示と構成

作業を開始する前に

- シリアルポート設定を表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。シリアルポート設定を構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、シリアルポートの設定を表示および構成します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、次のように入力します。
 - 外部シリアルポートの設定を表示するには、次のコマンドを入力します。
-> **show /SP/serial/external**
 - ホストのシリアルポートの設定を表示するには、次のコマンドを入力します。
-> **show /SP/serial/host**
3. **set** コマンドを使用すると、シリアルポート設定のプロパティと値を変更できます。ポート設定には、**pending** と **active** という 2 つのプロパティセットがあります。コマンドプロンプトで、次のように入力します。
-> **set target [propertyname=value] commitpending=true**

注 – **show** コマンドと **set** コマンドでターゲット **/SP/serial/host** を指定することは、SPARC サーバではサポートされていません。SPARC サーバでは仮想コンソールが実装され、物理コンソールは実装されません。

例

ホストシリアルポートの速度 (ボーレート) を 9600 から 57600 に変更するには、次のように入力します。

- x64 ベースシステムの場合
-> **set /SP/serial/host pendingspeed=57600 commitpending=true**
- SPARC ベースシステムの場合
-> **set /SP/serial/external pendingspeed=57600 commitpending=true**

注 – x64 ベースシステムでは、ILOM がホストと適切に通信するために、ホストシリアルポートの速度を、ホストのオペレーティングシステムのシリアルポート 0、COM1、または **/dev/tty0** の速度設定と一致させてください。

ターゲット、プロパティ、および値

ILOM のシリアルポート設定では、次のターゲット、プロパティ、および値が有効です。

表 4-3 ILOM のシリアルポート設定で有効なターゲット、プロパティ、および値

ターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/serial/external	commitpending	true (none)	(none)
	flowcontrol	software	software
	pendingspeed	<整数>	9600
	speed	読み取り専用の値 (pendingspeed プロパティによって設定される)	
/SP/serial/host	commitpending	true (none)	(none)
	pendingspeed	<整数>	(none)
	speed	読み取り専用の値 (pendingspeed プロパティによって設定される)	

注 - show コマンドと set コマンドでターゲット /SP/serial/host を指定することは、SPARC サーバではサポートされていません。SPARC サーバでは仮想コンソールが実装され、物理コンソールは実装されません。

▼ HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする

ILOM は、HTTP および HTTPS の両方の接続をサポートしています。ILOM を使用すると、HTTP アクセスを自動的に HTTPS にリダイレクトすることができます。また、HTTP ポートと HTTPS ポートを設定することもできます。

作業を開始する前に

- HTTP または HTTPS アクセスを変更するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、Web アクセスを変更します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、次のように入力します。
-> `set /SP/services/http [propertyname=value]`
プロパティは /SP/services/http および /SP/services/https にあります。

ターゲット、プロパティ、および値

表 4-4 に、HTTP 接続および HTTPS 接続で有効なターゲット、プロパティ、および値を示します。

表 4-4 HTTP 接続および HTTPS 接続で有効なターゲット、プロパティ、および値

ターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/services/http	secureremote	enabled disabled	enabled
	servicestate	enabled disabled	disabled
	port	<ポート番号>	80
/SP/services/https	servicestate	enabled disabled	enabled
	port	<ポート番号>	443

表 4-5 に、HTTP、HTTPS、および自動リダイレクトで使用可能な設定を示します。

表 4-5 HTTP、HTTPS、および自動リダイレクトで使用可能な設定

目的の状態	ターゲット	プロパティ	値
HTTP のみを有効にする	/SP/services/http	secureremote	disabled
	/SP/services/http	servicestate	enabled
	/SP/services/https	servicestate	disabled
HTTP および HTTPS を有効にする	/SP/services/http	secureremote	disabled
	/SP/services/http	servicestate	enabled
	/SP/services/https	servicestate	enabled
HTTPS のみを有効にする	/SP/services/http	secureremote	disabled
	/SP/services/http	servicestate	disabled
	/SP/services/https	servicestate	enabled
HTTP を HTTPS に自動的にリダイレクトする	/SP/services/http	secureremote	enabled
	/SP/services/http	servicestate	disabled
	/SP/services/https	servicestate	enabled

Secure Shell の設定

項目	
説明	リンク
Secure Shell の設定	<ul style="list-style-type: none">• 33 ページの「セキュリティ保護された遠隔 SSH 接続を確立する」• 33 ページの「SSH の有効化または無効化」• 34 ページの「現在の鍵を表示する」• 35 ページの「新しい SSH 鍵を生成する」• 35 ページの「SSH サーバの再起動」

▼ セキュリティ保護された遠隔 SSH 接続を確立する

- 遠隔 SSH クライアントからサーバ SP へのセキュリティ保護された接続を確立する必要があります。セキュリティ保護された接続を確立するには、次のように入力します。

```
$ ssh -l username server_ipaddress
```

```
Password: *****
```

デフォルトの CLI プロンプトが表示され、システムではネットワーク設定を確立する CLI コマンドを実行する準備ができました。

▼ SSH の有効化または無効化

作業を開始する前に

- Secure Shell を再起動するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。次の手順に従って、SSH を有効または無効にします。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ネットワーク経由でのアクセスを提供しない場合、または SSH を使用しない場合は、次のように入力します。

```
-> set /SP/services/ssh state=enabled | disabled
```

▼ 現在の鍵を表示する

注 - /SP/services/ssh/keys/rsa|dsa の下のプロパティはすべて読み取り専用です。鍵を表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、現在の鍵を表示します。

- RSA 鍵を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/services/ssh/keys/rsa
/SP/services/ssh/keys/rsa
Targets:
  Properties:
    fingerprint =
ca:c0:05:ff:b7:75:15:a0:30:df:1b:a1:76:bd:fe:e5
    length = 1024
    publickey
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAthvlggXbPIxN4OEvkukKupdFPr8GDaOsKGG
BESVlnny4nX8yd8JC/hrw3qDHmXIZ8JAFwoLQgjtZCbEsgpn9nNIMb6nSfu6Y1t
TtUZXSGBZ48ROmU0SqqrR3i3bgDUR0siphlpv6Yu0Zdlh3549wQ+RWk3vxqHQ
Ffzhv9c=
  Commands:
    cd
    show
```

- DSA 鍵を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/services/ssh/keys/dsa
/SP/services/ssh/keys/dsa
Targets:
  Properties:
    fingerprint =
6a:90:c7:37:89:e6:73:23:45:ff:d6:8e:e7:57:2a:60
    length = 1024
    publickey =
AAAAB3NzaC1kc3MAAACBAInrYecNH86imBbUqE+3FoUfm/fei2ZZtQzqrMx5zBm
bHFIAFdRQKeoQ7gqjc9jQb07ajLxwk2vZzkg3ntnmqHz/hwHvdho2KaolBtAFGc
fLIIdzGVxi4I3phVb6anmTlbqI2AILAa7JvQ8dEGbyATYR9A/pf5VTac/TQ700/J
AAAAFQCIUavkex7wtEhC0CH3s25ON0I3CwAAAIBNFHUop6ZN7i46ZuQOKhD7Mkj
gdHy+8MTBkupVfXqfRE9Zw9yrBZCNsoD8XEeIeyP+pu05k5dJvkzqSqrTVoAXyY
qewyZMFE7stutugw/XEmyjq+XqBWaiOAQskdiMVnHa3MSg8PKJyWP8eIMxD3rIu
PTzkV632uBxzwSwfAQAAAIAAtA8/3odDJUprnxLgHTowc8ksGBj/wJDgPfpGGJHB
B1FDBMhSsRbwh6Z+s/gAf1f+S67HJBTUPsVSMz+czmamc1oZeOazT4+zeNG6uCl
u/5/JmJSdkguc1FcoxtBFqfO/fKjyR0ecWaU7L4kjbWoSsydHJ0pMHasEecEBer
lg==
```

```
Commands:
  cd
  show
```

▼ 新しい SSH 鍵を生成する

作業を開始する前に

- 新しい SSH 鍵を生成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、新しい SSH 鍵を生成します。

1. ILOM の CLI にログインします。

2. 次のように入力して、鍵の種類を設定します。

```
-> set /SP/services/ssh generate_new_key_type=dsa|rsa
```

3. 操作を true に設定します。

```
-> set /SP/services/ssh generate_new_key_action=true
```

フィンガプリントと鍵は異なって見えます。新しい鍵は、SSH サーバが再起動するまで有効になりません。

▼ SSH サーバの再起動

作業を開始する前に

- SSH サーバを再起動するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

注 – SSH サーバの再起動によって、既存のすべての SSH 接続が終了します。

次の手順に従って、SSH サーバを再起動します。

1. ILOM の CLI にログインします。

2. SSH サーバを再起動するには、次のように入力します。

```
-> set /SP/services/ssh restart_sshd_action=true
```


第5章

ユーザーアカウントの管理

項目	
説明	リンク
ユーザーアカウントを設定する	<ul style="list-style-type: none">• 39 ページの「シングルサインオンの設定」• 40 ページの「ユーザーアカウントの追加」• 40 ページの「ユーザーアカウントのパスワードを変更する」• 41 ページの「ユーザーアカウントに役割を割り当てる」• 41 ページの「ユーザーアカウントの削除」• 42 ページの「個々のユーザーアカウントを表示する」• 42 ページの「ユーザーアカウントのリストを表示する」• 43 ページの「ユーザーセッションのリストを表示する」• 44 ページの「個々のユーザーセッションを表示する」
SSH ホストキーを設定する	<ul style="list-style-type: none">• 45 ページの「SSH 鍵を追加する」• 46 ページの「SSH 鍵を削除する」
Active Directory を設定する	<ul style="list-style-type: none">• 47 ページの「Active Directory の strictcertmode を有効にする」• 47 ページの「Active Directory の certstatus を確認する」• 48 ページの「Active Directory 証明書を削除する」• 49 ページの「Active Directory 設定の表示と構成」• 54 ページの「Active Directory の認証と承認のトラブルシューティング」

項目 (続き)

説明	リンク
LDAP を設定する	<ul style="list-style-type: none">• 55 ページの「LDAP サーバを設定する」• 56 ページの「LDAP 用の ILOM の設定」
LDAP/SSL を設定する	<ul style="list-style-type: none">• 57 ページの「LDAP/SSL の strictcertmode を有効にする」• 58 ページの「LDAP/SSL の certstatus を確認する」• 58 ページの「LDAP/SSL 証明書を削除する」• 59 ページの「LDAP/SSL 設定の表示と構成」• 64 ページの「LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング」
RADIUS を設定する	<ul style="list-style-type: none">• 65 ページの「RADIUS を設定する」• 66 ページの「RADIUS コマンド」

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	<ul style="list-style-type: none">• ユーザーアカウントの管理• ユーザーアカウントの管理のガイドライン	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
• Web インタフェース	<ul style="list-style-type: none">• ユーザーアカウントの管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』
• IPMI と SNMP ホスト	<ul style="list-style-type: none">• ユーザーアカウントの管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

注 – この章の構文例では、/sp/ で始まるターゲットを使用しますが、使用しているサーバプラットフォームによっては、/cmm/ で始まるターゲットに置き換わる場合があります。サブターゲットは、ILOM を使用するすべてのサーバプラットフォームで共通です。

ユーザーアカウントの設定

項目	
説明	リンク
ユーザーアカウントを設定する	<ul style="list-style-type: none">• 39 ページの「シングルサインオンの設定」• 40 ページの「ユーザーアカウントの追加」• 41 ページの「ユーザーアカウントに役割を割り当てる」• 41 ページの「ユーザーアカウントの削除」• 42 ページの「ユーザーアカウントのリストを表示する」• 44 ページの「個々のユーザーセッションを表示する」• 43 ページの「ユーザーセッションのリストを表示する」• 44 ページの「個々のユーザーセッションを表示する」

▼ シングルサインオンの設定

作業を開始する前に

- シングルサインオンを無効または有効にするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、シングルサインオンの設定を行います。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. シングルサインオンを有効または無効にするには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/services/sso state=disabled|enabled
```

▼ ユーザーアカウントの追加

作業を開始する前に

- ユーザーを追加するには、User Management ((u)) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ユーザーアカウントを追加します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ローカルユーザーアカウントを追加するには、次のコマンドを入力します。

```
-> create /SP/users/username password=password
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> create /SP/users/user5
Creating user...
Enter new password: *****
Enter new password again: *****
Created /SP/users/user5
```

注 – ユーザーアカウントを追加する際、役割やパスワードのプロパティを指定する必要はありません。役割はデフォルトで Read Only (o) に設定され、CLI はパスワードの入力と確認を要求します。

▼ ユーザーアカウントのパスワードを変更する

作業を開始する前に

- ユーザーアカウントのパスワードを変更するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。自分のパスワードを変更するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ユーザーアカウントのパスワードを変更します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ユーザーアカウントのパスワードを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/users/user password
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/users/user5 password
Enter new password: *****
Enter new password again: *****
```

▼ ユーザーアカウントに役割を割り当てる

作業を開始する前に

- ユーザーアカウントに役割を割り当てるには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ユーザーアカウントに役割を割り当てます。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ユーザーアカウントに役割を割り当てるには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/users/<username> password=<password> role=  
<administrator|operator|a|u|c|r|o|s>
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/users/user5 role=auc  
Set 'role' to 'auc'-> show /SP/users/user5  
/SP/users/user5  
Targets:  
ssh  
  
Properties:  
role = auco  
password = *****  
  
Commands:  
cd  
set  
show
```

▼ ユーザーアカウントの削除

作業を開始する前に

- ユーザーを削除するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ユーザーアカウントを削除します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ローカルユーザーアカウントを削除するには、次のコマンドを入力します。

```
-> delete /SP/users/username
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> delete /SP/users/user5
```

3. プロンプトが表示されたら、削除する場合は **y**、取り消す場合は **n** を入力します。

たとえば、次のように入力します。

```
Are you sure you want to delete /SP/users/user5 (y/n)? y
```

```
Deleted /SP/users/user5
```

▼ 個々のユーザーアカウントを表示する

作業を開始する前に

- 個々のユーザーアカウントを表示するには、Read Only (o) 役割のみを有効にする必要があります。

次の手順に従って、個々のユーザーアカウントを表示します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 1 つの特定のユーザーアカウントに関する情報を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/users/username
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/users/user1

/SP/users/user1
  Targets:
    ssh

  Properties:
    role = aucros
    password = *****

  Commands:
    cd
    set
    show
```

▼ ユーザーアカウントのリストを表示する

作業を開始する前に

- ユーザーアカウントのリストを表示するには、Read Only (o) 役割のみを有効にする必要があります。

次の手順に従って、ユーザーアカウントのリストを表示します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. すべてのローカルユーザーアカウントに関する情報を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/users
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/users
/SP/users
  Targets:
    user1
    user2
    user3
    user4
```

▼ ユーザーセッションのリストを表示する

作業を開始する前に

- ユーザーセッションのリストを表示するには、Read Only (o) 役割のみを有効にする必要があります。

次の手順に従って、ユーザーセッションのリストを表示します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. すべてのローカルユーザーセッションに関する情報を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/sessions
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/sessions

/SP/sessions
  Targets:
    12 (current)

  Properties:

  Commands:
    cd
    show
```

▼ 個々のユーザーセッションを表示する

作業を開始する前に

- 個々のユーザーセッションを表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、個々のセッションを表示します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 個々のユーザーセッションに関する情報を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/sessions/session_number
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/sessions/12

/SP/sessions/12
  Targets:

  Properties:
    username = user4
    starttime = Mon Apr  7 21:31:22 2008
    type = shell
    mode = normal

  Commands:
    cd
    show
```

SSH 鍵の設定

項目

説明

リンク

SSH ホストキーを設定する

- [45 ページの「SSH 鍵を追加する」](#)
- [46 ページの「SSH 鍵を削除する」](#)

SSH 鍵を使用してパスワード認証を自動化することができます。次の手順では、SSH 鍵を追加および削除する方法を説明します。

▼ SSH 鍵を追加する

作業を開始する前に

- SSL 鍵を追加するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、SSH 鍵を追加します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ユーザーの SSH 鍵のディレクトリ位置を変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> cd /SP/users/user1/ssh/keys/1
```

3. ユーザーのアカウントに鍵を追加するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set load_uri=
```

```
transfer_method://username:password@ipaddress_or_hostname/directorypath/filename
```

各表記の意味は次のとおりです。

- *transfer_method* には、tftp、ftp、sftp、scp、http、または https を指定できます。
- *username* は、リモートシステムでのユーザーアカウントの名前です。(username は、scp、sftp、および ftp では必須です。username は、tftp では使用されず、http および https では省略可能です)
- *password* は、リモートシステムでのユーザーアカウントのパスワードです。(password は、scp、sftp、および ftp では必須です。password は、tftp では使用されず、http および https では省略可能です)
- *ipaddress_or_hostname* は、リモートシステムの IP アドレスまたはホスト名です。
- *directorypath* は、SSH 鍵のリモートシステム上の位置です。
- *filename* は、SSH 鍵ファイルに割り当てられている名前です。

たとえば、次のように入力します。

```
-> set load_uri=scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/keys/sshkey_1.pub
Set 'load_uri' to 'scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/keys/sshkey_1.pub'
```

▼ SSH 鍵を削除する

作業を開始する前に

- SSL 鍵を削除するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、SSH 鍵を削除します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ユーザーの SSH 鍵のディレクトリ位置を変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> cd /SP/users/user1/ssh/keys/1
```

3. ユーザーのアカウントから鍵を削除するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set clear_action=true
```

次の確認プロンプトが表示されます。

```
Are you sure you want to clear /SP/users/user1/ssh/keys/1  
(y/n)?
```

4. **y** と入力します。

SSH 鍵が削除され、削除を確認する次のメッセージが表示されます。

```
Set 'clear_action' to 'true'
```

Active Directory の設定

項目

説明

リンク

Active Directory を設定する	<ul style="list-style-type: none">• 47 ページの「Active Directory の strictcertmode を有効にする」• 47 ページの「Active Directory の certstatus を確認する」• 48 ページの「Active Directory 証明書を削除する」• 49 ページの「Active Directory 設定の表示と構成」• 54 ページの「Active Directory の認証と承認のトラブルシューティング」
------------------------	---

▼ Active Directory の strictcertmode を有効にする

作業を開始する前に

- Active Directory の設定を行うには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- デフォルトでは、strictcertmode は無効になっています。この変数が無効になっている場合、チャンネルはセキュリティー保護されますが、制限的な証明書の検証が実行されます。strictcertmode を有効にする場合は、サーバの証明書が提供されると証明書の署名を検証できるように、サーバの証明書がサーバにすでにアップロードされている必要があります。
- strictcertmode が無効になっている場合でも、データは常に保護されます。
- TFTP、FTP、または SCP を使用して証明書をロードできます。
- どこからでも、CLI で `load -source` コマンドを使用することにより、Active Directory 用の SSL 証明書をロードすることができます。たとえば、次のコマンドを入力します。

```
-> load -source URI_to_SSL_certificate target
```

次の手順に従って、strictcertmode を有効にします。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 次のパスを入力して、Active Directory の証明書の設定にアクセスします。

```
-> cd /SP/clients/activedirectory/cert
```

3. 証明書をロードするには、次のように入力します。

```
-> set load_uri=tftp://IP address/file-path/filename
```

4. strictcertmode を有効にするには、次のように入力します。

```
-> set strictcertmode=enabled
```

▼ Active Directory の certstatus を確認する

作業を開始する前に

- Active Directory の設定を行うには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- certstatus は、現在の証明書の状態を反映する操作変数です。strictcertmode が無効になっている場合は、どちらも存在する必要はありません。ただし、strictcertmode が有効になっている場合は、証明書を読み込む必要があります。

次の手順に従って、Active Directory の証明書の状態を確認します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 証明書の状態を確認するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/cert
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/cert
Targets:

Properties:
  certstatus = certificate present
  clear_action = (none)
  issuer = /DC=com/DC=sun/DC=east/DC=sales/CN=CAforActiveDirectory
  load_uri = (none)
  serial_number = 08:f3:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
  subject = /DC=com/DC=sun/DC=east/DC=sales/CN=CAforActiveDirectory
  valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
  valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
  version = 3 (0x02)

Commands:
  cd
  load
  reset
  set
  show
```

▼ Active Directory 証明書を削除する

作業を開始する前に

- Active Directory の設定を行うには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- 認証サーバ証明書は、strictcertmode が無効になっているときにのみ削除できます。

次の手順に従って、Active Directory の証明書を削除します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 次のように入力します。

```
-> cd /SP/clients/activedirectory/cert
```

3. 証明書を削除するには、次のいずれかのコマンドを入力します。

```
■ -> set clear_action=true
```

```
■ -> reset <target>
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> reset /SP/clients/activedirectory/cert
```

4. 画面上のプロンプトへの応答として y または n を入力することにより、証明書を削除するかどうかを確認します。

アップロードされた既存の証明書ファイルは削除されます。

▼ Active Directory 設定の表示と構成

作業を開始する前に

- Active Directory の設定を行うには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、Active Directory 設定を表示および構成します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. `show` コマンドおよび `set` コマンドを使用して、プロパティを表示および変更します。

- `admingroups` ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/admingroups/n
```

ここで、*n* には、1～5 を指定できます。

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/admingroups/1
/SP/clients/activedirectory/admingroups/1
Targets:
Properties: name = CN=SpSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,
DC=east,DC=sun,DC=com
```

`set` コマンドを使用すると、プロパティを修正します。

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/activedirectory/admingroups/1/
name=CN=spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com'
```

- `opergroups` ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/opergroups/1
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/opergroups/1
/SP/clients/activedirectory/opergroups/1
Targets:
Properties: name = CN=SpSuperOper,OU=Groups,DC=sales,
DC=east,DC=sun,DC=com
```

set コマンドを使用すると、プロパティを修正します。
たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/activedirectory/opergroups/1 name=CN=
spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com'
```

- customgroups ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/customgroups/1
たとえば、次のように入力します。
```

```
-> show /SP/clients/activedirectory/customgroups/1
/SP/clients/activedirectory/customgroups/1
Targets:

Properties:
  name = custom_group_1
  roles = aucro
```

set コマンドを使用すると、プロパティを執します。
たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/activedirectory/customgroups/1 name=CN=
spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com'
-> set /SP/clients/activedirectory/customgroups/1 roles=au
Set 'roles' to 'au'
```

- userdomains ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/userdomains/1
たとえば、次のように入力します。
```

```
-> show /SP/clients/activedirectory/userdomains/1
/SP/clients/activedirectory/userdomains/1
Targets:

Properties:
  domain = <USERNAME>@sales.example.sun.com
```

set コマンドを使用すると、プロパティを執します。
たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/activedirectory/userdomains/1 domain=  
<USERNAME>@sales.example.sun.com  
Set 'domain' to '<username>@sales.example.sun.com'
```

注 – 上記の例で、<USERNAME> は、ユーザーのログイン名に置き換えられます。認証時に、ユーザーのログイン名が <USERNAME> に置き換わります。名前は、完全修飾識別名 (Fully Qualified Distinguished Name、FQDN)、domain\name (NT)、または単純名の形式をとることができます。

- alternateservers ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1  
たとえば、次のように入力します。
```

```
-> show /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1  
/SP/clients/activedirectory/alternateservers/1  
Targets:  
    cert  
  
Properties:  
    address = 10.8.168.99  
    port = 0
```

注 – address には、IP アドレスまたは DNS 名を指定できます。DNS を使用する場合は、DNS が有効になっている必要があります。DNS の有効化の詳細については、[29 ページの「DNS 設定の表示と構成」](#)を参照してください。

set コマンドを使用すると、プロパティを修正します。
たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1 port=636
```

また、show コマンドを使用して、代替サーバの証明書情報を表示することもできます。

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1/cert
/SP/clients/activedirectory/alternateservers/1/cert
Targets:

Properties:
  certstatus = certificate present
  clear_action = (none)
  issuer = /DC=com/DC=sun/DC=east/DC=sales/CN CAforActiveDirectory
  load_uri = (none)
  serial_number = 08:f3:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
  subject = /DC=com/DC=sun/DC=east/DC=sales/CN=CAforActiveDirectory
  valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
  valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
  version = 3 (0x02)
```

代替サーバの証明書をコピーするには、次のように入力します。

```
-> cd /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1
-> set load_uri=
<tftp|ftp|scp>:[//<username:password>]@//[<ipAddress|HostName>]/<filePath>
/<fileName>
```

次のコマンドは、tftp を使用した証明書をコピーする例です。

```
-> set load_uri=tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert
Set 'load_uri' to 'tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert'
```

注 – TFTP 転送方法では、ユーザー名とパスワードは不要です。

次のコマンドは、tftp を使用した証明書をコピーする例です。

```
-> set load_uri=
ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert
Set 'load_uri' to
'ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert'
```

次のコマンドは、scp を使用した証明書をコピーする例です。

```
-> set
load_uri=
scp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/home/dc150698/8275_put/cert.
cert
```

代替サーバの証明書を削除するには、次のように入力します。

```
-> cd /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1
-> set clear_action=true
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> set clear_action=true
Are you sure you want to clear /SP/clients/activedirectory/cert
(y/n)? y
Set 'clear_action' to 'true'
```

- dnslocatorqueries ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/dnslocatorqueries/1
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/dnslocatorqueries/1
/SP/clients/activedirectory/dnslocatorqueries/1
Targets:

Properties:
    service = _ldap._tcp.gc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:3269>

Commands:
    cd
    set
    show
```

注 – DNS ロケータクエリーが機能するには、DNS および DNS ロケータモードが有効になっている必要があります。DNS の有効化に関する情報は、[29 ページの「DNS 設定の表示と構成」](#)を参照してください。

DNS ロケータサービスクエリーは、名前付き DNS サービスを識別します。ポート ID は、通常、レコードに含まれますが、<PORT:636> 形式を使用してオーバーライドできます。また、認証されるドメイン固有の名前付きサービスは、<DOMAIN> 置換マーカを使用して指定できます。

次に、set コマンドを使用して、dnslocatorqueries ターゲットのプロパティを変更します。

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/activedirectory/dnslocatorqueries/1 service=<string>
```

▼ Active Directory の認証と承認のトラブルシューティング

作業を開始する前に

- 認証イベントおよび承認イベントを表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

認証イベントおよび承認イベントを診断するには、次の手順に従います。

1. ILOM の CLI にログインします。

2. 次のコマンドを入力します。

```
-> cd /SP/clients/activedirectory
/SP/clients/activedirectory
```

```
-> set logdetail=trace
Set 'logdetail' to 'trace'
```

3. ログアウトし、もう一度 ILOM CLI にログインして次のコマンドを入力することにより、もう一度承認を試みます。

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(ActDir) Type==(Log) Severity==
(Trace)
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(ActDir) Type==(Log)

ID      Date/Time                Class      Type      Severity
-----
26      Thu Jul 10 09:40:46 2008 ActDir     Log       minor
      (ActDir) authentication status: auth-OK
25      Thu Jul 10 09:40:46 2008 ActDir     Log       minor
      (ActDir) server-authenticate: auth-success idx 100/0 dns-
server 10.8.143          .231
24      Thu Jul 10 09:40:46 2008 ActDir     Log       debug
      (ActDir) custRoles
23      Thu Jul 10 09:40:46 2008 ActDir     Log       debug
      (ActDir) role-name administrator
```

イベントログの詳細の設定については、79 ページの「ILOM イベントログの表示とクリア」を参照してください。

LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) の設定

項目	
説明	リンク
LDAP を設定する	<ul style="list-style-type: none">• 55 ページの「LDAP サーバを設定する」• 56 ページの「LDAP 用の ILOM の設定」

▼ LDAP サーバを設定する

作業を開始する前に

- LDAP を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

1. ILOM に対して認証を行うすべてのユーザーが、「crypt」形式か、または一般的には「MD5 crypt」と呼ばれる、crypt の GNU 拡張で保存されたパスワードを使用していることを確認します。

ILOM は、これらの 2 種類の crypt 形式で保存されたパスワードによる LDAP 認証のみをサポートしています。

例:

```
userPassword: {CRYPT}ajCa2He4PJhNo
```

または

```
userPassword: {CRYPT}$1$pzKng1$du1Bf0NWBjh9t3FbUgf46.
```

2. オブジェクトクラス `posixAccount` および `shadowAccount` を追加し、このスキーマ (RFC 2307) に必要なプロパティ値を入力します。

必須プロパティ	説明
<code>uid</code>	ILOM にログインするためのユーザー名
<code>uidNumber</code>	任意の固有の番号
<code>gidNumber</code>	任意の固有の番号
<code>userPassword</code>	パスワード
<code>homeDirectory</code>	任意の値 (ILOM はこのプロパティを無視します)
<code>loginShell</code>	任意の値 (ILOM はこのプロパティを無視します)

- LDAP サーバを設定して、ILOM のユーザーアカウントにアクセスできるようにします。

LDAP サーバが匿名バインドを許可するようにするか、または LDAP サーバにプロキシユーザーを作成します。LDAP サーバは、ILOM により認証されるすべてのユーザーアカウントに読み取り専用アクセスができます。

詳細は、LDAP サーバのマニュアルを参照してください。

▼ LDAP 用の ILOM の設定

作業を開始する前に

- LDAP を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。次の手順に従って、LDAP 用に ILOM を設定します。

- プロキシユーザー名とパスワードを入力します。次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap binddn="cn=proxyuser, ou=people, ou=sales, dc=sun, dc=com" bindpw=password
```

- LDAP サーバの IP アドレスを入力します。次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap address=ldapipaddress |DNS name
```

注 - DNS 名を使用する場合は、DNS が設定されていて、機能している必要があります。

- LDAP サーバとの通信に使用するポートを割り当てます。デフォルトのポートは 389 です。次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap port=ldapport
```

- ユーザーとグループを含む LDAP ツリー分岐の識別名を入力します。たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap searchbase="ou=people, ou=sales, dc=sun, dc=com"
```

これは、ユーザー認証を検索する LDAP ツリーの場所です。

- LDAP サービスの状態を enabled に設定します。次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap state=enabled
```

- LDAP 認証の動作を確認するには、LDAP ユーザー名とパスワードを使用して、ILOM にログインします。

注 - ILOM は、LDAP ユーザーの前にローカルユーザーを検索します。LDAP ユーザー名がローカルユーザーとして存在する場合、ILOM はローカルアカウントを使用して認証を行います。

LDAP/SSL の設定

項目

説明	リンク
LDAP/SSL を設定する	<ul style="list-style-type: none">• 57 ページの「LDAP/SSL の strictcertmode を有効にする」• 58 ページの「LDAP/SSL の certstatus を確認する」• 58 ページの「LDAP/SSL 証明書を削除する」• 59 ページの「LDAP/SSL 設定の表示と構成」• 64 ページの「LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング」

▼ LDAP/SSL の strictcertmode を有効にする

作業を開始する前に

- LDAP/SSL を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- デフォルトでは、strictcertmode は無効になっています。この変数が無効になっている場合、チャンネルはセキュリティー保護されますが、制限的な証明書の検証が実行されます。strictcertmode を有効にする場合は、サーバの証明書が提供されると証明書の署名を検証できるように、サーバの証明書がサーバにすでにアップロードされている必要があります。

次の手順に従って、LDAP/SSL の strictcertmode を有効にします。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 次のパスを入力して、LDAP/SSL の証明書の設定にアクセスします。
`-> cd /SP/clients/ldapssl/cert`
3. 証明書をロードするには、次のように入力します。
`-> set load_uri=tftp://IP address/file-path/filename`

注 – TFTP、FTP、または SCP を使用して証明書をロードできます。

4. strictcertmode を有効にするには、次のように入力します。
`-> set strictcertmode=enabled`

▼ LDAP/SSL の certstatus を確認する

作業を開始する前に

- LDAP/SSL の certstatus を表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。
- certstatus は、strictcertmode が無効になっている場合に現在の証明書の状態を反映する操作変数です。ただし、strictcertmode が有効になっている場合は、証明書を読み込む必要があります。

次の手順に従って、LDAP/SSL の証明書の状態を確認します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 証明書の状態を確認するには、次のように入力します。

-> **show /SP/clients/ldapssl/cert**

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/cert
Targets:

Properties:
  certstatus = certificate present
  clear_action = (none)
issuer = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration Cerificates
  load_uri = (none)
  serial_number = 08:f23:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
  subject = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration Cerificates/OU=Entrust/Web
Connector/OU=No Liability as per http://freecerts.entrust
  valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
  valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
  version = 3 (0x02)
```

▼ LDAP/SSL 証明書を削除する

作業を開始する前に

- LDAP/SSL を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- 認証サーバ証明書は、strictcertmode が無効になっているときのみ削除できます。

次の手順に従って、LDAP/SSL の証明書を削除します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 次のように入力します。
-> `cd /SP/clients/ldapssl/cert`
3. 証明書を削除するには、次のように入力します。
-> `set clear_action=true`
4. 画面上のプロンプトへの応答として `y` または `n` を入力することにより、証明書を削除するかどうかを確認します。
アップロードされた既存の証明書ファイルは削除されます。

▼ LDAP/SSL 設定の表示と構成

作業を開始する前に

- LDAP/SSL を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、LDAP/SSL の設定を表示および構成します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. `show` コマンドおよび `set` コマンドを使用して、プロパティーを表示および変更します。
 - `admingroups` ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。
-> `show /SP/clients/ldapssl/admingroups/n`
ここで、`n` には、1～5 を指定できます。
たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/admingroups/1
/SP/clients/ldapssl/admingroups/1

Targets:

Properties: name = CN=SpSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=
east,DC=sun,DC=com
```

`set` コマンドを使用すると、プロパティーを修正します。

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldapssl/admingroups/1/ name=CN=
spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com'
```

- opergroups ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/opergroups/1
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/opergroups/1

/SP/clients/ldapssl/opergroups/1

Targets:

Properties: name = CN=SpSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=
east,DC=sun,DC=com
```

set コマンドを使用すると、プロパティを修正します。

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldapssl/opergroups/1 name=CN=spSuperOper,OU=
Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com'
```

- customgroups ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/customgroups/1
```

たとえば、次のように入力します。

```
/SP/clients/ldapssl/customgroups/1
Targets:

Properties:
  name = <fully qualified distinguished name only>
  roles = (none)

Commands:
  cd
  set
  show
```

set コマンドを使用すると、プロパティを執します。
たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldapssl/customgroups/1 name=CN=
spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=sun,DC=com'
-> set /SP/clients/ldapssl/customgroups/1 roles=au
Set 'roles' to 'au'
```

- userdomains ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/userdomains/1
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/userdomains/1
/SP/clients/ldapssl/userdomains/1
Targets:

Properties:
    domain = uid=<USERNAME>,ou=people,dc=sun,dc=com

Commands:
    cd
    set
    show
```

set コマンドを使用すると、プロパティを執します。
たとえば、次のように入力します。

```
-> set SP/clients/ldapssl/userdomains1 domain=uid=<USERNAME>,
ou=people,dc=sun,dc=sun
```

注 – 上記の例で、認証際に <USERNAME> は、ユーザーのログイン名に置き換えられます。名前は、完全修飾識別名 (Fully Qualified Distinguished Name、FQDN) の形式をとることができます。

- alternateservers ターゲットの情報を表示および変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/alternateservers/1
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/alternateservers/1
/SP/clients/activedirectory/alternateservers/1
Targets:
  cert

Properties:
  address = 10.8.168.99
  port = 0
```

注 – 上記の例で、address には、IP アドレスまたは DNS 名を指定できます。DNS を使用する場合は、DNS が有効になっている必要があります。DNS の有効化の詳細については、29 ページの「DNS 設定の表示と構成」を参照してください。

set コマンドを使用すると、プロパティを修正します。

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldapssl/alternateservers/1 port=636
```

また、show コマンドを使用して、代替サーバの証明書情報を表示することもできます。

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/alternateservers/1/cert
/SP/clients/ldapssl/alternateservers/1/cert
Targets:

Properties:
  certstatus = certificate present
  clear_action = (none)
issuer = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration Certificates
  load_uri = (none)
  serial_number = 08:f23:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
  subject = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration Certificates/OU=Entrust/Web
Connector/OU=No Liability as per http://freecerts.entrust
  valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
  valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
  version = 3 (0x02)
```

代替サーバの証明書をコピーするには、次のように入力します。

```
-> set load_uri=  
<tftp|ftp|scp>:[<username:password>]@//<ipAddress|HostName>/<filePath>  
/<fileName>
```

次のコマンドは、tftp を使用した証明書をコピーする例です。

```
-> set load_uri=tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert  
Set 'load_uri' to 'tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert'
```

注 – TFTP 転送方法では、ユーザー名とパスワードは不要です。

次のコマンドは、tftp を使用した証明書をコピーする例です。

```
-> set load_uri=  
ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert  
Set 'load_uri' to  
'ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert'
```

次のコマンドは、scp を使用した証明書をコピーする例です。

```
-> set  
load_uri=  
scp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/home/dc150698/8275_put/cert.  
cert
```

代替サーバの証明書を削除するには、次のように入力します。

```
-> set clear_action=true
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> set clear_action=true  
Are you sure you want to clear /SP/clients/ldapssl/cert (y/n)? y  
Set 'clear_action' to 'true'
```

▼ LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング

作業を開始する前に

- 認証イベントおよび承認イベントを表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、LDAP/SSL の認証と承認をトラブルシューティングします。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
-> cd /SP/clients/ldapssl
/SP/clients/ldapssl

-> set logdetail=trace
Set 'logdetail' to 'trace'
```

3. ログアウトし、もう一度 ILOM CLI にログインして次のコマンドを入力することにより、もう一度承認を試みます。

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(ldapssl) Type==(Log) Severity=
=(Trace)
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(ldapssl) Type==(Log)

ID      Date/Time                Class      Type      Severity
-----
3155    Thu Nov 13 06:21:00 2008  LdapSsl   Log       critical
        (LdapSSL) authentication status: auth-ERROR
3154    Thu Nov 13 06:21:00 2008  LdapSsl   Log       major
        (LdapSSL) server-authenticate: auth-error idx 0 cfg-server
10.8.xxx.xxx
3153    Thu Nov 13 06:21:00 2008  LdapSsl   Log       major
        (LdapSSL) ServerUserAuth - Error 0, error binding user to
ActiveDirectory server
```

イベントログの詳細の設定については、[79 ページ](#)の「ILOM イベントログの表示とクリア」を参照してください。

RADIUS の設定

項目	
説明	リンク
RADIUS を設定する	<ul style="list-style-type: none">• 65 ページの「RADIUS を設定する」• 66 ページの「RADIUS コマンド」

▼ RADIUS を設定する

作業を開始する前に

- RADIUS を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- 10 個を超えるローカルユーザーアカウントに ILOM アクセスを提供する必要がある場合は、RADIUS サーバを適切に設定したあとで、RADIUS 認証を使用するように ILOM を設定できます。
- この手順を完了する前に、使用している RADIUS 環境に関する適切な情報を収集してください。

次の手順に従って、RADIUS の設定を行います。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. /SP/clients/radius に移動します。
[66 ページの「RADIUS コマンド」](#)を参照してください。

3. 次の表の説明に従って設定を行います。

プロパティ (CLI)	デフォルト	説明
state	Disabled	Enabled Disabled RADIUS クライアントを有効にするか無効にするかを指定します。
defaultrole a u c r s Administrator Operator	Operator	Administrator Operator Advanced Roles 認証されたすべての RADIUS ユーザーに付与されるアクセスの役割。このプロパティには、Administrator や Operator といった従来表記の役割を使用することも、a、u、c、r、o、s といった個々の役割 ID の組み合わせを使用することもできます。たとえば、aucros となっている場合、a は Admin、u は User Management、c は Console、r は Reset and Host Control、s は Service を意味します。
ipaddress	0.0.0.0	RADIUS サーバの IP アドレスまたは DNS 名。DNS 名を使用する場合は、DNS が設定されていて、機能している必要があります。
port	1812	RADIUS サーバとの通信に使用するポート番号を指定します。デフォルトのポートは 1812 です。
secret	(none)	機密データを保護しクライアントとサーバの相互認識を可能にするために使われる共有シークレットを指定します。

RADIUS コマンド

この節では、RADIUS コマンドについて説明します。

```
show /SP/clients/radius
```

このコマンドを使用するには、Admin (a) の役割または Operator の役割を有効にする必要があります。

目的

このコマンドは、RADIUS 認証に関連したプロパティを表示する場合に使用します。

構文

```
show /SP/clients/radius
```

プロパティ

- `defaultrole` - すべての RADIUS ユーザーに割り当てられる役割です。Operator を指定します。
- `address` - RADIUS サーバの IP アドレスです。
- `port` - RADIUS サーバとの通信に使用するポート番号です。デフォルトのポートは 1812 です。
- `secret` - 使用している RADIUS サーバへのアクセスに使用する共有シークレットです。
- `state` - RADIUS ユーザーへのアクセスを許可または拒否する場合は、この設定をそれぞれ有効または無効にします。

例

```
-> show /SP/clients/radius

/SP/clients/radius
Targets:

Properties:
  defaultrole = Operator
  address = 129.144.36.142
  port = 1812
  secret = (none)
  state = enabled

Commands:
  cd
  set
  show
```

set /SP/clients/radius

このコマンドを使用するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

目的

このコマンドは、サービスプロセッサ上の RADIUS 認証に関連したプロパティを設定する場合に使用します。

構文

```
set /SP/clients/radius [defaultrole=  
[Administrator|Operator|a|u|c|r|s] address=radius_server_IPaddress  
port=port# secret=radius_secret state=[enabled|disabled]]
```

プロパティ

- defaultrole - すべての RADIUS ユーザーに割り当てられる役割です。Operator を指定します。
- address - RADIUS サーバの IP アドレスです。
- port - RADIUS サーバとの通信に使用するポート番号です。デフォルトのポートは 1812 です。
- secret - 使用している RADIUS サーバへのアクセスに使用する共有シークレットです。
- state - RADIUS ユーザーへのアクセスを許可または拒否する場合は、この設定をそれぞれ有効または無効にします。

例

```
-> set /SP/clients/radius state=enabled address=10.8.145.77  
Set 'state' to 'enabled'  
Set 'address' to '10.8.145.77'
```

第6章

システム部品の管理

項目	
説明	リンク
システム部品の管理	<ul style="list-style-type: none">70 ページの「部品情報の表示」71 ページの「部品を取り外す準備」72 ページの「部品をサービスに復帰させる」72 ページの「部品の有効および無効の切り替え」

関連項目		
ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• 障害管理について	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
• Web インタフェース	• システム部品の管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』
• IPMI と SNMP ホスト	• インベントリと部品の管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

注 – この章の構文例では、/SP/ で始まるターゲットを使用しますが、使用しているサーバプラットフォームによっては、/CMM/ で始まるターゲットに置き換わる場合があります。サブターゲットは、ILOM を使用するすべてのサーバプラットフォームで共通です。

部品情報の表示およびシステム部品の管理

項目	
説明	リンク
システム部品の管理	<ul style="list-style-type: none">70 ページの「部品情報の表示」71 ページの「部品を取り外す準備」72 ページの「部品をサービスに復帰させる」72 ページの「部品の有効および無効の切り替え」

▼ 部品情報の表示

作業を開始する前に

- システム部品に関する情報を表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、部品情報を表示します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. プロンプトで、次のように入力します。

```
-> show component_name type
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SYS/MB type
Properties:
    type = Motherboard
Commands:
    show
```

インベントリ情報を表示するプロパティのリストを次に示します。表示できるプロパティは、使用するターゲットの種類によって異なります。

- fru_part_number
- fru_manufacturer
- fru_serial_number
- fru_name
- fru_description
- fru_version

- chassis_serial_number
- chassis_part_number
- product_name
- product_serial_number
- product_part_number
- customer_frudata

▼ 部品を取り外す準備

作業を開始する前に

- 部品を変更するには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、部品を削除する準備をします。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ILOM コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> set target prepare_to_remove_action=true
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /CH/RFM0 prepare_to_remove_action=true
Set 'prepare_to_remove_action' to 'true'
```

部品を取り外す準備ができれば、物理的に取り外せるようになっているかどうかを確認できます。

3. ILOM コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> show target prepare_to_remove_status
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> show /CH/RFM0 prepare_to_remove_status
Properties:
  prepare_to_remove_status = Ready|NotReady
Commands:
  cd
  set
  show
  start
  stop
```

この例の Ready|NotReady 文は、デバイスを取り外す準備ができたかどうかを示します。

▼ 部品をサービスに復帰させる

作業を開始する前に

- 部品を変更するには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、部品をサービスに復帰させます。

注 – 部品を取り外す準備が完了してから、この操作を取り消す場合は、遠隔で実行できます。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ILOM コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> set target return_to_service_action=true
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /CH/RFM0 return_to_service_action=true
Set 'return_to_service_action' to 'true'
```

▼ 部品の有効および無効の切り替え

作業を開始する前に

- 部品を有効または無効にするには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、部品を有効または無効にします。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ILOM コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> set <target> component_state=enabled|disabled
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SYS/MB/CMP0/P0/C0 component_state=enabled
Set 'ecomponent_state' to 'eenabled'
```

第7章

システム部品の監視

項目

説明

リンク

LED とシステムインジケータを表示および設定する

- [75 ページの「センサー測定値を表示する」](#)
- [76 ページの「システムインジケータの設定」](#)

クロックとタイムゾーンを設定する

- [77 ページの「クロックの設定」](#)

イベントログをフィルタリング、表示、およびクリアする

- [78 ページの「イベントログ出力をフィルタリングする」](#)
- [79 ページの「ILOM イベントログの表示とクリア」](#)

障害の状態を表示する

- [81 ページの「遠隔 syslog 受信側の IP アドレスを設定する」](#)
- [82 ページの「障害の状態を表示する」](#)

保守担当者がシステムの問題の診断に使用するデータを収集する

- [83 ページの「システムの問題を診断するために SP データを収集する」](#)
-

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	<ul style="list-style-type: none">システム監視と警告管理システムの問題を診断するための SP データの収集	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
• Web インタフェース	<ul style="list-style-type: none">システムセンサー、インジケータ、および ILOM イベントログの監視システムの問題を診断するための SP データの収集	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』
• IPMI と SNMP ホスト	<ul style="list-style-type: none">インベントリと部品の管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

システムセンサー、インジケータ、および ILOM イベントログの監視

項目

説明	リンク
LED とシステムインジケータを表示および設定する	<ul style="list-style-type: none">75 ページの「センサー測定値を表示する」76 ページの「システムインジケータの設定」
クロックとタイムゾーンを設定する	<ul style="list-style-type: none">77 ページの「クロックの設定」
イベントログをフィルタリング、表示、およびクリアする	<ul style="list-style-type: none">78 ページの「イベントログ出力をフィルタリングする」79 ページの「ILOM イベントログの表示とクリア」81 ページの「遠隔 syslog 受信側の IP アドレスを設定する」
障害の状態を表示する	<ul style="list-style-type: none">82 ページの「障害の状態を表示する」
SP データを収集する	<ul style="list-style-type: none">83 ページの「システムの問題を診断するために SP データを収集する」

▼ センサー測定値を表示する

作業を開始する前に

- センサー測定値を表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、センサー測定値を表示します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力して、センサーターゲットに移動し、センサープロパティを表示します。

```
-> cd target
```

```
-> show
```

たとえば、一部のサーバプラットフォームでは、次のパスを指定して、サーバの外気の吸気温度測定値を表示します。

```
-> cd /SYS/T_AMB
```

```
-> show
```

センサーターゲットを説明するプロパティが表示されます。たとえば、次のように入力します。

```
type = Temperature
class = Threshold Sensor
value = 27.000 degree C
upper_nonrecov_threshold = 45.00 degree C
upper_critical_threshold = 40.00 degree C
upper_noncritical_threshold = 35.00 degree C
lower_noncritical_threshold = 10.00 degree C
lower_critical_threshold = 4.00 degree C
lower_nonrecov_threshold = 0.00 degree C
alarm_status = cleared
```

アクセス可能なしきい値センサーターゲットの種類とそれらにアクセスするためのパスの詳細は、サーバプラットフォームに付属のユーザーマニュアルを参照してください。

3. ディスクリットセンサー測定値を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> cd target
```

```
-> show
```

たとえば、一部のサーバプラットフォームでは、次のパスを指定して、ハードディスクドライブがスロット 0 に存在するかどうかを判断できます。

```
-> cd /SYS/HDD0_PRSENT
```

```
-> show
```

ディスクリートセンサーターゲットを説明するプロパティが表示されます。たとえば、次のように入力します。

- Type = Entity Presence
- Class = Discrete Indicator
- Value = Present

アクセス可能なディスクリートセンサーターゲットの種類とそれらにアクセスするためのパスの詳細は、サーバプラットフォームに付属のユーザーマニュアルを参照してください。

▼ システムインジケータの設定

作業を開始する前に

- システムインジケータを設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、システムインジケータの設定を行います。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. システムインジケータの状態を変更できるかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
-> cd /SYS or cd /CH
```

```
-> show
```

システムインジケータに関連付けられたターゲット、プロパティ、およびコマンドが表示されます。

たとえば、次のように入力します。

```
/SYS
Targets:
  BIOS
  OK2RM
  SERVICE

Properties:
  type = Host System
  chassis_name = SUN BLADE 8000 CHASSIS
  chassis_part_number = 602-3235-00
  chassis_serial_number = 00:03:BA:CD:59:6F
  chassis_manufacturer = SUN MICROSYSTEMS
  fault_state = OK
  clear_fault_action = (none)
  power_state = Off

Commands:
  cd
  reset
  set
  show
  start
  stop
```

Commands の一覧に set コマンドが表示された場合は、システムインジケータの状態を変更できます。

3. システムインジケータの状態を変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set property=state_name
```

使用しているシステムでサポートされているシステムインジケータとそれらにアクセスするためのパスの詳細は、サーバプラットフォームに付属のユーザーマニュアルを参照してください。

▼ クロックの設定

作業を開始する前に

- クロック設定を表示および構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、クロックの設定を行います。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ILOM のクロック設定を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clock
```

3. ILOM のクロックを手動で設定するには、次のように入力します。

```
-> set target property_name=value
```

たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clock datetime=MMDDhhmmYYYY
```

4. NTP サーバの IP アドレスを設定して、ネットワーク上のほかのシステムと同期するように ILOM のクロックを設定するには、次の手順を実行します。

- a. NTP サーバの IP アドレスを設定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/clients/ntp/server/1 address=ip_address
```

- b. NTP の同期化を有効にするには、次のように入力します。

```
-> set /SP/clock usentpserver=enabled
```

次の内容に関するプラットフォーム固有のクロック情報は、サーバプラットフォームのユーザーマニュアルを参照してください。

- ILOM の現在の時間は SP を再起動しても維持されるかどうか。
- ILOM の現在の時間をホストの起動時にホストと同期させることができるかどうか。
- 時刻を格納するリアルタイムクロック要素があるかどうか。

▼ イベントログ出力をフィルタリングする

作業を開始する前に

- イベントログ出力をフィルタリングするには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、イベントログ出力をフィルタリングします。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(value) Type==(value)  
Severity==(value)
```

▼ ILOM イベントログの表示とクリア

作業を開始する前に

- イベントログを表示またはクリアするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ILOM イベントログを表示およびクリアします。

1. サーバ SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
 - ラック搭載型サーバ SP の場合: `cd /SP/logs/event`
 - シャーシ内のブレードサーバ SP の場合: `cd /CH/BLn/SP/logs/event`
 - CMM の場合: `cd /CMM/logs/event`
3. 次のコマンドを入力して、イベントログのリストを表示します。

-> `show list`

イベントログの内容が表示されます。

たとえば、次のように入力します。

ID	Date/Time	Class	Type	Severity
578	Wed Jun 11 06:39:47 2008	Audit	Log	minor
	user1 : Open Session : object = /session/type : value = shell : success			
577	Wed Jun 11 06:34:53 2008	Audit	Log	minor
	user1 : Set : object = /clients/activedirectory/userdomains/3/domain : value = <USERNAME>@joe.customer.example.sun.com : success			
576	Wed Jun 11 06:25:06 2008	Audit	Log	minor
	user1 : Open Session : object = /session/type : value = www : success			
575	Wed Jun 11 06:07:29 2008	Audit	Log	minor
	user1 : Close Session : object = /session/type : value = www : success			
574	Wed Jun 11 06:02:01 2008	Audit	Log	minor
	root : Set : object = /clients/activedirectory/dnslocatorqueries/2/service : value = _ldap._tcp.pc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:636> : success			
573	Wed Jun 11 06:01:50 2008	Fault	Fault	critical
	Fault detected at time = Wed Jun 11 06:01:41 2008. The suspect component:/CH/PS3/EXTERNAL/AC_INPUT has fault.powersupply.no_ac with probability=100 Please consult the Sun Blade 8000 Fault Diagnosis Document (Document ID: 85878) at http://sunsolve.sun.com to determine the correct course of action.			

4. イベントログで、次のいずれかのタスクを実行します。

- リストを下にスクロールし、エントリを表示する – 「q」以外の任意のキーを押します。次の表で、ログに表示される各列について説明します。

列のラベル	説明
Event ID	イベントの番号で、1 番から順に付けられます。
Class/Type	<ul style="list-style-type: none">• Audit/Log – 設定が変更されるコマンド。説明には、ユーザー、コマンド、コマンドパラメータ、成功と失敗が記述されます。• IPMI/Log – IPMI SEL に記録されたイベントは、管理ログにも記録されます。• Chassis/State – インベントリの変更および全般的なシステム状態の変更。• Chassis/Action – サーバのモジュールおよびシャーシの停止イベント、FRU のホットインサート/リムーバブル、および押された「Reset Parameters」 ボタンのカテゴリ。• Fault/Fault – 障害管理の障害。説明には、障害が検出された時刻と疑われる部品が表示されます。• Fault/Repair – 障害管理の修復。説明には部品が表示されます。
Severity	「Debug」、「Down」、「Critical」、「Major」、または「Minor」
Date/Time	イベントが発生した日時です。時間情報プロトコル (NTP) サーバで ILOM 時間を設定できる場合、ILOM クロックは協定世界時 (UTC) を使用します。
Description	イベントの説明。

5. イベントログを閉じる (ログの表示を中止する) には、「q」キーを押します。

6. イベントログ内のエントリをクリアするには、次の手順を実行します。

- a. `set clear=true` と入力します。
確認のメッセージが表示されます。
- b. 次のいずれかを入力します。
 - エントリをクリアするには、`y` と入力します。
 - ログのクリアを取り消すには、`n` と入力します。

注 – ILOM イベントログには、IPMI エントリのコピーを含むさまざまな種類のイベントが蓄積されます。ILOM イベントログをクリアすると、IPMI エントリを含むログ内のすべてのエントリがクリアされます。ただし、ILOM イベントログエントリをクリアしても、IPMI ログに直接送信された実際のエントリはクリアされません。

▼ 遠隔 syslog 受信側の IP アドレスを設定する

作業を開始する前に

- 遠隔 syslog 受信側の IP アドレスを設定するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、遠隔 syslog 受信側の IP アドレスを設定します。

1. サーバ SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
 - ラック搭載型サーバ SP の場合: `cd /SP/clients/syslog`
 - シャーシ内のブレードサーバ SP の場合: `cd /CH/BLn/SP/clients/syslog`
 - CMM の場合: `cd /CMM/clients/syslog`
3. syslog プロパティを表示するには、`show` コマンドを入力します。
プロパティが表示されます。たとえば、SP ではじめて syslog プロパティにアクセスすると、次のように表示されます。

```
/SP/clients/syslog/1
Targets:
Properties:
  address = 0.0.0.0

Commands:
  cd
  set
  show
```

4. `set` コマンドを使用して、IP 1 (さらに、該当する場合は IP 2) の宛先 IP アドレスを特定します。
たとえば、IP 宛先を IP アドレス 111.222.33.4 に設定するには、次のように入力します。
`-> set destination_ip1=111.222.33.4`
5. Enter を押して、設定を有効にします。
IP アドレスの設定の結果が表示されます。たとえば、宛先の IP アドレスを 111.222.33.4 に設定した場合は、次のように表示されます。
`Set 'destination_ip1' to '111.222.33.4'`

▼ 障害の状態を表示する

作業を開始する前に

- 障害の状態を表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、障害の状態を表示します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. サーバプラットフォームに応じて、次のいずれかのパスを指定します。

```
-> show /SP/faultmgmt
```

または

```
-> show /CH/faultmgmt
```

さらに、エイリアスの `show faulty` は、次の ILOM CLI コマンド文字列のショートカットです。

```
-> show -o table -level all /SP/faultmgmt
```

エイリアスでも、このコマンドと同じ出力が生成されます。したがって、このエイリアスを使用すると、システムで発生しているすべての障害を簡潔な表形式で表示できます。たとえば、次のような出力が生成されます。

```
-> show faulty
```

Target	Property	Value
/SP/faultmgmt/0	fru	/SYS/MB
/SP/faultmgmt/0	timestamp	Jan 16 12:53:00
/SP/faultmgmt/0/ faults/0	sunw-msg-id	NXGE-8000-0U
/SP/faultmgmt/0/ faults/0	uuid	e19f07a5-580e-4ea0-ed6a-f663aa61 54d5
/SP/faultmgmt/0/ faults/0	timestamp	Jan 16 12:53:00

システムで提供されている ILOM 障害管理機能の詳細は、サーバプラットフォームに付属のユーザーマニュアルを参照してください。

▼ システムの問題を診断するために SP データを収集する

作業を開始する前に

- サービススナップショットユーティリティを使用して SP データを収集するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。



注意 – ILOM サービススナップショットユーティリティの目的は、保守担当者が問題の診断に使用するデータを収集することです。保守担当者からの依頼がないかぎり、ユーザーはこのユーティリティを決して実行しないでください。

次の手順に従って、サービススナップショットユーティリティを実行します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/diag/snapshot dataset=data  
-> set /SP/diag/snapshot dump_uri=URI
```

この場合、*data* および *URI* は次のいずれかです。

変数	オプション	説明
<i>data</i>	normal	ILOM、オペレーティングシステム、およびハードウェアの各情報を収集することを指定します。
	full	すべてのデータを収集すること（「完全」収集）を指定します。 注 – このオプションを使用すると、実行中のホストがリセットされる場合があります。
	normal-logonly または full-logonly	ログファイルのみを収集することを指定します。
<i>URI</i>	有効なターゲットディレクトリの場所	ターゲットディレクトリの <i>URI</i> を指定します。URI の形式は次のとおりです。 <code>protocol://username:password@host/directory</code> 「protocol」には、「SFTP」、「FTTP」、または「FTP」のいずれかの転送方法を指定できます。 たとえば、ホスト上で <i>data</i> と命名されたディレクトリにスナップショット情報を格納するには、次のように <i>URI</i> を定義してください。 <code>ftp://joe:mypasswd@host_ip_address/data</code> ディレクトリ <i>data</i> はユーザーのログインに対して相対的であるため、ターゲットディレクトリは多くの場合 <code>/home/joe/data</code> になります。

第8章

システム警告の管理

項目	
説明	リンク
準備すべき事柄を確認する	<ul style="list-style-type: none">• 86 ページの「作業を開始する前に」
警告ルールを設定を管理する	<ul style="list-style-type: none">• 87 ページの「警告ルールを作成または編集する」• 88 ページの「警告ルールを無効化する」
テスト警告を生成して警告の設定が機能していることを確認する	<ul style="list-style-type: none">• 88 ページの「テスト警告を生成する」
警告ルールを設定を管理する際に使用する必要のある CLI コマンドを確認する	<ul style="list-style-type: none">• 89 ページの「警告ルール設定を管理するための CLI コマンド」
電子メールを使用してシステム警告を受信者に通知する	<ul style="list-style-type: none">• 91 ページの「SMTP クライアントを有効にする」

関連項目		
ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none">• 概念	<ul style="list-style-type: none">• システム監視と警告管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
<ul style="list-style-type: none">• Web インタフェース	<ul style="list-style-type: none">• システム警告の管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』
<ul style="list-style-type: none">• IPMI と SNMP ホスト	<ul style="list-style-type: none">• インベントリと部品の管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

警告ルールの設定の管理

項目

説明	リンク
準備すべき事柄を確認する	<ul style="list-style-type: none">• 86 ページの「作業を開始する前に」
警告の設定を行う	<ul style="list-style-type: none">• 87 ページの「警告ルールを作成または編集する」• 88 ページの「警告ルールを無効化する」
テスト警告を生成して警告の設定が機能していることを確認する	<ul style="list-style-type: none">• 88 ページの「テスト警告を生成する」
電子メールを使用してシステム警告を受信者に通知する	<ul style="list-style-type: none">• 91 ページの「SMTP クライアントを有効にする」

作業を開始する前に

- 電子メール通知警告を定義する場合は、電子メール通知の送信に使用する送信電子メールサーバを ILOM で設定する必要があります。送信電子メールサーバが設定されていないと、ILOM は正常に電子メール通知警告を生成できません。
- バージョンを SNMP v3 に設定して SNMP トラップ警告を定義する場合は、ILOM で SNMP ユーザーとして SNMP ユーザー名が定義されている必要があります。ILOM でユーザーが SNMP ユーザーとして定義されていないと、SNMP 警告の受信者は SNMP 警告メッセージを復号化できません。
- 警告ルール設定を管理するための CLI コマンドを確認してください。[89 ページの「警告ルール設定を管理するための CLI コマンド」](#)を参照してください。

▼ 警告ルールを作成または編集する

作業を開始する前に

- 警告ルールを作成または編集するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、警告ルールを設定します。

1. サーバ SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドパスを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
 - ラック搭載型サーバの場合: `cd /SP/alertmgmt`
 - ブレードサーバモジュールの場合: `cd /SP/alertmgmt`
 - シャーシ CMM の場合: `cd /CMM/alertmgmt`
3. 警告ルールに関連付けられているプロパティを表示するには、`show` コマンドを入力します。

たとえば、最初の警告ルールに関連付けられているプロパティを表示するには、次のいずれかを入力します。

- ラック搭載型サーバの場合: `show /SP/alertmgmt/rules/1`
- ブレードサーバモジュールの場合: `show /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules/1`
- シャーシ CMM の場合: `show /CMM/alertmgmt/CMM/rules/1`

4. 警告ルールに関連付けられているプロパティに値を割り当てるには、`set` コマンドを入力します。

たとえば、ルール 1 の警告の種類として IPMI PET を設定するには、次のようにコマンドパスを入力します。

```
-> set /SP/alertmgmt/rules/1 type=ipmipet
```

注 - 警告ルール設定を有効にするには、警告の種類、警告レベル、および警告の宛先に値を指定する必要があります。SNMP 警告の種類を定義する場合は、SNMP トラップ警告の受信を認証するための値を任意で定義できます。

▼ 警告ルールを無効化する

作業を開始する前に

- 警告ルールを無効にするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- 次の手順に従って、警告ルールを無効にします。

1. サーバ SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドパスを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
 - ラック搭載型サーバ SP の場合は、次のように入力します。
`cd /SP/alertmgmt/rules/n`
 - ブレードサーバ SP の場合は、次のように入力します。
`cd /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules/n`
 - シャーシ CMM の場合は、次のように入力します。
`cd /CMM/alertmgmt/CMM/rules/n`

ここで、*n* は特定の警告ルール番号に相当し、1 ~ 15 の値になります。
[BL*n* は、サーバモジュール (ブレード) のスロット番号を表します。]
3. 警告ルールを無効にするには、次のコマンドを入力します。
`-> set level=disable`

▼ テスト警告を生成する

作業を開始する前に

- 警告テストを生成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- テスト警告を送信することによって、有効な警告ルール設定をそれぞれテストできます。

次の手順に従って、テスト警告を生成します。

1. サーバ SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドパスを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
 - ラック搭載型サーバ SP の場合は、次のように入力します。
`cd /SP/alertmgmt/rules`
 - ブレードサーバ SP の場合は、次のように入力します。
`cd /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules`
 - シャーシ CMM の場合は、次のように入力します。
`cd /CMM/alertmgmt/CMM/rules`
3. 次のコマンドを入力して、有効な各警告ルール設定のテスト警告を生成します。
`-> set testalert=true`

警告ルール設定を管理するための CLI コマンド

次の表に、ILOM CLI を使用して警告ルール設定を管理するために使用する必要がある CLI コマンドを示します。

表 8-1 警告ルール設定を管理するための CLI コマンド

CLI コマンド	説明
show	<p>show コマンドを使用すると、フルパスまたは相対パスのいずれかを指定して、任意のレベルの警告管理コマンドツリーを表示できます。</p> <p>次に例を示します。</p> <ul style="list-style-type: none">フルパスを使用して警告ルールとともにそのプロパティを表示するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。 -> show /SP/alertmgmt/rules/1 /SP/alertmgmt/rules/1 Properties: community_or_username = public destination = 129.148.185.52 level = minor snmp_version = 1 type = snmptrap Commands: cd set showフルパスを使用して1つのプロパティを表示するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。 -> show /SP/alertmgmt/rules/1 type /SP/alertmgmt/rules/1 Properties: type = snmptrap Commands: set show

表 8-1 警告ルール設定を管理するための CLI コマンド (続き)

CLI コマンド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> 現在のツリーの場所が <code>/SP/alertmgmt/rules</code> である場合の相対パスを指定するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。 <pre>-> show 1/ /SP/alertmgmt/rules/1 Targets: Properties: community_or_username = public destination = 129.148.185.52 level = minor snmp_version = 1 type = snmptrap Commands: cd set show</pre>
cd	<p>cd コマンドを使用すると、作業用ディレクトリを設定できます。サーバ SP の作業用ディレクトリとして警告管理を設定するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。</p> <pre>-> cd /SP/alertmgmt</pre>
set	<p>set コマンドを使用すると、ツリー内の任意の場所からプロパティに値を設定できます。ツリーの場所に応じて、プロパティのフルパスまたは相対パスのいずれかを指定できます。たとえば、次のように入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> フルパスの場合は、コマンドプロンプトで次のように入力します。 <pre>-> set /SP/alertmgmt/rules/1 type=ipmipet</pre> 相対パス (ツリーの場所が <code>/SP/alertmgmt</code>) の場合、コマンドプロンプトで次のコマンドパスを入力します。 <pre>-> set rules/1 type=ipmipet</pre> 相対パス (ツリーの場所が <code>/SP/alertmgmt/rules/1</code>) の場合、コマンドプロンプトで次のコマンドパスを入力します。 <pre>-> set type=ipmipet</pre>

電子メール通知警告用の SMTP クライアントの設定

項目

説明

リンク

電子メールを使用してシステム警告を受信者に通知する

• [91 ページの「SMTP クライアントを有効にする」](#)

▼ SMTP クライアントを有効にする

作業を開始する前に

- SMTP クライアントを有効にするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- 設定済みの電子メール通知警告を生成するには、ILOM クライアントが SMTP クライアントとして動作し、電子メール警告メッセージを送信できるようにする必要があります。
- ILOM クライアントを SMTP クライアントとして有効にする前に、電子メール通知を処理する送信 SMTP 電子メールサーバの IP アドレスとポート番号を確認してください。

次の手順に従って、SMTP クライアントを有効にします。

1. サーバ SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドパスを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
 - ラック搭載型サーバ SP の場合は、次のように入力します。
`cd /SP/clients/smtp`
 - ブレードサーバ SP の場合は、次のように入力します。
`cd /CH/BLn/SP/clients/smtp`
 - シャーシ CMM の場合は、次のように入力します。`cd /CMM/clients/smtp`

3. SMTP プロパティを表示するには、show コマンドを入力します。

たとえば、SP ではじめて SMTP プロパティにアクセスすると、次のように表示されます。

```
-> show
/SP/clients/smt
Targets
  Properties
    address = 0. 0. 0. 0
    port = 25
    state = enabled
Commands:
  cd
  set
  show
```

4. set コマンドを使用して、SMTP クライアントの IP アドレスを指定するか、ポートまたは状態プロパティ値を変更します。

たとえば、次のように入力します。

```
->set address=222.333.44.5
```

5. Enter を押して、変更を有効にします。

たとえば、set address=222.333.44.5 と入力した場合、次のような結果が表示されます。

```
Set 'address=222.333.44.5'
```

第9章

消費電力の監視

項目

説明	リンク
消費電力インタフェースを監視する	<ul style="list-style-type: none">95 ページの「システムの合計消費電力を監視する」96 ページの「実際の消費電力を監視する」96 ページの「個々の電源装置の消費電力を監視する」97 ページの「使用可能な電力を監視する」97 ページの「ハードウェア構成の最大消費電力の監視」97 ページの「許容消費電力を監視する」98 ページの「電力ポリシーを設定する」

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• 消費電力管理インタフェース	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
• Web インタフェース	• 消費電力の監視	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』
• IPMI と SNMP ホスト	• 消費電力の監視	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

消費電力インタフェースの監視

項目

説明	リンク
消費電力インタフェースを監視する	<ul style="list-style-type: none">• 95 ページの「システムの合計消費電力を監視する」• 96 ページの「実際の消費電力を監視する」• 96 ページの「個々の電源装置の消費電力を監視する」• 97 ページの「使用可能な電力を監視する」• 97 ページの「許容消費電力を監視する」• 98 ページの「電力ポリシーを設定する」

この章では、使用可能な電源管理インタフェースによって消費電力を監視する方法について説明します。消費電力の監視に関する用語は、『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』の「電源監視の用語」の節で定義されています。

注 – この章で説明する消費電力インタフェースは、使用しているプラットフォームによっては、実装されている場合と実装されていない場合があります。実装の詳細については、プラットフォーム固有の ILOM の補足マニュアルまたはプロダクトノートを参照してください。これらの資料は、システムに付属のマニュアルセットに含まれています。

作業を開始する前に

システムの消費電力または個々の電源装置の消費電力を監視するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

▼ システムの合計消費電力を監視する

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 合計消費電力を表示するには、`show` コマンドを入力します。
たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SYS/VPS
```

```
-> show /SYS/VPS property
```

次の表に、CLI の合計消費電力センサーのプロパティを示します。

プロパティ	値
type	しきい値はプラットフォーム固有です。詳細は、使用しているプラットフォームのマニュアルを参照してください。
class	
value	
upper_nonrecov_threshold	
upper_critical_threshold	
upper_noncritical_threshold	
lower_noncritical_threshold	
lower_critical_threshold	
lower_nonrecov_threshold	

合計消費電力プロパティの `actual_power` には、次のコマンドを入力することによってもアクセスできます。

```
-> show /SP/powermgmt actual_power
```

`actual_power` は、`/SYS/VPS` と同じです。`actual_power` は、センサーから返される値です。

▼ 実際の消費電力を監視する

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 実際の消費電力を表示するには、show コマンドを入力します。
たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/powermgmt actual_power
```

▼ 個々の電源装置の消費電力を監視する

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 個々の電源装置の消費電力を表示するには、show コマンドを入力します。
たとえば、次のように入力します。

- ラック搭載型システム上の CLI の場合:

```
-> show /SYS/platform_path_to_powersupply/INPUT_POWER|OUTPUT_POWER
```

- CMM 上の CLI の場合:

```
-> show /CH/platform_path_to_powersupply/INPUT_POWER|OUTPUT_POWER
```

次の表に、CLI センサーのプロパティを示します。INPUT_POWER および OUTPUT_POWER のどちらのセンサーにも同じプロパティがあります。

プロパティ	値
type	Power Unit
class	Threshold Sensor
value	<合計消費電力 (W 単位)。たとえば、「1400」>
upper_nonrecov_threshold	該当なし
upper_critical_threshold	該当なし
upper_noncritical_threshold	該当なし
lower_noncritical_threshold	該当なし
lower_critical_threshold	該当なし
lower_nonrecov_threshold	該当なし

注 - 電力センサーは、サーバモジュール (ブレード) ではサポートされていません。

▼ 使用可能な電力を監視する

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 使用可能電力を表示するには、`show` コマンドを入力します。
たとえば、次のように入力します。
 - ラック搭載型システム上の CLI の場合:
`-> show /SP/powermgmt available_power`
 - CMM 上の CLI の場合:
`-> show /CMM/powermgmt available_power`

▼ ハードウェア構成の最大消費電力の監視

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ハードウェア構成の最大消費電力を表示するには、`show` コマンドを入力します。
たとえば、次のように入力します。
`-> show /SP/powermgmt hwconfig_power`

▼ 許容消費電力を監視する

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 許容消費電力を表示するには、`show` コマンドを入力します。
たとえば、次のように入力します。
 - ラック搭載型システム上の CLI の場合:
`-> show /SP/powermgmt permitted_power`
 - CMM 上の CLI の場合:
`-> show /CMM/powermgmt permitted_power`

▼ 電力ポリシーを設定する

作業を開始する前に

- 電力ポリシーを設定するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- 特定のプラットフォームでの電力ポリシー実装の詳細は、使用しているプラットフォームの ILOM マニュアルを参照してください。

注 – この章で説明する電力ポリシーは、使用しているプラットフォームによっては、実装されている場合と実装されていない場合があります。実装の詳細については、プラットフォーム固有の ILOM の補足マニュアルまたはプロダクトノートを参照してください。これらの資料は、システムに付属のマニュアルセットに含まれています。

次の手順に従って、電力ポリシーを設定します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 電力ポリシーを設定するには、`set` コマンドを入力します。
-> `set /SP/powermgmt policy=Performance|Elastic`
3. 電力ポリシーを表示するには、`show` コマンドを入力します。
-> `show /SP/powermgmt policy`

第10章

ILOM 設定のバックアップおよび復元

項目

説明	リンク
ILOM 設定のバックアップ	• 100 ページの「ILOM 設定のバックアップ」
ILOM 設定の復元	• 101 ページの「ILOM 設定を復元する」
バックアップ XML ファイルを編集する	• 103 ページの「バックアップ XML ファイルの編集」
ILOM 設定をデフォルト設定にリセットする	• 106 ページの「ILOM 設定をデフォルトにリセットする」

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• 設定の管理とファームウェアの更新	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
• Web インタフェース	• ILOM 設定のバックアップおよび復元	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』
• IPMI と SNMP ホスト	• ILOM 設定の管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

ILOM 設定のバックアップ

項目

説明

リンク

ILOM 設定をバックアップする

• [100 ページの「ILOM 設定のバックアップ」](#)

▼ ILOM 設定のバックアップ

作業を開始する前に

- Admin、User Management、Console、Reset and Host Control、および Read Only (a、u、c、r、o) の役割が割り当てられたユーザーとして ILOM CLI にログインします。ILOM SP 設定の完全なバックアップを実行するには、これらの役割が必要です。
- 上記の役割を持たないユーザーアカウントを使用すると、作成される設定バックアップファイルに ILOM SP 設定のすべてのデータが含まれなくなる場合があります。

次の手順に従って、ILOM 設定をバックアップします。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. /SP/config ディレクトリに変更します。次のように入力します。
-> `cd /SP/config`
3. ユーザーパスワード、SSH 鍵、証明書などの機密データをバックアップする場合は、パスフレーズを入力する必要があります。次のように入力します。

-> `set passphrase=passphrase`

4. バックアップ操作を開始するには、/SP/config ディレクトリ内から次のコマンドを入力します。

-> `set dump_uri=
transfer_method://username:password@ipaddress_or_hostname/directorypath/
filename`

各表記の意味は次のとおりです。

- `transfer_method` には、`tftp`、`ftp`、`sftp`、`scp`、`http`、または `https` を指定できます。
- `username` は、リモートシステムでのユーザーアカウントの名前です。(username は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。username は、`tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)

- `password` は、リモートシステムでのユーザーアカウントのパスワードです。
(`password` は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。`password` は、`tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)
- `ipaddress_or_hostname` は、リモートシステムの IP アドレスまたはホスト名です。
- `directorypath` は、リモートシステム上の保存位置です。
- `filename` は、バックアップファイルに割り当てられている名前です。

たとえば、次のように入力します。

```
-> set dump_uri=
scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/Backup/Lab9/SP123.config
```

バックアップ操作が実行され、操作が完了するとプロンプトが表示されます。通常、バックアップ操作が完了するには 2 から 3 分かかります。

注 – バックアップ操作の実行中は、ILOM SP 上のセッションが一時的に停止します。バックアップ操作が完了すると、セッションは正常動作を再開します。

ILOM 設定の復元

項目

説明

リンク

ILOM 設定の復元

• [101 ページの「ILOM 設定を復元する」](#)

▼ ILOM 設定を復元する

作業を開始する前に

- Admin、User Management、Console、Reset and Host Control、および Read Only (a, u, c, r, o) の役割が割り当てられたユーザーとして ILOM CLI にログインします。ILOM SP 設定の完全な復元を実行するには、これらの役割が必要です。
- 復元操作の実行時には、バックアップファイルの作成に使用したユーザーアカウントの権限と同じかそれ以上の権限を持つユーザーアカウントを使用してください。権限が少ないと、バックアップされている設定データの一部が復元されない場合があります。復元されないすべての設定プロパティは、イベントログに示されます。したがって、イベントログを確認することにより、すべての構成プロパティが復元されたかどうかを検証できます。

次の手順に従って、ILOM 設定を復元します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. /SP/config ディレクトリに変更します。次のように入力します。
-> `cd /SP/config`
3. バックアップファイルの作成時にパスワードが指定されている場合、復元操作を実行するには同じパスワードを指定する必要があります。次のように入力します。

-> `set passphrase=passphrase`

パスワードは、バックアップファイルの作成時に使用したパスワードと同じである必要があります。

4. 復元操作を開始するには、次のように入力します。

-> `set load_uri=
transfer_method://username:password@ipaddress_or_hostname/directorypath/
filename`

各表記の意味は次のとおりです。

- `transfer_method` には、`tftp`、`ftp`、`sftp`、`scp`、`http`、または `https` を指定できます。
- `username` は、リモートシステムでのユーザーアカウントの名前です。(`username` は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。 `username` は、`tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)
- `password` は、リモートシステムでのユーザーアカウントのパスワードです。(`password` は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。 `password` は、`tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)
- `ipaddress_or_hostname` は、リモートシステムの IP アドレスまたはホスト名です。
- `directorypath` は、リモートシステム上の保存位置です。
- `filename` は、バックアップファイルに割り当てられている名前です。

たとえば、次のように入力します。

-> `set load_uri=
scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/Backup/Lab9/SP123.config`

復元操作が実行されます。XML ファイルが構文解析されます。通常、復元操作が完了するには 2 から 3 分かかります。

注 – 復元操作の実行中は、ILOM SP 上のセッションが一時的に停止します。復元操作が完了すると、セッションは正常動作を再開します。

バックアップ XML ファイルの編集

項目

説明

リンク

バックアップ XML ファイルを編集する

• [103 ページの「バックアップ XML ファイルの編集」](#)

▼ バックアップ XML ファイルの編集

作業を開始する前に

- バックアップされた XML ファイルを別のシステムで使用する前に、ファイルを編集して、IP アドレスなどの特定のシステムに固有の情報をすべて削除する必要があります。

バックアップされた XML ファイルの例を次に示します。ファイルの内容は、この手順で使用する例に合わせて省略されています。

```
<SP_config version="3.0">
<entry>
<property>/SP/check_physical_presence</property>
<value>>false</value>
</entry>
<entry>
<property>/SP/hostname</property>
<value>labysystem12</value>
</entry>
<entry>
<property>/SP/system_identifier</property>
<value>SUN BLADE X8400 SERVER MODULE, ILOM v3.0.0.0, r32722
</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/clock/datetime</property>
<value>Mon May 12 15:31:09 2008</value>
</entry>
.
.
.
```

```

<entry>
<property>/SP/config/passphrase</property>
<value encrypted="true">89541176be7c</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/network/pendingipaddress</property>
<value>1.2.3.4</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/network/commitpending</property>
<value>>true</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/services/snmp/sets</property>
<value>enabled</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/users/john/role</property>
<value>aucro</value>
</entry>
<entry>
<entry>
<property>/SP/users/john/password</property>
<value encrypted="true">c21f5a3df51db69fdf</value>
</entry>
</SP_config>

```

1. この XML ファイルの例で、次の点を確認します。

- パスワードとパスフレーズ以外の設定情報は平文です。
- ファイルの最初の設定エン트리である `check_physical_presence` プロパティは、`false` に設定されています。デフォルト設定は `true` なので、この設定はデフォルトの ILOM 設定が変更されていることを表しています。
- `pendingipaddress` と `commitpending` の設定は、各サーバに固有であるため、復元操作でバックアップ XML ファイルを使用する前に削除しなければならない設定の例です。

- ユーザーアカウントの john には、a、u、c、r、o の役割が設定されています。デフォルトの ILOM 設定ではユーザーアカウントが設定されていないため、このアカウントはデフォルトの ILOM 設定が変更されていることを表しています。
- SNMP の sets プロパティは、enabled に設定されています。デフォルト設定は disabled です。

2. 平文の設定情報を変更するには、値を変更するか、新しい設定情報を追加します。

たとえば、次のように入力します。

- ユーザー john に割り当てられている役割を変更するには、テキストを次のように変更します。

```
<entry>
<property>/SP/users/john/role</property>
<value>auo</value>
</entry>
<entry>
```

- 新しいユーザーアカウントを追加し、そのアカウントに a、u、c、r、o の役割を割り当てるには、ユーザー john のエントリのすぐ下に次のテキストを追加します。

```
<entry>
<property>/SP/users/bill/role</property>
<value>aucro</value>
</entry>
<entry>
```

- パスワードを変更するには、encrypted="true" 設定と暗号化されたパスワード文字列を削除し、パスワードを平文で入力します。たとえば、ユーザー john のパスワードを変更するには、テキストを次のように変更します。

```
<entry>
<property>/SP/users/john/password</property>
<value>newpassword</value>
</entry>
```

3. バックアップ XML ファイルに変更を加えたら、同じシステムや別のシステムでの復元操作に使用できるようにファイルを保存します。

ILOM 設定のリセット

項目	
説明	リンク
ILOM 設定をデフォルト設定にリセットする	106 ページの「ILOM 設定をデフォルトにリセットする」

▼ ILOM 設定をデフォルトにリセットする

作業を開始する前に

- ILOM 設定をデフォルト設定にリセットするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ILOM 設定をデフォルト設定にリセットします。

1. ILOM の CLI にログインします。

2. /SP ディレクトリに変更します。次のように入力してください。

```
-> cd /SP
```

3. デフォルト設定にリセットするために選択するオプションに応じて、次のいずれかのコマンドを入力します。

- all オプションを使用して ILOM 設定をリセットする場合は、次のように入力します。

```
-> set reset_to_defaults=all
```

ILOM SP が次に再起動すると、ILOM 設定がデフォルト設定に復元されます。

- factory オプションを使用して ILOM 設定をリセットする場合は、次のように入力します。

```
-> set reset_to_defaults=factory
```

ILOM SP が次に再起動すると、ILOM 設定がデフォルト設定に復元され、ログファイルが消去されます。

- 直前に指定したリセット操作を取り消す場合は、次のように入力します。

```
-> set reset_to_defaults=none
```

ILOM SP の再起動前に `reset_to_defaults=none` コマンドが発行された場合のみ、前に発行された `reset_to_defaults` コマンドが取り消されます。

第11章

ILOM ファームウェアの更新

項目	
説明	リンク
準備すべき事柄を確認する	<ul style="list-style-type: none">• 108 ページの「作業を開始する前に」
ILOM ファームウェアの更新	<ul style="list-style-type: none">• 109 ページの「ILOM ファームウェアのバージョンを識別する」• 109 ページの「SPARC ベースのシステムに新しいファームウェアをダウンロードする」• 110 ページの「ファームウェアイメージを更新する」
ファームウェア更新時のネットワーク問題をトラブルシューティングする	<ul style="list-style-type: none">• 112 ページの「ファームウェア更新時のネットワーク障害から 回復する」
ILOM SP のリセット	<ul style="list-style-type: none">• 112 ページの「ILOM SP のリセット」

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• 設定の管理とファームウェアの更新	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
• Web インタフェース	• ILOM ファームウェアの更新	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』
• IPMI と SNMP ホスト	• ILOM ファームウェア設定の構成	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 SNMP および IPMI 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

ILOM ファームウェアの更新

項目

説明	リンク
準備すべき事柄を確認する	<ul style="list-style-type: none">• 108 ページの「作業を開始する前に」
現在の ILOM ファームウェアのバージョンを識別する	<ul style="list-style-type: none">• 109 ページの「ILOM ファームウェアのバージョンを識別する」
使用しているシステムのファームウェアをダウンロードする	<ul style="list-style-type: none">• 109 ページの「SPARC ベースのシステムに新しいファームウェアをダウンロードする」
ファームウェアイメージを更新する	<ul style="list-style-type: none">• 110 ページの「ファームウェアイメージを更新する」
ファームウェア更新時のネットワーク問題をトラブルシューティングする	<ul style="list-style-type: none">• 112 ページの「ファームウェア更新時のネットワーク障害から回復する」

作業を開始する前に

この節の手順を実行する前に、次の要件を確認してください。

- システム上で現在動作している ILOM のバージョンを識別します。
- プラットフォームの製品 Web サイトから、使用しているサーバまたは CMM のファームウェアイメージをダウンロードします。
- サポートされているプロトコル (TFTP、FTP、HTTP、HTTPS) を使用してファームウェアイメージをサーバにコピーします。CLI で更新する場合は、ローカルサーバにイメージをコピーします。Web インタフェースで更新する場合は、Web ブラウザが動作しているシステムにイメージをコピーします。
- プラットフォームで必要になる場合は、サーバ SP のファームウェアを更新する前に、ホストオペレーティングシステムを停止します。
- Admin (a) 役割のアカウント権限をもつ ILOM ユーザー名とパスワードを取得します。システム上でファームウェアを更新するには、Admin (a) 権限が必要です。
- ファームウェアの更新プロセスの完了には、約 6 分かかります。この間、ほかの ILOM タスクを実行しないでください。ファームウェアの更新が完了すると、システムが再起動します。

▼ ILOM ファームウェアのバージョンを識別する

作業を開始する前に

- ファームウェアのバージョンを識別するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ILOM ファームウェアのバージョンを識別します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、`version` と入力します。
たとえば、次の情報が表示されます。

```
SP firmware 3.0.0.1
SP firmware build number: #####
SP firmware date: Fri Nov 28 14:03:21 EDT 2008
SP filesystem version: 0.1.22
```

▼ SPARC ベースのシステムに新しいファームウェアをダウンロードする

1. <http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/download/firmware/> を参照します。
2. 使用しているサーバ用の最新のファームウェアアップデートを選択します。
3. ファームウェアの使用条件を確認し、「Accept」をクリックします。
4. 「Download」をクリックして zip ファイルパッケージをダウンロードします。
5. zip パッケージを、使用しているネットワークからアクセス可能な TFTP サーバに保存します。
6. zip ファイルパッケージを解凍します。
7. 110 ページの「ファームウェアイメージを更新する」に進みます。

▼ ファームウェアイメージを更新する

作業を開始する前に

- ILOM ファームウェアを更新するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- プラットフォームで必要になる場合は、サーバ SP のファームウェアを更新する前に、ホストオペレーティングシステムを停止します。
- ホストオペレーティングシステムを正常に停止するには、ILOM Web インタフェースで「Remote Power Controls」 -> 「Graceful Shutdown and Power Off」 オプションを使用するか、ILOM CLI から stop /SYS コマンドを発行します。

次の手順に従って、ファームウェアイメージを更新します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ファームウェアを更新するためにネットワークに接続されていることを確認します。

たとえば、次のように入力します。

- サーバ SP でのネットワーク接続を確認するには、次のように入力します。
-> `show /SP/network`
- CMM でのネットワーク接続を確認するには、次のように入力します。
-> `show /CMM/network`

3. 次のコマンドを入力して、ILOM ファームウェアイメージをロードします。

```
-> load -source <supported_protocol>://<server_ip>/<path_to_firmware_image>/<filename.xxx>
```

ファームウェア更新プロセスについての注意が表示され、続いてイメージのロードのためのメッセージプロンプトが表示されます。この注意の内容は、使用しているサーバプラットフォームによって異なります。

4. 指定したファイルのロードについてのプロンプトで、「はい」の場合は「y」、「いいえ」の場合は「n」を入力します。

設定の保存を確認するプロンプトが表示されます。

例:

```
Do you want to preserve the configuration (y/n)?
```

5. 設定の保存についてのプロンプトで、「はい」の場合は「y」、「いいえ」の場合は「n」を入力します。

ILOM の既存の設定を保存して更新プロセスの完了後に復元する場合は、「y」と入力します。

注 - このプロンプトで「n」と入力すると、プラットフォーム固有の別のプロンプトが表示されます。

6. 次のいずれかの操作を実行します。

- システムに 2.x ファームウェアリリースがインストールされている場合、システムは指定されたファームウェアファイルをロードしてから自動的に再起動して、ファームウェアの更新を完了します。手順 7 に進みます。
- SPARC システムに 3.x ファームウェアリリースがインストールされている場合、システムは指定されたファームウェアファイルをロードしてから自動的に再起動して、ファームウェアの更新を完了します。手順 7 に進みます。
- x64 システムに 3.x ファームウェアリリースがインストールされている場合は、BIOS アップデートの延期を確認するプロンプトが表示されます。たとえば、次のように入力します。

Do you want to force the server off if BIOS needs to be upgraded (y/n)?

- a. BIOS アップデートの延期についてのプロンプトで、「はい」の場合は「y」、「いいえ」の場合は「n」を入力します。

システムは、指定されたファームウェアファイルをロードしてから自動的に再起動して、ファームウェアの更新を完了します。

注 – BIOS についてのプロンプトは、現在 3.x ファームウェアリリースが動作している x64 システムでのみ表示されます。このプロンプトで「はい」(y) と答えると、システムが次に再起動するまで、BIOS アップデートが延期されます。「いいえ」(n) と答えると、必要に応じて、ファームウェアの更新時に BIOS が自動的に更新されます。

- b. 手順 7 に進みます。

7. SSH 接続を使用し、手順 1 で入力したユーザー名とパスワードを使用して、ILOM サーバ SP または CMM に再接続します。

注 – ファームウェアを更新する前に ILOM の設定を保存していない場合、ILOM に再接続するには ILOM の初期セットアップ手順を実行する必要があります。

8. 正しいファームウェアバージョンがインストールされていることを確認します。CLI プロンプトで、次のように入力します。

-> version

▼ ファームウェア更新時のネットワーク障害から回復する

ファームウェア更新プロセスを実行しているときにネットワーク障害が発生した場合、ILOM は自動的にタイムアウトし、システムを再起動します。

次の手順に従って、ファームウェア更新時のネットワーク障害から回復してください。

1. ネットワークの問題に対処し、解決します。
2. ILOM SP に再接続します。
3. ファームウェア更新プロセスを再起動します。

ILOM SP のリセット

項目

説明

リンク

ILOM サービスプロセッサをリセットする

• [112 ページの「ILOM SP のリセット」](#)

▼ ILOM SP のリセット

ILOM サービスプロセッサ (SP) のリセットが必要な場合は、ホスト OS に影響を与えずにリセットできます。ただし、SP をリセットすると、現在の ILOM セッションが切断され、リセット中は SP が管理不可能な状態になります。

作業を開始する前に

- SP をリセットするには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。
- ILOM/BIOS ファームウェアを更新したら、ILOM SP をリセットする必要があります。

ILOM/BIOS ファームウェアを更新したら、次の手順に従って SP をリセットします。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。
-> `reset /SP`
SP がリセットされ、再起動します。

第12章

遠隔ホストの管理

項目

説明	リンク
準備すべき事柄を確認する	<ul style="list-style-type: none">• 114 ページの「作業を開始する前に」
ストレージリダイレクトをセットアップしてストレージデバイスをリダイレクトする	<ul style="list-style-type: none">• 114 ページの「ストレージリダイレクトの初期セットアップタスクの実行」• 120 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」
リモートサーバモジュールの電源状態の制御	<ul style="list-style-type: none">• 126 ページの「電源状態コマンドの発行」
診断テストを実行する	<ul style="list-style-type: none">• 127 ページの「SPARC システムのハードウェア問題の診断」

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none">• 概念	<ul style="list-style-type: none">• 遠隔ホスト管理オプション	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
<ul style="list-style-type: none">• Web インタフェース	<ul style="list-style-type: none">• 遠隔ホストの管理	『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/> から入手できます。

ストレージリダイレクトの初期セットアップタスクの実行

次の表に、ILOM で Storage Redirection CLI 機能をセットアップするために実行する必要があるタスクを順番に示します。

手順	作業	説明
1	この節の初期セットアップ手順を実行する前に、すべての要件が満たされていることを確認します。	• 114 ページの「作業を開始する前に」
2	Storage Redirection サービスをインストールし（または開き）、今後この機能にアクセスする方法を指定します。	• 115 ページの「Storage Redirection サービスを起動する」
3	Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールします。	• 117 ページの「Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールする」

注 – ILOM 3.0 の Storage Redirection CLI は、SPARC プロセッサベースの一部のサーバでサポートされています。この機能は、ILOM 2.0 が動作するシャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module、CMM) ではサポートされていません。

作業を開始する前に

システムでストレージリダイレクトをセットアップする前に、次の準備すべき事柄を確認してください。

- ローカルシステムから遠隔ホストサーバ SP の ILOM Web インタフェースへの接続が確立されている必要があります。
- サーバモジュール SP が ILOM 3.0 以降を実行している必要があります。

注 – Storage Redirection CLI は、ILOM 2.0 ではサポートされていません。また、ILOM 2.0 または 3.0 を実行する CMM でもサポートされていません。

- システムに Java Runtime Environment (1.5 以降) がインストールされている必要があります。最新の Java Runtime Environment をダウンロードするには、<http://java.com> にアクセスしてください。

注 – 使用しているデスクトップで JAVA_HOME 環境が設定されていない場合は、フルパスを入力しなければならないことがあります。

- ILOM で有効なユーザーアカウントを持つユーザーはすべて、そのユーザーのローカルシステムで Storage Redirection サービスまたはクライアントを起動したりインストールしたりすることができます。ただし、Storage Redirection CLI の初期セットアップが完了したあと、リモートサーバでストレージデバイス (CD/DVD または ISO イメージ) のリダイレクトを開始または停止するためには、有効な Admin (a) 役割または Console (c) 役割のアカウントの入力が要求されます。
- Storage Redirection CLI で使用されるデフォルトのネットワーク通信ポートは、2121 です。このデフォルトのソケットポートを使用すると、Storage Redirection CLI がネットワーク経由で遠隔ホストサーバの SP と通信することができます。デフォルトのネットワークポートを変更する必要がある場合は、Jnlpgenerator-cli ファイルを編集して、デフォルトのポート番号 (2121) を手動で書き換える必要があります。このポートを変更する手順については、30 ページの「シリアルポート設定の表示と構成」を参照してください。

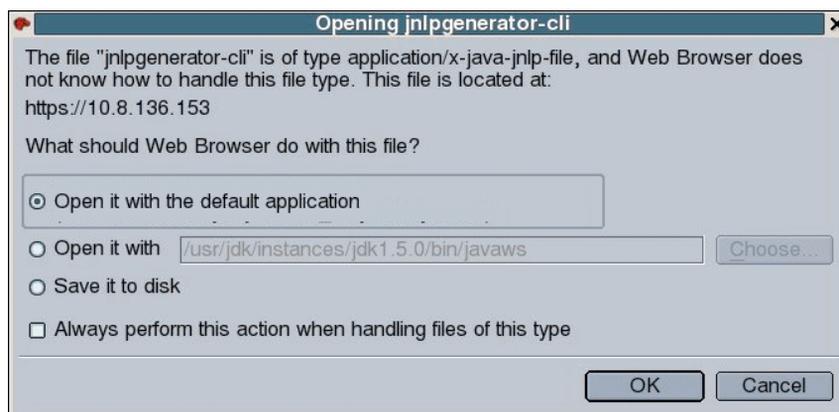
▼ Storage Redirection サービスを起動する

作業を開始する前に

- Storage Redirection CLI を起動する前に、ローカルシステムで Storage Redirection サービスの単一のセッションが開始されている必要があります。

次の手順に従って、Storage Redirection サービスを起動し、今後このサービスを ILOM Web インタフェースから起動するかコマンドウィンドウまたは端末から起動するかを指定します。

1. SP ILOM Web インタフェースにログインします。
2. 「Remote Control」 --> 「Redirection」を選択します。
「Launch Redirection」ページが表示されます。
3. 「Launch Service」をクリックします。
「Opening Jnlpgenerator-cli」ダイアログが表示されます。



4. 「Opening Jnlpgenerator-cli」ダイアログで、次のいずれかの操作を実行します。

- ローカルシステムに `jnlpgenerator-cli` ファイルを保存し、サービスをコマンド行から直接実行するには、「Save it to disk」を選択して、「OK」をクリックします。

このオプションを選択すると、今後サービスを起動するために ILOM Web インタフェースにサインインする必要がなくなります。サービスをコマンドウィンドウまたは端末から直接起動できるようになります。
- サービスを ILOM Web インタフェースから直接実行するには、「Open it with the default application」を選択して、「OK」をクリックします。

このオプションを選択すると、`jnlp` ファイルはローカルシステムに保存されず、今後サービスを起動するには、Storage Redirection CLI を起動する前に ILOM Web インタフェースにサインインする必要があります。

注 – ILOM Web インタフェースからサービスを起動するたびに「Opening Jnlpgenerator-cli」ダイアログが再表示されないようにするには、「Always perform this action when handling files of this type」チェックボックスを選択 (有効化) します。ただし、このオプションを有効にすると、ILOM Web インタフェースからサービスを起動したりインストールしたりするときこのダイアログを表示することができなくなります。

注 – 将来、ストレージリダイレクト機能のデフォルト通信ポート番号 (2121) の変更が必要になった場合、「Opening Jnlpgenerator-cli」ダイアログを表示させ、使用しているシステムに `jnlpgenerator-cli` ファイルを保存して編集する必要があります。このような場合は、「Always perform this action when handling files of this type」オプションを選択 (有効化) することをお勧めしません。デフォルトのポート番号の変更の詳細については、30 ページの「シリアルポート設定の表示と構成」を参照してください。

Java Web Start アプリケーションがダウンロード中であることを示すいくつかのダイアログが表示されます。

5. 次のいずれかの操作を実行します。

- 手順 4 で `jnlpgenerator-cli` ファイルを保存するよう選択した場合は、次の手順を実行します。
 - a. 「Save As」ダイアログで、`jnlpgenerator-cli` ファイルをローカルシステム上に保存します。
 - b. コマンド行からサービスを起動するために、コマンドウィンドウまたは端末を開きます。
 - c. `jnlpgenerator-cli` ファイルをインストールした場所に移動し、`javaws rconsole.jnlp` コマンドを発行してサービスを起動します。

たとえば、次のように入力します。

```
-> cd <jnlp_file_location>javaws rconsole.jnlp
```

- Web インタフェースから直接サービスを実行する (「Open with default application」を選択した) 場合は、次の手順を実行します。
 - a. 「Warning Security」ダイアログで、「Run」をクリックして Storage Redirection サービスを起動します。

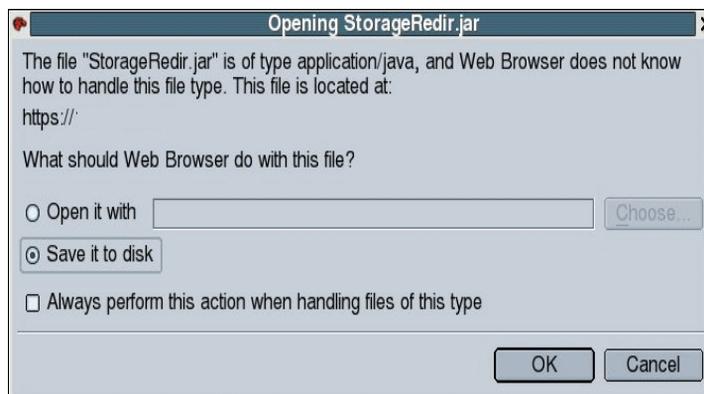
注 – Storage Redirection サービスの起動に失敗すると、エラー状況を示すエラーメッセージが表示されます。一方、エラーメッセージが表示されなかった場合は、サービスが起動しており、ユーザー入力を待機しています。

▼ Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールする

次の手順に従って、ローカルシステムに Storage Redirection クライアントをダウンロードし、インストールします。

注 – Storage Redirection クライアントは、1 回限りのクライアントインストールです。

1. SP の ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」 --> 「Redirection」を選択します。
「Launch Redirection」ページが表示されます。
2. 「Download Client」をクリックします。
「Opening StorageRedir.jar」ダイアログが表示されます。



3. 「Opening StorageRedir.jar」ダイアログで、「Save it to Disk」をクリックし、「OK」をクリックします。
「Save As」ダイアログが表示されます。

注 - .jar ファイルをほかの遠隔クライアントにインストールするたびに「Opening StorageRedir」ダイアログが再表示されないようにするには、「Always perform this action when handling files of this type」チェックボックスを選択 (有効化) します。ただし、このオプションを有効にすると、今後 .jar ファイルをダウンロードするときにこのダイアログ (「Opening StorageRedir」) を表示することができなくなります。

4. 「Save As」ダイアログで、StorageRedir.jar ファイルをローカルシステム上に保存します。

ストレージデバイスをリダイレクトするために Storage Redirection CLI を起動する

次の表に、Storage Redirection CLI からストレージメディアをリダイレクトするために実行する必要があるタスクを順番に示します。

手順	作業	リンク
1	Storage Redirection CLI を使用する前に、すべての要件が満たされていることを確認します。	<ul style="list-style-type: none">• 119 ページの「作業を開始する前に」
2	Storage Redirection CLI を起動します。	<ul style="list-style-type: none">• 120 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」
3	必要に応じて、Storage Redirection サービスが動作していることを確認します。	<ul style="list-style-type: none">• 121 ページの「Storage Redirection サービスが動作していることを確認する」
4	必要に応じて、コマンド行のヘルプを表示します。または Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法の詳細を学習します。	<ul style="list-style-type: none">• 122 ページの「Storage Redirection CLI のヘルプ情報を表示する」

手順	作業	リンク
5	CLI からストレージデバイスをリダイレクトします。	<ul style="list-style-type: none"> 123 ページの「ストレージデバイスのリダイレクトを開始する」
6	アクティブなストレージデバイスのリストを表示します。	<ul style="list-style-type: none"> 124 ページの「アクティブなストレージリダイレクトを表示する」
7	ストレージデバイスのリダイレクトを停止します。	<ul style="list-style-type: none"> 124 ページの「ストレージデバイスのリダイレクトを停止する」

作業を開始する前に

この節の手順を実行する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- ローカルシステムで Storage Redirection サービスが起動している必要があります。ローカルシステムにサービスがインストールされている場合は、コマンドウィンドウまたは端末から起動できます。サービスがローカルシステムにインストールされていない場合は、サービスを ILOM Web インタフェースから起動する必要があります。Storage Redirection サービスのインストールまたは開始方法については、115 ページの「Storage Redirection サービスを起動する」を参照してください。
- ローカルシステムに Storage Redirection クライアント (StorageRedir.jar) がインストールされている必要があります。Storage Redirection クライアントのインストール方法の詳細については、117 ページの「Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールする」を参照してください。
- ローカルシステムに Java Runtime Environment (1.5 以降) がインストールされている必要があります。最新の Java Runtime Environment をダウンロードするには、<http://java.com> にアクセスしてください。
- リモートサーバでストレージデバイス (CD/DVD または ISO イメージ) のリダイレクトを開始または停止するには、ILOM に有効な Admin (a) 役割または Console (c) 役割のアカウントが必要です。ユーザーアカウントおよび役割の詳細については、41 ページの「ユーザーアカウントに役割を割り当てる」を参照してください。

注 – ILOM で有効なユーザーアカウントを持つユーザーはすべて、Storage Redirection CLI を (コマンドウィンドウまたは端末から) 起動したり、サービスの状態を確認したり、アクティブなストレージリダイレクトの発生を表示したりすることができます。

- Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法の詳細については、151 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」を参照してください。

▼ コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する

作業を開始する前に

- Storage Redirection CLI を起動する前に、Storage Redirection サービスを起動している必要があります。サービスを起動する手順については、[115 ページの「Storage Redirection サービスを起動する」](#)を参照してください。

次の手順に従って、コマンドウィンドウまたは端末から Storage Redirection CLI を起動します。

1. コマンド行インタフェースを開きます。

たとえば、次のように入力します。

- Windows システムの場合: 「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」をクリックし、cmd と入力して、「OK」をクリックします。
- Solaris または Linux システムの場合: デスクトップで端末ウィンドウを開きます。

2. 次のいずれかの操作を実行します。

- 対話型シェルモードからコマンドを入力するには、次の手順を実行します。

- a. コマンド行インタフェースで、cd コマンドを使用して、Storage Redirection クライアント (StorageRedir.jar) がインストールされているディレクトリに移動します。

たとえば、次のように入力します。

```
cd <my_settings>/<storage_redirect_directory>
```

- b. ディレクトリプロンプトで、次のコマンドを入力して Storage Redirection CLI を起動します。

```
java -jar StorageRedir.jar
```

たとえば、次のように入力します。

```
C:\Documents and Settings\<redirectstorage>>java -jar StorageRedir.jar  
<storageredir> プロンプトが表示されます。
```

- 非対話型シェルモードからコマンドを入力するには、次の手順を実行します。

- a. コマンド行インタフェースで、シェルプロンプト (\$) に Storage Redirection CLI を起動するコマンド (java -jar StorageRedir.jar) を入力します。

```
$ java -jar StorageRedir.jar
```

注 - JAVA_HOME 環境が設定されていない場合は、Java バイナリへのフルパスを使用しなければならないことがあります。たとえば、JDK パッケージを /home/user_name/jdk の下にインストールした場合は、次のように入力します。
/home/user_name/jdk/bin/java -jar ...

注 – Storage Redirection CLI の起動に失敗すると、エラー状況を示す詳細なエラーメッセージが表示されます。エラーメッセージが表示されない場合は、Storage Redirection CLI はユーザー入力を受け付ける準備ができています。

▼ Storage Redirection サービスが動作していることを確認する

作業を開始する前に

- 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、[120 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

次の手順に従って、Storage Redirection サービスがアクティブかどうかを確認します。

- <storageredir> プロンプトで、次のコマンドを入力して、Storage Redirection サービスがアクティブであることを確認します。

テストサービス

たとえば、次のように入力します。

```
<storageredir> test-service
```

または、これと同じコマンド (test-service) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細については、[151 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」](#)を参照してください。

サービス接続の成功または失敗を示すメッセージが表示されます。

注 – サービス接続に失敗する場合は、ILOM Web インタフェースから、またはコマンドウィンドウ (サービスがインストールされている場合) から `javaws rconsole.jnlp` コマンドを発行することにより、Storage Redirection サービスを起動する必要があります。詳細については、[115 ページの「Storage Redirection サービスを起動する」](#)を参照してください。

▼ Storage Redirection CLI のヘルプ情報を表示する

作業を開始する前に

- 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、[120 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

次の手順に従って、Storage Redirection CLI のヘルプ情報を表示します。

- <storageredir> プロンプトで、次のコマンドを入力して、コマンド行のヘルプを表示します。

help

たとえば、次のように入力します。

```
<storageredir> help
```

コマンドの構文および使用方法に関する次の情報が表示されます。

Usage:

```
list [-p storageredir_port] [remote_SP]
start -r redir_type -t redir_type_path
      -u remote_username [-s remote_user_password]
      [-p storageredir_port] remote_SP
stop -r redir_type -u remote_username
     [-s remote_user_password] [-p storageredir_port] remote_SP
stop-service [-p storageredir_port]
test-service [-p storageredir_port]
help
version
quit
```

または、これと同じコマンド (help) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細については、[151 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」](#)を参照してください。

▼ ストレージデバイスのリダイレクトを開始する

作業を開始する前に

- ストレージデバイスのリダイレクトを開始するには、Admin (a) 役割または Console (c) の役割を有効にする必要があります。
- 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、[120 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。
- 以下の手順で示すコマンドは、ひと続きの文字列として入力してください。

次の手順に従って、Storage Redirection CLI からストレージデバイスのリダイレクトを開始します。

- <storageredir> プロンプトで、start コマンドと、そのあとに遠隔 SP のリダイレクトデバイスの種類、デバイスへのパス、遠隔 SP ユーザー名とパスワード、および IP アドレスに関するコマンドとプロパティを入力します。
たとえば、次のように入力します。

```
<storageredir> start -r redir_type -t redir_type_path -u remote_username  
[-s remote_user_password] [-p non_default_storageredir_port] remote_SP_IP
```

または、これと同じコマンド (start) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細については、[151 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」](#)を参照してください。

注 - リモートサーバのストレージデバイスのリダイレクトを開始するには、有効な Admin 役割または Console 役割のアカウントを指定する必要があります (-u remote_username [-s remote_user_password])。パスワードコマンド (-s remote_user_password) を指定しないと、システムが自動的にパスワードの入力を要求します。

▼ アクティブなストレージリダイレクトを表示する

作業を開始する前に

- 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、[120 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

次の手順に従って、1 つまたは複数の遠隔ホストサーバ SP のアクティブなストレージリダイレクトを表示します。

- <storageredir> プロンプトで、list コマンドと、その後ろに遠隔ホストサーバ SP のデフォルト以外の任意のストレージリダイレクトポートおよび IP アドレスに対するサブコマンドとプロパティを入力します。

たとえば、次のように入力します。

```
<storageredir> list [-p non_default _storageredir_port] remote_SP
```

または、これと同じコマンド (list) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細については、[151 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」](#)を参照してください。

指定された各サーバ SP のアクティブなストレージリダイレクトを示すリストが表示されます。

▼ ストレージデバイスのリダイレクトを停止する

- ストレージデバイスのリダイレクトを停止するには、Admin (a) 役割または Console (c) の役割を有効にする必要があります。
- 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、[120 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。
- 以下の手順で示すコマンドは、ひと続きの文字列として入力してください。

次の手順に従って、リモートサーバ上のストレージデバイスのリダイレクトを停止します。

- <storageredir> プロンプトで、stop コマンドと、その後ろに遠隔ホストサーバ SP のストレージデバイスの種類、遠隔 SP ユーザー名とパスワード、ストレージリダイレクトポート、および IP アドレスに関するコマンドとプロパティを入力します。

たとえば、次のように入力します。

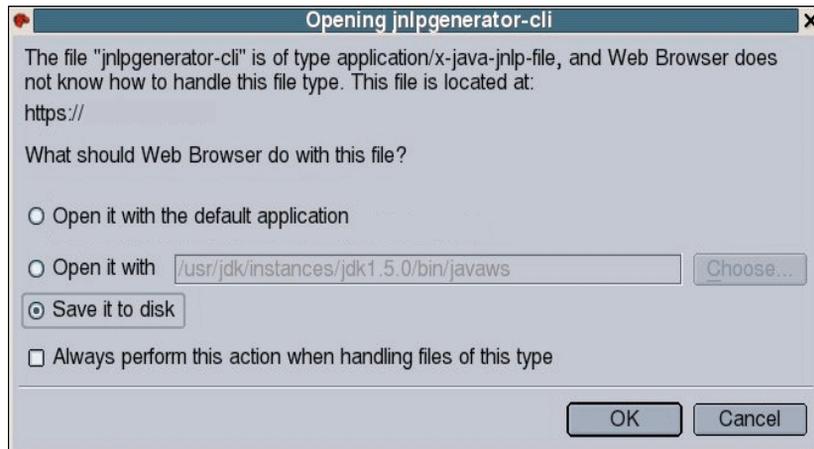
```
<storageredir> stop -r redir_type -u remote_username  
[-s remote_user_password] [-p non_default_storageredir_port] remote_SP
```

または、これと同じコマンド (stop) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細については、[151 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」](#)を参照してください。

注 – リモートサーバのストレージデバイスのリダイレクトを停止するには、有効な Admin 役割または Console 役割のアカウントを指定する必要があります (-u remote_username [-s remote_user_password])。パスワードコマンド (-s remote_user_password) を指定しないと、システムが自動的にパスワードの入力を要求します。

▼ ストレージリダイレクトのデフォルトネットワークポートを変更する 2121

1. SP の ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」 --> 「Redirection」を選択します。
「Launch Redirection」 ページが表示されます。
2. 「Launch Service」 をクリックします。
「Opening Jnlpgenerator-cli」 ダイアログが表示されます。



3. 「Opening Jnlpgenerator-cli」 ダイアログで、「Save it to disk」 をクリックし、「OK」 をクリックします。
「Save As」 ダイアログが表示されます。

4. 「Save As」ダイアログで、jnlpgenerator-cli ファイルを保存する場所を指定します。
5. テキストエディタを使用して jnlpgenerator-cli ファイルを開き、このファイルで参照されているポート番号を変更します。

たとえば、次のように入力します。

```
<application-desc>  
<argument>cli</argument>  
<argument>2121</argument>  
</application-desc>
```

<application-desc> で、2 つ目の引数を、使用する任意のポート番号に変更することができます。

6. 変更を保存し、jnlpgenerator-cli ファイルを閉じます。
7. javaws を使用して、ローカルクライアントから Storage Redirection サービスを起動します。

たとえば、次のように入力します。

```
javaws jnlpgenerator-cli
```

注 – 指定されたデフォルトポート番号を使用しない場合は、ストレージリダイレクトを開始、停止、または表示するたびに、Storage Redirection コマンド行インタフェースでデフォルト以外のポート番号を識別する必要があります。

電源状態コマンドの発行

コマンドウィンドウまたは端末から、次のコマンドを発行して、ホストサーバの電源状態を遠隔から制御できます。

- **start**. 遠隔ホストサーバの電源を完全に投入するには、start コマンドを使用します。

例: -> start /SYS

- **stop**. 遠隔ホストサーバの電源を切断する前に OS を正常に停止するには、stop コマンドを使用します。

例: -> stop /SYS

- **stop -f**。遠隔ホストサーバの電源をただちに切断するには、`stop -f` コマンドを使用します。

例: `-> stop -f /SYS`

- **Reset**。遠隔ホストサーバをただちに再起動するには、`reset` コマンドを使用します。

例: `-> reset /SYS`

ILOM CLI からのホストサーバへの接続またはコマンド発行については、[23 ページ](#)の「[ILOM の通信設定](#)」を参照してください。

SPARC システムのハードウェア問題の診断

作業	リンク
診断テストを設定および実行するための要件が満たされていることを確認する	127 ページの「作業を開始する前に」
診断テストを実行するようにシステムを設定する	128 ページの「診断モードを設定する」
アクティブ化する診断トリガーを指定する	128 ページの「診断トリガーを指定する」
実行する診断のレベルを指定する	129 ページの「診断のレベルを指定する」
実行される診断テストの出力の詳細度を指定する	130 ページの「診断出力の詳細度を指定する」

作業を開始する前に

この節の手順を実行する前に、次の要件を確認してください。

- SPARC システムで診断テストを設定および実行するには、`Reset and Host Control (r)` の役割を有効にする必要があります。

▼ 診断モードを設定する

ホストモードプロパティ `/HOST/diag` を使用して、診断を有効にするかどうかを制御し、有効にする診断モードを指定します。

次の手順に従って、診断モードを設定します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag mode=value
```

ここで、*value* は、次のいずれかです。

- `off` – どのような診断も実行しません。
- `normal` – 診断を実行します (デフォルト値)。

3. ホストの電源をリセットして、診断テストを実行します。

▼ 診断トリガーを指定する

ホストでの電源投入時の自己診断テスト (Power-On Self-Test、POST) を実行させる 1 つまたは複数のトリガーを選択できます。

次の手順に従って、トリガーレベルを設定します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag trigger=value
```

ここで、*value* は、次のいずれかです。

- `none` – 診断はトリガーによって実行されません。
- `user-reset` – ユーザーによるリセット時に診断が実行されます。
- `power-on-reset` – 電源投入時に診断が実行されます。
- `error-reset` – エラーによるリセット時に診断が実行されます。
- `all-resets` – 上記のいずれの種類のリセット時にも診断が実行されます。

▼ 診断のレベルを指定する

診断の実行がトリガーされた状況に応じて、実行する診断テストのレベルを指定できる個別の ILOM CLI プロパティがあります。これにより、各種のホストリセット状況でどの程度の診断テストを実行するかを詳細に制御できます。

/HOST/diag *level* プロパティを使用して、診断が有効になったときに実行される診断のレベルを指定します。

次の手順に従って、実行される診断のレベルを指定します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ホストのリセット状況に応じて、次のいずれかのコマンドを実行します。
 - ホストの電源投入時の診断レベルを指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag power_on_level=value
```

- ユーザーがホストをリセットした場合の診断レベルを指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag user_reset_level=value
```

- システムエラーによってホストがリセットされた場合の診断レベルを指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag error_reset_level=value
```

ここで、*value* は、次のいずれかです。

- min – 最小レベルの診断を実行してシステムを検証します。
- max – 最大設定の診断を実行してシステムの健全性を完全に検証します (デフォルト値)。

注 – ILOM 2.x との下位互換性を維持するために、以前からあるプロパティ /HOST/diag *level* も、すべての種類のトリガーに同じ診断レベルを指定するショートカットとして引き続きサポートされています。/HOST/diag *level* に対して設定された値はどんな値でも、3つのトリガー固有プロパティ (power_on_level、user_reset_level、および error_reset_level) のすべてに適用されます。

3. ホストの電源をリセットして、診断テストを実行します。

▼ 診断出力の詳細度を指定する

診断の実行がトリガーされた状況に応じて、実行する診断の出力の詳細度を指定できる固有の ILOM CLI プロパティがあります。これにより、各種のホストリセット状況でどの程度の診断出力を行うかを詳細に制御できます。

次の手順に従って、診断出力の詳細度を指定します。

1. ILOM の CLI にログインします。
2. ホストのリセット状況に応じて、次のいずれかのコマンドを実行します。
 - ホストの電源投入時に実行される診断の出力の詳細度を指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag power_on_verbosity=value
```

- ユーザーがホストをリセットした場合に実行される診断の出力の詳細度を指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag user_reset_verbosity=value
```

- システムエラーによってホストがリセットされた場合に実行される診断の出力の詳細度を指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag error_reset_verbosity=value
```

ここで、*value* は、次のいずれかです。

- *none* – 障害が検出されないかぎり、診断の実行時にシステムコンソールには出力が表示されません。
- *min* – 診断で、制限された量の出力がシステムコンソールに表示されます。
- *normal* – 診断で、適度な量の出力がシステムコンソールに表示されます (デフォルト値)。
- *max* – 診断で、実行されている各テストの名前と結果を含む完全な出力がシステムコンソールに表示されます。
- *debug* – 診断で、テストされているデバイスと各テストのデバッグ出力を含む広範囲なデバッグの出力がシステムコンソールに表示されます。

注 – ILOM 2.x との下位互換性を維持するために、以前からあるプロパティ `/HOST/diag verbosity` も、すべての種類のトリガーに同じ出力詳細度を指定するショートカットとして引き続きサポートされています。 `/HOST/diag verbosity` に対して設定された値はどんな値でも、3つのトリガー固有の詳細度プロパティ (`power_on_verbosity`、`user_reset_verbosity`、および `error_reset_verbosity`)。

3. ホストの電源をリセットして、診断テストを実行します。

付録 A

CLI コマンドリファレンス

CLI コマンドリファレンス

このセクションには、CLI コマンドに関する参照情報を示します。

cd コマンド

cd コマンドを使用すると、ネームスペースを操作できます。ターゲットの場所に cd を行うと、その場所がほかのすべてのコマンドのデフォルトターゲットになります。ターゲットなしで `-default` オプションを使用すると、最上位のネームスペースに戻ります。cd `-default` を入力すると、cd `/` を入力した場合と同じ結果が得られます。cd とだけ入力すると、ネームスペースの現在の場所が表示されます。help `targets` と入力すると、ネームスペース全体にあるすべてのターゲットのリストが表示されます。

構文

`cd target`

オプション

`[-default] [-h|help]`

ターゲットとプロパティ

ネームスペースの任意の場所。

例

emmett というユーザー名を作成するには、`/SP/users` に `cd` を行い、デフォルトのターゲットとして `/SP/users` を使用して `create` コマンドを実行します。

```
-> cd /SP/users
```

```
-> create emmett
```

自分の場所を表示するには、`cd` と入力します。

```
-> cd /SP/users
```

create コマンド

`create` コマンドを使用すると、ネームスペースのオブジェクトを設定できます。`create` コマンドで特定のプロパティを指定しないかぎり、プロパティは空です。

構文

```
create [options] target [propertyname=value]
```

オプション

```
[-h|help]
```

ターゲット、プロパティ、および値

表 A-1 create コマンドのターゲット、プロパティ、および値

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト
<code>/SP/users/username</code>	password	<文字列>	(none)
	role	administrator operator a u c r o s	o
<code>/SP/services/snmp/communities</code> <code>/communityname</code>	permissions	ro rw	ro
<code>/SP/services/snmp/user/</code> <code>username</code>	authenticationprotocol	MD5	MD5
	authenticationpassword	<文字列>	(空文字列)
	permissions	ro rw	ro
	privacyprotocol	none DES	DES
	privacypassword	<文字列>	(空文字列)

例

```
-> create /SP/users/susan role=administrator
```

delete コマンド

delete コマンドを使用すると、ネームスペースのオブジェクトを削除できます。delete コマンドを確認するプロンプトが表示されます。-script オプションを使用することで、このプロンプトの表示を省略できます。

構文

```
delete [options] [-script] target
```

オプション

```
[-h|help] [-script]
```

ターゲット

表 A-2 delete コマンドのターゲット

有効なターゲット

/SP/users/username

/SP/services/snmp/communities/communityname

/SP/services/snmp/user/username

例

```
-> delete /SP/users/susan
```

```
-> delete /SP/services/snmp/communities/public
```

dump コマンド

dump コマンドを使用すると、ファイルをターゲットから URI で指定した遠隔位置へ転送できます。

構文

```
dump -destination <URI> target
```

オプション

```
[-destination]
```

exit コマンド

exit コマンドを使用すると、CLI のセッションを終了できます。

構文

```
exit [options]
```

オプション

```
[-h|help]
```

help コマンド

help コマンドを使用すると、コマンドとターゲットについてのヘルプ情報を表示できます。-o|output terse オプションを使用すると、使用方法に関する情報のみが表示されます。

-o|output verbose オプションでは、使用方法、説明、およびコマンド使用例などの追加情報が表示されます。

-o|output オプションを使用しない場合は、コマンドの使用法と簡単な説明が表示されません。

command targets を指定すると、/SP と /SYS にある固定ターゲットのうち、そのコマンドに有効なターゲットの詳細リストが表示されます。固定ターゲットとは、ユーザーが作成できないターゲットです。

command targets legal を指定すると、著作権情報と製品使用権が表示されます。

構文

```
help [options] command target
```

オプション

```
[-h|help] [-o|output terse|verbose]
```

コマンド

cd, create, delete, exit, help, load, reset, set, show, start, stop, version

例

```
-> help load
The load command transfers a file from a remote location specified
by the URI and updates the given target.
Usage: load [-script] -source <URI> [target]
-source: Specify the location to get a file.
```

```
-> help -output verbose reset
The reset command is used to reset a target.
Usage: reset [-script] [target]
Available options for this command:
-script: Do not prompt for yes/no confirmation and act as if yes
were specified.
```

load コマンド

load コマンドを使用すると、Uniform Resource Indicator (URI) で特定されるソースからイメージファイルを転送し、ILOM のファームウェアを更新できます。URI によって、転送に使用するプロトコルと認証を指定できます。load コマンドは、複数のプロトコル (TFTP、SCP、FTP) をサポートしています。認証が必要であっても指定しない場合は、パスワードの入力を求めるコマンドプロンプトが表示されます。
-script オプションを使用すると、yes または no を確認するプロンプトの表示が省略され、yes が指定されたものとしてコマンドが動作します。

注 – このコマンドは、ILOM のファームウェアと BIOS を更新するために使用します。

表 A-3 load コマンドのターゲット、プロパティ、および値

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/users/username	password	<文字列>	(none)
	role	administrator operator o l a l c r l o l s	o

構文

load -source *URI*

オプション

[-h|help] [-script]

例

```
-> load -source tftp://ip_address/newmainimage
```

注 – ファームウェアをアップグレードすると、サーバと ILOM はリセットされます。アップグレード処理の前に、サーバの正常な停止を行うことをお勧めします。アップグレードの完了には、約 5 分かかります。ILOM は、特別なモードに入って、新しいファームウェアをロードします。ファームウェアのアップグレードが完了して ILOM がリセットされるまで、ほかのタスクは実行できません。

```
-> load -source tftp://ip_address/newmainimage
Are you sure you want to load the specified file (y/n)? y
File upload is complete.
Firmware image verification is complete.
Do you want to preserve the configuration (y/n)? n
Updating firmware in flash RAM:
.
Firmware update is complete.
ILOM will not be restarted with the new firmware.
```

reset コマンド

reset コマンドを使用すると、ターゲットの状態をリセットできます。リセット操作を確認するプロンプトが表示されます。-script オプションを使用することで、このプロンプトの表示を省略できます。

注 – reset コマンドは、ハードウェアデバイスの電源状態には影響を与えません。

構文

reset [*options*] *target*

オプション

[-h|help] [-script]

(-f|force オプションは SPARC ベースシステムでサポートされます)

ターゲット

表 A-4 reset コマンドのターゲット

有効なターゲット

/SP

/SYS

例

```
-> reset /SP
```

```
-> reset /SYS
```

set コマンド

set コマンドを使用すると、ターゲットのプロパティを指定できます。

構文

set [*options*] *target* [*propertyname=value*]

オプション

[-h|help]

ターゲット、プロパティ、および値

表 A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト
<code>/SP/alertmgmt/rules</code>	<code>testalert</code>	<code>true</code>	(none)
<code>/SP/alertmgmt/rules/ rulename</code> (<code>rulename = 1 ~ 15</code>)	<code>community_or_username</code>	<文字列>	public
	<code>destination</code>	<code>email_address</code>	(none)
	<code>destination_port</code>	<整数>	0
	<code>event_class_filter</code>	" " Log Email Internal Captive Shell Backup Restore Audit IPMI Chassis Fault System ActDir	(none)
	<code>event_type_filter</code>	" " Developer Connection Send Product Chassis Command Entered State Action Fault Repair Warning	(none)
	<code>level</code>	disable down critical major minor	(none)
	<code>snmp_version</code>	1 2c 3	3
	<code>type</code>	email ipmipet snmptrap	(none)
<code>/SP/clock</code>	<code>datetime</code>	現在の日時	<string>
	<code>timezone</code>	EST PST8PDT	GMT
	<code>usentpserver</code>	enabled disabled	disabled
<code>/SP/services/http</code>	<code>port</code>	<整数>	80
	<code>secureredirect</code>	enabled disabled	enabled
	<code>servicestate</code>	enabled disabled	disabled
<code>/SP/services/https</code>	<code>port</code>	<整数>	443
	<code>servicestate</code>	enabled disabled	disabled
<code>/SP/services/ipmi</code>	<code>servicestate</code>	enabled disabled	enabled
<code>/SP/services/kvms</code>	<code>mousemode</code>	absolute relative	absolute
	<code>servicestate</code>	enabled disabled	enabled

表A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/services/snmp	engineid	<16 進数>	IP アドレス
	port	<整数>	161
	sets	enabled disabled	disabled
	v1	enabled disabled	disabled
	v2c	enabled disabled	disabled
	v3	enabled disabled	enabled
	servicestate	enabled disabled	enabled
/SP/services/snmp/ communities/private	permission	ro rw	rw
/SP/services/snmp/ communities/public	permission	ro rw	ro
/SP/services/snmp/user /username	authenticationprotocol	MD5	MD5
	authenticationpassword	<文字列>	(空文字列)
	permissions	ro rw	ro
	privacyprotocol	none DES	DES
	privacypassword	<文字列>	(空文字列)
/SP/services/ssh	external_host		
	generate_new_key_action	true	(none)
	generate_new_key_type	rsa dsa	(none)
	restart_sshd_action	true	(none)
	state	enabled disabled	enabled
/SP/services/sso	state	enabled disabled	enabled
/SP/users/username	role	administrator operator a u c r o l s	(none)
	password	<文字列>	(none)
/SP/clients/ activedirectory	state	enabled disabled	disabled
	certfilestatus	<文字列>	(none)
	defaultrole	administrator operator a u c r o l s	o
	dnslocatormode	enabled disabled	
	address	<IP アドレス>	(none)
	port	<0 ~ 65535 の整数>	(none)
	strictcertmode	enabled disabled	disabled
	timeout	<整数>	(none)
/SP/clients/ activedirectory/ admingroups/n	name	<文字列>	(none)

n は 1 ~ 5

表A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト
<code>/SP/clients/ activedirectory/ opergroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name	<文字列>	(none)
<code>/SP/clients/ activedirectory/ userdomains/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	domain	<文字列>	(none)
<code>/SP/clients/ activedirectory/ customgroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name role	<文字列> a u c r o s administrator operator	(none) o
<code>/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	address port	<文字列> a u c r o s administrator operator	(none) o
<code>/SP/clients/ activedirectory/ cert/</code>	certstatus clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version	<文字列> true <文字列> tftp ftp scp <文字列> <文字列> <文字列> <文字列> <文字列>	(none) (none) (none) (none) (none) (none) (none) (none)
<code>/SP/clients/ activedirectory/ dnslocatorqueries/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	service	<DOMAIN>	(none)
<code>/SP/clients/dns</code>	auto_dns nameserver retries searchpath timeout	enabled disabled <文字列> <0 ~ 5 の整数> <文字列> <1 ~ 10 の整数>	disabled (none) (none) (none) (none)

表A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/clients/ldap	binddn	<ユーザー名>	(none)
	bindpw	<文字列>	(none)
	defaultrole	administrator operator a u c r o l s	o
	address	<IP アドレス> none	(none)
	port	<整数>	389
	searchbase	<文字列>	(none)
	state	enable disabled	disabled
/SP/clients/ldapssl	address	<IP アドレス> または	(none)
	logdetail	<DNS 名> none high medium low trace	(none)
	strictcertmode	enabled disabled	disabled
	address	<IP アドレス> none	389
	port	<整数>	o
	defaultrole	administrator operator a u c r o l s	o
	state	enabled disabled	disabled
/SP/clients/ldapssl/ admingroups/n <i>n</i> は 1 ~ 5	name	<文字列>	(none)
/SP/clients/ldapssl/ opergroups/n <i>n</i> は 1 ~ 5	name	<文字列>	(none)
/SP/clients/ldapssl/ userdomains/n <i>n</i> は 1 ~ 5	domain	<文字列>	(none)
/SP/clients/ldapssl/ customgroups/n <i>n</i> は 1 ~ 5	domain	<文字列>	(none)
/SP/clients/ldapssl/ alternateservers/n <i>n</i> は 1 ~ 5	domain	<文字列>	(none)
/SP/clients/ldapssl/ cert/n <i>n</i> は 1 ~ 5	domain	<文字列>	(none)
/SP/clients/ntp/server/ [1 2]	address	<IP アドレス>	(none)

表A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/clients/radius	defaultrole	administrator operator a u	operator
	address	c r o s none	
	port	<ipaddress> none	(none)
	secret	<整数>	1812
	state	<文字列> none enable disabled	(none) disabled
/SP/clients/smtp	address	<IP アドレス>	IP アドレス
	port	<整数>	25
	state	enabled disabled	enabled
/SP/clients/syslog[1 2]	address	<IP アドレス>	IP アドレス
/SP/config	dump_uri	tftp ftp sftp scp http https	(none)
	load_uri	tftp ftp sftp scp http https	(none)
	passphrase	<文字列>	(none)
/SP/diag	snapshot	(none)	(none)
/SP/network	commitpending	true	(none)
	pendingipaddress	<IP アドレス> none	(none)
	pendingdiscovery	dhcp static	dhcp
	pendingipgateway	<IP アドレス> none	(none)
	pendingipnetmask	<点で区切られた IP の 10 進数>	10.8.255.255
	state	enabled disabled	enabled
/SP/serial/external	commitpending	true	(none)
	flowcontrol	none	none
	pendingspeed	<リストの整数>	9600
	speed	<リストの整数>	9600
/SP/serial/host	commitpending	true	(none)
	pendingspeed	<リストの整数>	9600
	speed	<リストの整数>	9600
/SP/	check_physical_presence	true false	(none)
	hostname	<文字列>	(none)
	reset_to_defaults	all factory none	(none)
	system_contact	<文字列>	(none)
	system_description	<文字列>	(none)
	system_identifier	<文字列>	(none)
	system_location	<文字列>	(none)

注 - show コマンドと set コマンドでターゲット /SP/serial/host を指定することは、SPARC サーバではサポートされていません。SPARC サーバでは仮想コンソールが実装され、物理コンソールは実装されません。

例

```
-> set /SP/users/susan role=administrator
-> set /SP/clients/ldap state=enabled binddn=proxyuser bindpw=ez24get
```

show コマンド

show コマンドを使用すると、ターゲットとプロパティについての情報を表示できます。

-display オプションは、表示される情報の種類を決定します。-display *targets* を指定すると、現在のターゲットの下にあるネームスペースのすべてのターゲットが表示されます。-display プロパティを指定すると、ターゲットのすべてのプロパティ名と値が表示されます。このオプションでは、特定のプロパティ名を指定することができ、これらの値のみ表示されます。-display *all* を指定すると、現在のターゲットの下にあるネームスペースのすべてのターゲットと、指定したターゲットのプロパティが表示されます。-display オプションを指定しない場合、show コマンドは -display *all* が指定されたものとして動作します。

-level オプションは、show コマンドの深さを制御し、-display オプションのすべてのモードに適用されます。-level 1 を指定すると、オブジェクトが存在するネームスペースのレベルが表示されます。1 より大きい値の場合、ネームスペースのターゲットの現在のレベルおよび <指定した値> のレベルより下にあるレベルの情報を返します。-level *all* 引数を指定すると、ネームスペースの現在のレベルとそれより下のレベルの情報すべてが表示されます。

-o|output オプションは、コマンド出力の内容と形式を指定します。ILOM では、表形式でターゲットおよびプロパティを表示する -o *table* のみをサポートしています。

エイリアスの show components は、次の CLI コマンドのショートカットです。

```
-> show -o table -level all /SYS component state
```

show components エイリアスでも、このコマンドと同じ出力が生成されます。したがって、ユーザーはこのエイリアスを使用して、ターゲットごとに 1 つのプロパティに限定して表出力を行うことができます。

構文

```
show [options] [-display targets|properties|all] [-level value|all] target [propertyname]
```

オプション

```
[-d|-display] [-l|level] [-o|output]
```

ターゲットとプロパティ

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SYS</code>	
<code>/SP</code>	
<code>/SP/alertmgmt/rules/ rulename (rulename = 1 ~ 15)</code>	community username destination destination_port event_class_filter event_type_filter level snmp_version type
<code>/SP/clients/ activedirectory</code>	state certfilestatus defaultrole getcertfile address logdetail port strictcertmode timeout
<code>/SP/clients/ activedirectory/ admingroups/n n は 1 ~ 5</code>	name
<code>/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/n n は 1 ~ 5</code>	address port
<code>/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/n/cert n は 1 ~ 5</code>	clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SP/clients/ activedirectory/cert</code>	certstatus clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version
<code>/SP/clients/ activedirectory/ customgroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name role
<code>/SP/clients/ activedirectory/ opergroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name
<code>/SP/clients/ activedirectory/ userdomains/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	domain
<code>/SP/clients/dns</code>	auto_dns nameserver searchpath
<code>/SP/clients/ldap</code>	binddn bindpw defaultrole address port searchbase state
<code>/SP/clients/ldapssl</code>	defaultrole address logdetail port state strictcertmode timeout

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SP/clients/ ldapssl/ admingroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name
<code>/SP/clients/ ldapssl/ alternateservers/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	address port
<code>/SP/clients/ ldapssl/ alternateservers/n/cert</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	cert_status clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version
<code>/SP/clients/ldapssl/cert</code>	certstatus clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version
<code>/SP/clients/ldapssl/customgroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name 役割
<code>/SP/clients/ldapssl/opergroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name
<code>/SP/clients/ldapssl/userdomains/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	domain
<code>/SP/clients/ntp/server/[1 2]</code>	address
<code>/SP/clients/radius</code>	address port secret state

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
/SP/clients/sntp	port state
/SP/clock	datetime usntpserver timezone
/SP/config	dump_uri load_uri passphrase
/SP/console	escapechars
/SP/diag/snapshot	dataset dump_uri result
/SP/firmware	load_uri
/SP/logs/event	clear
/SP/network	commitpending dhcp_server_ip ipaddress ipdiscovery ipgateway ipnetmask macaddress pendingipaddress pendingdiscovery pendingipgateway pendingipnetmask state
/SP/powermgmt	actual_power permitted_power available_power
/SP/serial/external	flowcontrol speed
/SP/serial/host	commitpending pendingspeed speed

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SP/services/http</code>	port securedirect servicestate
<code>/SP/services/https</code>	cert_status servicestate
<code>/SP/services/https/ssl</code>	cert_status
<code>/SP/services/https/ssl/default_cert</code>	issued_by issuer serial_number subject valid_from valid_until version
<code>/SP/services/https/ssl/custom_cert</code>	clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version
<code>/SP/services/https/ssl/custom_key</code>	key_present load_uri clear_action
<code>/SP/services/ipmi</code>	servicestate
<code>/SP/services/kvms</code>	mousemode servicestate
<code>/SP/services/servicetag</code>	passphrase product_urn state
<code>/SP/services/snmp</code>	engineid port sets v1 v2c v3 servicestate

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SP/services/snmp/communities/private</code>	permissions
<code>/SP/services/snmp/communities/public</code>	permissions
<code>/SP/services/snmp/users/username</code>	password role
<code>/SP/services/ssh</code>	state
<code>/SP/services/ssh/keys/dsa</code>	fingerprint length privatekey publickey
<code>/SP/services/ssh/keys/rsa</code>	fingerprint length privatekey publickey
<code>/SP/services/sso</code>	state
<code>/SP/sessions/sessionid</code>	username starttime type mode
<code>/SP/users/username</code>	role password
<code>/SP/users/username/ssh/keys/1</code>	fingerprint algorithm load_uri clear_action embedded_comment bit_length
<code>/SP/users/username/service</code>	service_password service_password_expires
<code>/SP/users/username/escalation</code>	escalation_password escalation_password_expires

注 - show コマンドと set コマンドでターゲット `/SP/serial/host` を指定することは、SPARC サーバではサポートされていません。SPARC サーバでは仮想コンソールが実装され、物理コンソールは実装されません。

例

```
-> show /SP/users/user1
-> show /SP/clients -level2
-> show components
```

start コマンド

start コマンドを使用すると、ターゲットの電源を入れるか、またはホストコンソールとの接続を開始できます。-script オプションを使用すると、yes または no を確認するプロンプトの表示が省略され、yes が指定されたものとしてコマンドが動作します。

構文

```
start [options] target
```

オプション

```
[-h|help] [-script]
```

ターゲット

表 A-7 start コマンドのターゲット

有効なターゲット	説明
/SYS または /CH	システムまたはシャーシを起動(電源を投入)します。
/SP/console	コンソールストリームへインタラクティブセッションを開始します。

例

```
-> start /SP/console
-> start /SYS
```

stop コマンド

stop コマンドを使用すると、ターゲットを停止するか、またはホストコンソールと別のユーザーの接続を終了することができます。stop コマンドを確認するプロンプトが表示されます。-script オプションを使用することで、このプロンプトの表示を省略できます。-f|force オプションは、操作をただちに実行するように指定します。

構文

`stop [options] [-script] target`

オプション

`[-f|force] [-h|help]`

ターゲット

表 A-8 stop コマンドのターゲット

有効なターゲット	説明
<code>/SYS</code> または <code>/CH</code>	正常な停止を実行し、指定したシステムまたはシャーシの電源を切ります。 <code>-f -force</code> オプションを使用すると、正常な停止をスキップして、ただちに電源を強制的に切ります。
<code>/SP/console</code>	ホストコンソールとほかのユーザーの接続を終了します。

例

```
-> stop /SP/console
```

```
-> stop -force /SYS
```

version コマンド

version コマンドを使用すると、ILOM のバージョン情報を表示できます。

構文

`version`

オプション

`[-h|help]`

例

```
-> version
version SP firmware version: 3.0.0
SP firmware build number: 4415
SP firmware date: Mon Mar 28 10:39:46 EST 2008
SP filesystem version: 0.1.9
```

Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法

Storage Redirection CLI は、対話型モードと非対話型モードの両方のコマンド入力をサポートしています。対話型モードは、一連の Storage Redirection コマンドを入力する必要がある場合に便利です。非対話型モードは、バッチ手続きまたはスクリプトを実行する必要がある場合に便利です。これらのモードで Storage Redirection コマンドを入力するために必要な構文は、次のとおりです。

■ 対話型シェルモードの構文

```
<storageredir> <command> <command options> <sub-commands>  
<sub-command options>
```

Storage Redirection CLI を起動して対話型シェルからコマンドを直接実行するには、まず、Storage Redirection クライアントがインストールされている場所に移動し、`java -jar StorageRedir.jar` コマンドを発行して Storage Redirection CLI を起動する必要があります。詳細は、[120 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

■ 非対話型シェルモードの構文

```
$ java -jar StorageRedir.jar <command> <command options> <sub-commands>  
<sub-command options>
```

Storage Redirection CLI を起動して非対話型シェルからコマンドを直接実行するには、シェルプロンプト (\$) で、Storage Redirection コマンド (`java -jar StorageRedir.jar`) と、実行するコマンドをそれに続けて入力する必要があります。手順については、[120 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

サポートされる Storage Redirection コマンドおよびオプション

次の表に、Storage Redirection CLI で発行できる、サポートされているコマンドおよびオプションを示します。

- [表 B-1 Storage Redirection コマンド](#)
- [表 B-2 Storage Redirection コマンドオプション](#)
- [表 B-3 Storage Redirection サブコマンド](#)
- [表 B-4 Storage Redirection サブコマンドオプション](#)

表 B-1 Storage Redirection コマンド

コマンド名	説明
<code>java -jar StorageRedir.jar</code>	<code>java -jar</code> コマンドを使用すると、コマンドウィンドウまたは端末から Storage Redirection クライアント (<code>StorageRedir.jar</code>) を起動することができます。
<code>storageredir</code>	<code>storagedir</code> コマンドは、すべてのストレージリダイレクト操作を実行します。

表 B-2 Storage Redirection コマンドオプション

オプション名	説明
<code>-h</code>	<code>-h</code> コマンドオプションは、コマンド行のヘルプ情報を表示します。
<code>-v</code>	<code>-v</code> コマンドオプションは、Java コマンドのバージョン情報を表示します。

表 B-3 Storage Redirection サブコマンド

サブコマンド名	説明
list	<p>list サブコマンドは、1 つまたはすべての遠隔 SP で現在アクティブなストレージリダイレクトのリストを提供します。</p> <p>構文の使用例: <code>storageredir list [-p storageredir_port] [remote_SP]</code></p>
start	<p>start サブコマンドは、ローカルホストと遠隔ホストサーバの間の指定されたリダイレクトを呼び出します。認証パスワードを入力しないと、システムがパスワードを要求します。</p> <p>構文の使用例: <code>storageredir start -r redir_type -t redir_type_path -u remote_username [-s remote_user_password] [-p storageredir_port] remote_SP</code></p> <p>注 - リモートサーバのストレージデバイスのリダイレクトを開始するには、ILOM に有効な Admin 役割または Console の役割のアカウント指定する必要があります。</p>
stop	<p>stop サブコマンドは、ローカルホストと遠隔ホストサーバの間の指定されたリダイレクトを停止します。認証パスワードを入力しないと、システムがパスワードを要求します。</p> <p>構文の使用例: <code>storageredir stop -r redir_type -u remote_username [-s remote_user_password] [-p storageredir_port] remote_SP</code></p> <p>注 - リモートサーバのストレージデバイスのリダイレクトを停止するには、ILOM に有効な Admin の役割または Console の役割のアカウント指定する必要があります。</p>
test-service	<p>test-service サブコマンドは、Storage Redirection サービスの接続がローカルホストでアクティブになっているかどうかを確認します。</p> <p>構文の使用例: <code>storageredir test-service [-p storageredir_port]</code></p>
stop-service	<p>stop-service サブコマンドは、遠隔ホストサーバへの Storage Redirection サービスの接続を停止します。</p> <p>構文の使用例: <code>storageredir stop-service [-p storageredir_port]</code></p>

表 B-4 Storage Redirection サブコマンドオプション

サブコマンドオプション名	説明
-r <i>redir_type</i>	<p>-r <i>redir_type</i> は、リダイレクト対象のストレージメディアの種類を識別します。</p> <p><i>redir_type</i> の有効なデバイス値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • CD-ROM デバイス: 構文: -r cdrom • CD-ROM イメージ: 構文: -r cdrom_img • フロッピーデバイス: 構文: -r floppy • フロッピーイメージ: 構文: -r floppy_img
-t <i>redir_type_path</i>	<p>-t <i>redir_type_path</i> は、ストレージリダイレクトメディアが保存またはマウントされている場所へのフルパスを識別します。</p> <p>次に例を示します。</p> <p>-t /home/username/JRC_Test_Images/CDROM.iso</p>
-u <i>remote_username</i>	<p>-u <i>remote_username</i> は、ILOM SP へのログインに必要なユーザー名を識別します。</p> <p>次に例を示します。</p> <p>-u john_smith</p> <p>注 - ILOM で有効なユーザーアカウントはすべて、そのユーザーのローカルシステムで Storage Redirection サービスまたはクライアントをインストールしたり起動したりすることができます。ただし、リモートサーバ上のストレージデバイスのリダイレクトを開始または停止するには、ILOM に有効な Admin の役割または Console の役割のアカウントが必要です。</p>
-s <i>remote_user_password</i>	<p>-s <i>remote_user_password</i> は、ILOM SP へのログインに必要なパスワードを識別します。</p> <p>このパスワードコマンドがコマンド行で指定されていない場合、システムは自動的にパスワードの入力を要求します。</p>
-p <i>storageredir_port</i>	<p>-p <i>storageredir_port</i> は、ローカルホストでのストレージリダイレクト通信ポートを識別します。指定されているデフォルトポートは 2121 です。</p> <p>次に例を示します。</p> <p>-p 2121</p>

索引

記号

/SYS, 2

A

Active Directory

certstatus, 47

strictcertmode, 47

障害追跡, 54

証明書の削除, 48

設定の表示と構成, 49

C

CLI コマンド

組み合わせて実行する, 13

個別に実行する, 13

リファレンス, 131

CLI コマンドの種類

SNMP コマンド, 11

一般的なコマンド, 8

クロック設定コマンド, 11

警告管理コマンド, 10

システム管理アクセスコマンド, 10

ネットワークとシリアルポートのコマンド, 9

ホストシステムのコマンド, 12

ユーザーコマンド, 8

CLI コマンド構文

cd コマンド, 131

create コマンド, 132

delete コマンド, 133

dump コマンド, 133

exit コマンド, 133

help コマンド, 134

load コマンド, 135

reset コマンド, 136

set コマンド, 136

show コマンド, 142

start コマンド, 149

stop コマンド, 149

version コマンド, 150

CLI のターゲットの種類

/CH, 3

/CMM, 2

/HOST, 3

/SP, 2

/SYS, 2

CLI を使用するために準備すべき事柄, 15

CLI を使用するための要件, 15

D

default ユーザーアカウント

パスワードを回復するために使用, 21

Distributed Management Task Force

Command-Line Protocol (DMTF CLP), 2

DSA 鍵

表示, 34

H

HTTP または HTTPS の設定

使用可能への切り替え, 31

ターゲット、プロパティ、および値, 32

I

ILOM 2.x

- 2.x スクリプトの更新, 6
- ILOM 3.0 と比較したプロパティ, 6

ILOM のバージョン情報

- 表示, 109

ILOM のリセット, 112

ILOM 設定

- 復元, 99, 101
- バックアップ, 99
- リセット, 106

ILOM 設定のバックアップ

- 準備すべき事柄, 100
- 手順, 100
- 必要な時間, 101
- 必要な役割, 100

ILOM 設定の復元, 99

IP address assignment

- CLI を使用した編集, 28

IP address 割当

- CLI を使用した編集, 28

J

Java Runtime Environment

- ダウンロード, 114

Jnlpgenerator, 115

L

LDAP (Lightweight Directory Access Protocol), 55

- 概要, 55
- 設定, 56

LDAP サーバ

- 設定, 55

LDAP/SSL, 57

- certstatus, 58
- strictcertmode, 57
- 障害追跡, 64
- 証明書の削除, 58
- 設定の表示と構成, 59

P

passphrase

- ILOM 設定をバックアップするために使用, 100
- ILOM 設定を復元するために使用, 102

R

RADIUS

- コマンド, 66
- サーバのデフォルトポート, 67
- 設定, 65
- 設定のために準備すべき事柄, 65

root ユーザーアカウント, 19

RSA 鍵

- 表示, 34

S

Secure Shell (SSH)

- 新しい鍵の生成, 35
- 遠隔接続の確立, 33
- 現在の鍵の表示, 34
- 設定, 33
- 有効化または無効化, 33
- ログインするために使用, 20

show faulty command, 82

SMTP クライアント

- 設定, 91

SNMP トラップ警告, 86

SP のリセット, 112

SPARC システムの診断, 127

SPARC 診断

- POST のトリガー, 128
- 出力の詳細度, 130
- モード, 128
- レベル, 129

ssh コマンド (Solaris)

- SP への接続, 33

SSH 鍵, 44

- 削除, 46
- 追加, 45

SSH 接続, 33

- CLI を使用した鍵暗号化, 34
- 新しい鍵, 35
- 再起動, 35
- 有効化および無効化, 33

Storage Redirection CLI

- アクティブなリダイレクトの表示, 124
- 起動, 120
- クライアントのインストール, 117

- コマンド行のヘルプの表示, 122
- サービスの起動, 115
- サービスの状態の確認, 121
- サービスの状態を確認する, 121
- サインイン認証, 115
- サポートされる ILOM のバージョン, 114
- サポートされるコマンドおよびオプション, 152
- 初期セットアップ, 114
- デバイスのリダイレクトの開始, 123
- デフォルト通信ポート, 115
- モード, 151

strictcertmode, 47

い

イベントログ

- 内容, 80
- 表示およびクリア, 79
- 出力のフィルタリング, 78

う

失ったパスワードの回復, 21

え

遠隔 syslog 受信側, 81

遠隔電源制御

- CLI コマンド, 126

遠隔ホスト

- Storage Redirection CLI, 118
- 管理, 113
- ストレージデバイスのリダイレクト, 118
- ストレージデバイスのリダイレクトの開始, 123
- ストレージデバイスのリダイレクトの停止, 124
- ストレージリダイレクト, 114
- デフォルトネットワークポートの変更, 125
- 電源状態コマンド, 126

く

クロック設定, 77

け

警告

- 警告管理用の CLI コマンド, 89
- 電子メール通知
- SMTP クライアントの設定, 91
- 電子メール通知の生成, 91

警告テスト

- 生成, 88

警告ルール

- CLI コマンド, 89
- 使用不可への切り替え, 88
- 設定, 87

復元操作

- CLI コマンド, 102
- 機密データの要件, 100
- セッションの一時的な停止, 102
- パスフレーズの要件, 102
- 必要な時間, 102
- 必要なユーザー役割, 101

こ

コマンドのプロパティ, 6

- ILOM 2.x の場合, 6
- ILOM 3.0 の場合, 6

コマンド行インタフェース (CLI)

- 階層アーキテクチャーの使用, 2
- 概要, 2
- コマンドの出力オプションのフィルタリング, 12
- コマンド構文, 7
- 使用するために準備すべき事柄, 15
- ターゲットツリー, 5

コマンド文字列, 8

コンポーネント

- 監視, 73
- サービスへの復帰, 72
- 有効化および無効化, 72
- 管理, 70
- 取り外し, 71

さ

サービススナップショットユーティリティ, 83

サービスプロセッサ

- リセット, 112

サインイン認証

- Storage Redirection CLI に必要, 115

し

システムインジケータ

- 表示, 76

システムコンポーネント

- 表示および管理, 70

システムの問題

診断, 83

システム警告

SMTP クライアントの設定, 91

管理のためのコマンド, 89

削除, 88

生成, 88

設定, 87

設定のために準備すべき事柄, 86

システム識別子

割り当て, 24

実際に来ていること

証明, 21

障害管理

障害の発生したコンポーネントの表示, 82

障害追跡, 83

消費電力

監視, 93

許容電力の監視, 97

個々の電源装置の監視, 96

システムの合計電力の監視, 95

実際の電力の監視, 96

使用可能な電力の監視, 97

用語, 94

消費電力の管理

電力の監視

show コマンド, 97

証明書の状態, 47

証明書の認証, 47

シリアルポート設定

pending および active プロパティ, 30

ターゲット、プロパティ、および値, 31

表示と構成, 30

シングルサインオン, 39

す

ストレージメディアのリダイレクト

準備すべき事柄, 119

必要なタスク, 118

せ

製品識別インタフェース, xix

センサー測定値, 75

た

ターゲットツリー, 5

つ

通信設定

設定, 23

設定のために準備すべき事柄, 24

て

デフォルト設定

リセットオプション, 106

電源状態コマンド, 126

電源投入時の自己診断テスト

診断トリガー, 128

電力ポリシー

設定, 98

と

ドメインネームサービス (DNS)

ターゲット、プロパティ、および値, 29

ロケータサービス, 53

設定, 29

ね

ネームスペース

SP によるアクセス, 3

ネットワークポート 2121

ストレージリダイレクトのデフォルトポート, 125

ネットワーク設定, 24

DNS, 29

IP アドレスの編集, 28

pending および active プロパティ, 24

システム識別子, 24

シリアルポート, 30

ターゲット、プロパティ、および値, 27

表示と構成, 26

ホスト名, 24

は

パスワード

失ったパスワードの回復, 21

変更, 40

バックアップ XML ファイル

内容の例, 103

- 編集するために準備すべき事柄, 103
- 編集、パスワード, 105
- 編集、役割, 105
- 編集、ユーザーアカウントの追加, 105
- 編集、例, 104

バックアップ操作

- CLI コマンド, 100

ふ

ファームウェア

- イメージの更新, 110
- 更新時の回復, 112
- 更新するために準備すべき事柄, 108
- 更新セッションのトラブルシューティング, 112
- 更新のために準備すべき事柄, 109

部品情報, 70

プロパティ

- ILOM 3.0 と ILOM 2.x の比較, 6

ほ

ホスト名

- 割り当て, 24

ゆ

ユーザーアカウント

- 個々のセッションの表示, 44
- 個々のユーザーアカウントの表示, 42
- 削除, 41
- 設定, 39
- セットアップ, 19
- 追加, 40
- パスワード, 40
- 役割, 41
- ユーザーセッションのリストの表示, 43

ろ

ログアウト, 21

ログイン

- root ユーザーアカウントの使用, 19
- 初回, 19
- 一般ユーザーログイン
 - 一般ユーザー, 20
- 準備すべき事柄, 18


FUJITSU